

送し本年二月上旬迄には其兵數既に四萬餘に達し、猶必要の場合には二十餘萬の兵士を増遣すべし計畫を爲し居たり、

之れと同時に、露國は旅順浦鹽兩軍港の砲臺増築に晝夜を分たす、工事を急ぎ、環塞、遼陽、其他各要地にも砲臺を修築し、義勇艦隊及西北利亞鐵道に依りて盛に兵器彈藥を絶東に輸送し、十月中旬に於て既に野戰病院を積載せる十四輛の列車は大至急本國を出發せり。

知るべし、露國は毫も妥協に意なく、専ら武力を以て日本を屈從せしめんと企圖したるものなるを、

露國の軍事的活動は、本年一月下旬より二月に入りて益々急調に赴き、一月二十一日には旅順大連より歩兵約二大隊砲兵若干を韓國北境に送り、同じく二十八日にはアレンキシエフ總督は、鴨綠江附近に在る露國軍隊に向つて作戰命令を下し、二月一日には浦鹽軍港知事は本國政府の命令により、何時にても戒嚴令を布き得るに至り

たるを以て、在留日本人にはバロフスクへ退去の準備を爲さしめんとことを、在同處日本貿易事務官に要求し、旅順に於ける露國軍艦の有力なるものは、修繕中に屬する一戰艦を除くの外は、盡く外海に出て、其陸兵は遼陽より陸續鴨綠江方面に向つて進發せり、誰か露國に戰意なく、又戰備なしと云ふものぞ、日本は事態切迫し、此上一日の猶豫を容れざるを以て、遂に已むを得ず、其無用に屬する談判を斷絶し自衛の爲めに必要の處置を取るに決せり、故に戰爭を挑發したるの責は日本に在らずして却て専ら露國に在り。

且夫れ日本は二月六日に於て、露國と惡案の談判を絶了し、露國の爲めに侵迫を蒙むれる地歩を防護し、且其利權を擁護する爲め、自ら最良と思惟する獨立の行動を取るべきこと、並に外交關係を斷絶し、公使館を撤退する旨を露國に通告せり。獨立の行動は一切を意味す、敵對行為の開始亦固より其内に在り、假に露國に於て之を解すること能はざりしとするも、日本は露國に代はりて誤解の責に任すべき理



由なきことは勿論なり、將又宣戦公布は敵對行為開始の必要條件にあらざること、  
 國際法學者の悉く一致する處にして、現に近時の戦争に於ては、宣戦公布は交戦開  
 始後に於てするを其常とせり、故に日本の行動は國際法上に於ても毫も非難すべ  
 點あることなく、況んや其非難の露國より來るに於ては、寧ろ頗る奇と云はざるべ  
 からず、何となれば露國自ら宣戦の布告を爲さずして、直に戰鬪行為を行ひたるこ  
 とは歴史上其例證極めて乏しからざるのみならず、千八百八年に於ては實に外交關  
 係の斷絶前に於てすらフィンランドに出兵したればなり。

讀露政府公文(狂詩)

爾毛人

一讀抱腹笑。再讀淚欲翻。出自鬚男口。盡似泣女言。泣言爲肴飲。  
 足販祝勝筵。強國嫌流血。弱敵沈我船。言念平和杯。欲粧敗軍  
 憐。燒艦人逃去。不流血必然。

第十章 第二回旅順の攻撃

(一) 日本海軍の花

水雷艇と云ひ、驅逐艇と云ひ、短兵急に敵を衝き、萬死ありて一生を期せざる點に於  
 て共に日本海軍の花と稱せらる、花は櫻、人は武士たらんことを希ふは、日本國民の  
 理想にして「咲と見ば勇ましく散るを武士の惜しまれてこる櫻なりけり」とは、二千  
 年來養ひ來りたる武士の精神なり、蓋し水雷艇驅逐艇は共に海軍の粹を抜きたる武器  
 にして、我輩は之を以て近世發達したる最新式の機械と云はんよりは、寧ろ日本海軍  
 の最も善く表彰せられたる軍人の魂と言はんを欲す、曾て米西戦争に於て「吾れに精  
 鋭なる水雷艇三隻を與へよ、半徑の範圍内に於て吾れ善く世界の最大戰艦を覆滅す  
 べし」と叫ひたる、キンポールは、日本海軍を稱賛して「彼等は方程の如く訓練せら  
 れ、方式の如く繰繰せられたる水兵と謂はんより、水雷艇は全く彼等の爲めに作られ



「たるものなり」と言へり。

蓋し水雷艇、驅逐艇は恰も敵の懐に飛び込んで唯雄を決する匕首に喩ふべし、長刀は怯夫の好んで武勇を衍ふ所のものなりと雖も、匕首は膽冷靜にして易水よりも寒く壯士一度ひ去つて復還らざるの慨あるにあらざるよりは之を使用すること能はず、二十世紀の戦争は兵器の戦争にして、殆ど士氣を用ゆるの餘地なからんとする時代に於て唯此水雷艇と驅逐艇のゐるころ、實に日本武士の高潔無垢にして死を見ると歸するが如きの元氣を發揚するに足るなり、特に今回の海戦に於て毎に水雷驅逐の艇隊が遠大の効果を奏し、世男の海軍をして驚嘆措く能はざらしむるを見る毎に、我輩は我海軍の兵士將校が暗夜海上に泛び、寒威凜烈と戦ひ、波浪洪濤と戦ふの困苦と艱難とを想見せずんばならず、左れば我輩は此に旅順第二の攻撃を記する前に當り、水雷驅逐艇乗組員苦心の情態を記すべし。

既に身を海軍に措き、海上生活を爲す以上は、波と戦ひ寒氣と戦ふことの困苦は固より覺悟の前なりと雖も、水雷艇と云ひ、驅逐艇と云へば勿論漂渺たる一小舟にして、

波は常に甲板の上を打ち越すに任かせ、膝より下は常に潮の洗ふ所となる、若し寒氣烈しき夜に於ては甲板の上は鏡の如く一面の氷となりて、唯さへ足躓きて滑らんとするに、舟は波の爲めに前後左右に翻弄せられ、艦に居るものは舳に居るもの、頭上を瞰る、其危険謂ふへからず、而も勇敢なる兵士は其上に立ちて善く各種の任務を盡す、

其苦心中々に陸上の人の想像にたも及はざる所なり。艇中には無論一點の火氣なく、唯且つ驅逐艇の任務は多く月黒く波高き夜間なれば、艇中には無論一點の火氣なく、唯一の羅針盤を生命の綱と頼み暗夜を航海するを以て、動もすれば友艦を見失はんとする患あり、一舵を取り損すれば味方の舟と衝突することあり、左れば艇に當りて一層高き波浪の影を認めて、アツヤ友艦の眞横に衝突せしかと膽を冷せば、波は艇を潜りて遙か後の方に澎湃として崩る、幾度か水鳥や波魚に心を驚かされつゝ、眼は暗にも鼻の如く開き、絶へず海上を凝視するが上に、連日精神を勞するが爲め、水雷驅逐艇隊



の乗組員は、多く不眠症に罹り、酒を飲めばとて、プランターを仰げばとて容易に眠ること能はず、遂にはモルヒネの力を借るに至るは珍らしきことにあらず。

又寒き夜は軍艦なれば、暖爐あり、ステムパイプありて暖を取ることを得べしと雖も、水雷艇又は驅逐艇に至つては之等の装置なく、寒ければ火鉢に炭火ををこして暖を取るに過ぎざれば、火鉢を擁せんには前にも云へるか如く、艇は常に波浪に揺られて艦の人が舳の人の頭を曝ると云ふ始末、直に火災を起すの憂あり、波の稍穏かなるときに於ても炭火は直に室内の空気を炭化せしむ、偶舷窓を開かんとせば波浪は怒つて室内に突入せんとす、暖爐は到底艦内に於ては望むべからず、艇隊は終日終夜寒風に吹かれ、艇内の食物は皆氷を噛むが如く、甚しきに至ればアルコールの上に泛べたる羅針盤の磁針さへ氷結して方位を定むること能はず、汽罐の熱湯を持ち来て之に注ぎ、炭火を以て之を温め漸く氷を融かしむることあり、又或る時は送風器の穴より雪花吹き入り、士官室の床は雪一面にして厚さ三寸に至ることあり、戦場なればこり

心は戦闘に奪はれ、寒威も波濤も意とするには足らざれば、若し陸上なれば艦艇内の生活は到底思ひも寄らぬ任務なるべし。

左れ忠勇義烈なる我が海軍の將士は、斯の如き艱苦も意とせず、唯敵の堅艦を認め、て襲撃し、一發の水雷を以て敵艦を粉碎せんことを想ふ、而して一朝敵を逸したることは、身を投じて艇内に横臥し、胸部を啓きて敵彈の來るを俟つ、其豪膽不敵之を世界の海軍に求めて何の處にか其匹儔を得ん、我が海軍を露國の艦隊に比して戦闘艦、巡洋艦は之を別として、驅逐艇は露國の艦隊遙に勝れりと云ふに反し、毎回毎戦我が水雷驅逐艇の爲めに驅け廻さるゝと云ふに至つては、我輩は海軍の勝敗は兵器の優劣にあらずして士氣の軒輕に歸せんと欲す、之れ我が艦隊が世界に雄飛し、日本海軍を飾装する花なりと云ふ所以也。

(二) 速鳥、朝霧の奮闘

二月十六日午後十時東京着、東郷聯合艦隊司令長官發にて左の公報あり。



二月十三日、驅逐艦の一隊、大風雪を冒して旅順口に向ふ、途上各艦見失ひて相分離せしも、司令艇速鳥及び朝霧のみ旅順口外に達し、朝霧は十四日午前三時港口を偵察し、盛んに陸岸砲臺及び哨艇の砲火を被りしに係らず、黒煙を揚げ居る一軍艦に對し、水雷を發射し、且つ敵の哨艇を砲撃して無事歸來せり、速鳥は同日十四日午前五時、旅順口外に達し、港口に近接し、敵の二艦を暗中に發見すると同時に其の砲火を受けたるも、直ちに其の一艦に對し、水雷を發射し、其の爆發を確認して無事歸來せり、速鳥朝霧の勇敢なる襲撃の效果は、暗夜のため之を知るに由なしと雖も、少くも敵をして益す戦慄せしむるの大功ありたるは疑ひ無しと認む。

第一次の夜襲已に危険なり、而も我が海軍は斷して之を行へり、敵は已に警戒せり、敵は隅なく探海燈を點して我が不意打を戒め居るは當然なり、而も此警戒を冒して二次、三次奇襲を行ふに至つては、危険中の危険、之を大膽とや言はん、剛毅とや云はん、

世界各國の驚嘆するも當然なり、而して此大功を奏すると同時に、我輩が前に説明したる驅逐艦縦隊の苦心を察するときは、更に一層の忠勇と剛毅とを感せざるを得ず。此夜は陰曆二十七日、月黒く天墨を流すが如く、黃海の海上は濁浪天に排し、物海灣より吹き送る風は、二月に入りてより暴風となり、雪或は霰を交へて航海常に危険なるに、二月十三日は連日の大暴風と飛雪とを受けて朔風骨に徹し、暗さは暗く波の音凄まじく、一隊の驅逐艦は互に友艦を見失はじと警戒し、旅順を指して進行するに、波は益荒れて運動自由ならず、遂に各艦相失し、個々分離するに至りぬ。

左れど心指す處は旅順の敵艦を襲撃するにあり、離れくとなりたる我が驅逐艦の一隊は、指針の示す方に従ひ、航行する程に午前三時と思頃、一隊中の朝霧は打ち越す波にも弛まず、萬死の中を冒して漸く旅順の港口に達しぬ、此時乗組員の心は如何想ふに天にも上りたる心地したることならんが、虎兇を獲んとして僅に虎穴に近きたりと思ふ程もなく、黄金山、老鉄山の探海燈は、甲板上の塵埃をも照さん計りに朝霧



の上に閃めけり、續きて旅順口左右の砲臺よりは釣瓶かけに大砲を打ち始めたり、搦て、加へて港口に見番りし居たる敵の哨艦も速射砲を向けて我を打ち沈んとす、朝霧も今は之迄なりと覺悟を定め、冥土の途連れに何れにもあれ善き敵御坐なれど、面も向くへからざる砲彈を冒し、彼か是かと尋ぬる内、朝霧の前面に當りて夜目にも知るへき敵の一艦、盛に黒煙を揚げ居るを見るや否や、之なりくと、切つて放せし魚形水雷は確に手答へあり、味方は不思議を上げて退かんとする所に、敵の哨艦は朝霧を目掛けて盛に放火を開くに、味方は之亦往がけの駄賃なりと哨艦に向て砲撃を加へて無事引揚げたり。

朝霧の引揚げたる後、我が驅逐艇の一艦速鳥は、午前五時漸くにして旅順口外に達し、港口近く接近する程に、暗中に認め得たる敵の二艦、此處ぞと一發魚形水雷を發射せんとする時早く、敵は又もや我驅逐艇の近づくを見るや否や、盛に砲火を開き、速鳥を圍んで打ち沈んとするを、速鳥は飛鳥の如く飛雪の中を駛せ廻りつゝ、敵の一

艇を目掛けて、魚形水雷を放ち、轟然爆發、闇潮の騰上するを認めて歸來せり。斯くて速鳥、朝霧の二艦は十四日午〇〇時、我海軍の根據地に引揚げたるが、前に風雪晦冥の爲め相失したる他の艇隊は同日無事根據地に引揚げたり、此海戦各艇互に見失ふの不幸なかりせば、我驅逐艇の奏功は實に目醒さるものありしならんに、闇黒と風雪は遂に我が計畫を破り、豫定の効果を収むること能はざりしと雖も、朝霧、速鳥の二艇が、港口近く攻め入り、僅に三百噸許の小艇を以て、敵の大軍艦を驅け難まし、二發の魚形水雷が確に爆發したるを見澄まし、脱兎の如く歸來したる機敏の働きは、海戦史上殆ど其例を見ざる激戦にして世界の耳目を驚かしたるは勿論、東郷司令長官が、

速鳥朝霧の勇敢なる襲撃の効果は、暗夜のため之を知るに由なしと雖も、少くも敵をして益す戦慄せしむるの大功ありたるは疑なしと認む  
と報告せしは、誠に道理にして昔源義経が風浪を冒して八島に渡り、平家の一族を



大物の浦に襲撃せし大膽不敵にも増して、我が驅逐艦隊の威名を中外に輝したり。

(三) 後聞

偕ても速鳥、朝霧の二艇が、水雷を發射せりと云ふ。敵の艦体は果して何物なりしか、當時海上暗黒風雪を交へて咫尺を辨せずと云へば、其何艦なりしかは、勿論不明なりと雖も、其後各新聞紙の推測を記すれば左の如し。

▲速鳥の大猛進 十四日午前三時旅順に達し勇敢なる突撃を試みたる速鳥は、五百米突より進みて、一百米突の距離に迫り、充分敵の舷門を見得るに至りて初めて水雷を發射せり、水雷は敵艦に命中して、彈丸の飛躍する所迄確に見届け、根據地へ歸來せしなりと。

▲佐世保通信 東郷聯合艦隊司令官長の〇〇〇〇驅逐隊に對して、第二回旅順攻撃の命令を下したるは紀元節の當日なりき、〇艦隊は先きに〇〇〇〇に向ひしも、一敵に會せざりしを遺憾とせるとして、此命令に接するや士氣奮躍、同夜某地點を出でた

り、最初〇艦隊は皆同一の航路を進みたりしも、十三日より渤海の大風雪に會し、晦冥咫尺を辨せず、其〇〇〇〇に廻りし頃は各艦分離して所在を失ひたるも、朝霧は十四日午前三時、速鳥は同五時に旅順港外に達し、密に敵情を物色したるに、唯諾威の商船一隻を認めたる外、敵艦の有無を確かめ得ざりしに、俄然我艇に發砲したるものあるより、始めて敵艦の尙は港外に在るを察し、奮進一番各々〇發の魚形水雷を發射して其爆發を突留めたり、思ふに是れ、ハヤリンなりしか如し、斯くて兩艦は十六日無事〇〇〇〇に歸りしが、途中分離せる諸艦は其前日を以て、何れも〇〇〇〇に着し居れり、尙は襲撃の際、敵の驅逐隊同志打ちを爲し、三隻損害を受けたるが如し。

▲驅逐艦に擊破されし露國軍艦 去る十四日我が驅逐艦の旅順を襲撃せし際、敵の軍艦に向つて水雷を發射したるが、此水雷に中りて破壊されしは、露艦中にて二十五哩の最速力を有する三千二百噸の巡洋艦ハヤリン號なりとの情報ありし由、同艦







### 第十一章 日進春日の到着

敵は已に旅順に於て東洋艦隊の中堅と頼みたる堅艦を失へり、仁川に於てコレーツ、ワリヤークの艦れ墓なき最後を遂るあり、敵の海軍力は刻一刻と、衰亡し行くに反し、我が新進勇武なる海軍は又新に一大勢力を増加したり、今は英國に於て購入したる装甲巡洋艦日進春日の到着なりとす。

抑も此二艦はアルゼンタイン共和國が伊太利ゼノアのアンサルド兄弟會社に注文して構造せしめしものにて、一をソウアダヴィアト云ひ、他をモレンと云ひ、其の外形は兩者全く相等しく噸數速力其他も殆んど異なる處なく、只砲力排列及び其弾力に就ては稍や異なる點なきにあらねど、兩艦共に其戰鬥力に至りては決して淺間常磐に譲ることなく、其防禦力の強きは殆んど三笠に髣髴たる處あり、而して外觀は煙突の形状及び船尾の構造など著しく我艦隊の常形と異り、總べて伊太利式なるを以て帝國艦隊

に一異彩を放てるものと云ふべし。

斯くの如き堅艦は軍國多事の際に當つて我が親愛なる英國政府及び其人民の熱心同情によつて我帝國の購入する所となりたり、茲に是れが購入の順序を述べんに、當初智利は此二艦を賣らんとして其旨を英國に申込みたり、然れども同艦は伊太利式に則て造りしものなれば、英國の海軍經費と其型式を異にするが故に之を謝絶し、我政府も又英國と同一の理由をもつて其議を斥けしが其後幾程もなく東洋の風雲倏忽として不穩を告ぐるに當り、我政府も大に鑒る所あり、一旦斷絶せし智利との賣買交渉を恢復し、兩艦購入の商議を開始せしも、何故にや急に之を纏むるを欲せず若干年を期し年賦を以て之を購入せんとの交渉に在り居たる内、露國政府は急に横合より一千八百萬圓を以て買入れ尙代金は廿四時間に支拂はんとを申入れたり、中原の鹿は果して何れの手に落つるか、此一刻を争ふ危急の場合に當つて慧眼なる英國政府は一千八百七十五萬圓を以て賣買の約を整へ、之れを日本へ引渡せし次第なりとぞ。



既に賣買は終結せり、我政府及國民の憂慮は解けたり、而して第二の憂慮は我か官民の胸間に蟠り來れり、其憂慮とは何ぞや、航途の不安之れなり、然れども此兩艦を我帝國に廻航するに就いてはアンサルド會社と殆んど同一のものなる英國アームストロング會社萬事を幹旋し、廻航員は全部同會社の手を以て募集せられたるが、我海軍士官の監督として之に乗組たるものは實に左の八氏なりき。

- |        |        |       |      |
|--------|--------|-------|------|
| 佛國公使館附 |        | 獨逸駐在中 |      |
| 佛國駐在中  | 竹内大佐   | 全上    | 鈴木中佐 |
| 英國駐在中  | 松村少佐   | 全上    | 田所少佐 |
|        | 丸山大尉   | 全上    | 筑土大尉 |
|        | 加茂機關中監 | 全上    | 鈴木軍醫 |

又會社にて募集の結果は英伊兩國人を以て之に充る事とはなれり、茲に可笑かりしは應募員中に露人又は芬蘭人などありし事にて、一艦の乗組員百二十余人、英人は水器部に當り伊人は機關部に當り、日進には英國豫備海軍大尉リー氏艦長となり、春日には

英國豫備少尉ベインタカ氏艦長とし、其他士官には連轉士五人、醫士一人、鉄砲係一人づゝを兩艦に乗組ましめ、伊國人の親厚なる同情歡送を受けつゝ、ゼノアを發したるは實に明治三十七年一月九日午前一時の事なりき。

是れよりして航途の危険は愈々甚だしからんとせり、其ゼノアを拔錨するに先立ち平和破裂の噂は全歐に喧傳せられ、露國の艦隊は途に要して我兩艦を遊撃せんとて已にチユニス灣に近きツイゼルナ灣に入り我を待ち居る由さへ耳にするに至れり、然れども春日は日進よりも一年前に構成し回航前殆んど工事完成したれど日進は未だ落成せざりしを強て航行せしめしものなれば、内部の構造など十分に手の届かざりしも萬更世間の噂の如く途中にて武装せしにはあらず、砲力排列の如きは全く整ひ居たりしなれば之れを操縦する人だに乗組み居らんには十分敵艦に硝薬の膳蓋を爲し難きにあらざりしも、奈何多數の乗組員は元來外國人の事なればイザ火蓋を切つて戦ふ場合には到底倚みとならず、兩艦に乗組める日本の勇士は悉く死を決し、萬一の場合には只々國



家の名譽と利益とを全ふせんと百尺艦頭に眩せん計りなる旭旗を掲げ只管極東への航程を急ぎたり。

斯くて同月十四日にポートセットに入るや、露艦オーロラは水雷驅逐艇七隻を率ひて我れより先きに在り、ドミトリドンスコイは已に蘇士に赴き、オスラビヤ亦同日午後に入り來れり、其邊にて購讀せし新聞紙に依れば日露談判は殆んど破裂せしものゝ如くなるにぞ、我艦上の人々は氣が氣ならず現に敵國軍艦は目前に在り、何時開戦とならんも測り難く、愈々砲火を交ゆる曉は、艦體を敵手に渡さんば残念なれば自燃して艦體と共に千尋の海底に沈まんものと、斷腸の思ひに時刻を過したるが、案じたる程にもあらで露艦は別段示威運動を爲す事もなく、甚だ訝しき態度にてありしが、畢竟敵に戦意なかりしものと察するも敢て臆測にあらざりし、然れども我艦上の人々は尙ほ不安なるを思ひ、先着の春日は急速に石炭を積込み未明に其地を去り、後れて入來りし日進には己が艦に積込まんとし石炭を積ませ此所を立去りたり。

るれよりして同十六日兩艦は蘇士に入りたり、此時已にドンスコイは此所に在り春日は強膽にもドンスコイの後方に投錨し日進の到るを俟つ程に、日進は十時間遅れて此所に着きぬ、同艦亦ドンスコイの前方に繋れり、此時速力迅快の一堅艦黒烟を吐きつゝ、入來り日進の前方に繋留せり、此堅艦は即ち英國巡洋艦キング、アルフレット號なり、我兩艦露艦を狭んで繋泊し英艦又其前方にあり、其光景已に奇觀なり、其間深長なる意味なからざるを得んや。

蘇士を出發するに當り日進は又もや遅れて出發せしが、春日は亞丁にて石炭を積込みし上ゴロンボへ入りたるより、此故をもつて日進の方早く入港することゝなれり、此地よりは次第に氣候暑さを増すをもつて、英伊兩國人の内幾十人を上陸せしめ、之れに代るに亞刺比亞人を以てし、新嘉坡を指して出發しぬ。

越へて二月二日兩艦は新嘉坡へ入りたりしが、三井物産會社の手にて石炭の積込みを爲す事とせし處、三井にては沖積みなるべしと思ひ、夫れ一準備を爲し居たるに、



兩艦は又何時にても出發出來得るよう棧橋横付けとなさんとし、而して日進の艦長リ  
 一氏は友人を訪はんとて上陸したれば、ろれやこれやにて積込みの手筈齟齬し、斯く  
 て翌日に到れば人夫の同盟罷業起り石炭運搬の爲めに働くもの一人もなく、茲に於て  
 一方ならぬ困難を極めしも、其翌日に至りて英國の會社にて春日の石炭輸入を爲し、  
 日進は三井が引受け、幸じて五日より積込みを始むるに至れり、聞く所によれば獨逸  
 の手にて某會社の煽動せし爲め、此の如く手違ひを生じたるものなる由、漸くにして  
 兩艦は此窮乏を凌ぎ、船員はホッと一息つく間もなく本國より大に至急直行すべしと  
 の飛報に接しぬ、豫て期したる事ながら借ては愈々〇〇〇切迫せしものならんと急速  
 準備を整へ同月〇日午前一時兩艦均しく此地を抜錨し、途上風波の爲めに兩艦互に姿  
 を見失ふに至りぬ、初め兩艦は互に待合せて日本に入港する筈なりしも、爾來相逢ふ  
 こともなく、心細くも航海を續け、日進は劍崎にて信號によつて始めて自艦の先着  
 なりしを知りし程なりし、左れば日進は二月六日午前九時三十分横須賀に安着し、春

日はるれより少しく遅れて全日午前十一時三十分無事安着したり、而してオスラビヤ  
 亦午后に入港し、茲にて始めて仁川旅順の捷報を知り、兩艦乗組の我勇士は狂せん計  
 りに喜びたるは左もあるべき事なり。

此勇壯快絶なる回航員諸氏に對し東京市民は滿腔の熱誠を凝ぎ、尾崎市長等の主唱に  
 よりて二月十九日日比谷公園に於て一大歡迎會を催されたり、當日正賓として招待  
 されし人々の姓名は左の如し。

日進、春日回航委員長

ボ イ ル

▲日進乗組▼

- 艦長 ソー
- 一等運轉士 フヒンチエツト
- 二等同 ヒール
- 三等同 シールド

▲春日乗組▼

- 艦長 ペーンスター
- 一等運轉士 ニコルス
- 二等同 フリーマントル
- 三等同 ホワイト



四等同 ミード  
 五等同 エツク  
 機関長 ベツシー  
 機関士 スコムバリニ  
 同 ホントレモリー  
 同 ズワチノ  
 同 アグラード  
 同 コメス  
 主計 パーカー  
 掌砲士 ミチユリー  
 電氣士

四等同 メツセレジャー  
 砲術長 ベーンスター  
 機関長 ギーセツブ  
 機関士 ロベルト  
 同 オレシー  
 同 ミセル  
 主計 モスカラリー  
 電氣士 マグニー

海軍大佐 竹内平太郎  
 海軍中佐 鈴木貫太郎  
 海軍少佐 田所廣海  
 海軍少佐 松村純一

海軍大尉 丸山壽美太郎  
 海軍大尉 筑土次郎  
 海軍機関中監 賀茂殿雄  
 海軍大軍醫 鈴木徳次郎

▲獨逸皇帝（日進春日）兩艦を批評せらる 兩艦の未だ日本に買取せられざるの時獨逸皇帝は、圖面により同艦を見て曰く、朕はアルゲンチン國の一巡洋艦は、目下各國海軍に於て採用する型式中、其比なき最良型式の装甲巡洋艦なりと見做す、朕の該艦に對する判定は、正當なりと思惟す、又アルサルド造船所は、同艦の造出を以て其大成功を遂げたるものなり、同艦構造の完全なるは、朕に於て間然する所なし、汝はアルサルド諸員の、朕に謁したる好意に對し、朕が深厚なる感謝を傳へよ、又朕はアルゲンチン國海軍に對し、其優秀なる艦型を得たるを祝すと云へり。

斯く精良なる新式堅艦の歸着は正に我帝國の海軍に一大勢力を加へしものにして、其新進の英氣が如何なる機會に於て發揚せらるゝか、乞ふ後日の戦況に徴して知るを得べし。



### 第十二章 第三回旅順の攻撃

#### (一) 露國政府の夢想

二月二十五日聖彼得堡に於て左の公報發表せらる。

日本の戰艦四隻と運漕船二隻とは、昨夜旅順口に於て轟沈せられたり。

之れ露國に取りては破天荒の吉報なり、日本の戰艦四隻が轟沈せらるると云ひ、運漕船二隻破壊せられたり云ふ、之れ疑もなく露國の大捷利なり、露國々民の歡喜知るべき也、聖彼得堡の市民は早朝より、冬宮の前に蟬集し、更に詳細なる情報に接せんことを希望し、アレキシーフ總督の報告を今や遅しと俟ちつゝ、遂に皇帝皇后兩陛下が宮中の彼方此方の廊下を往來せらるゝを拜し、人民は露國大捷利、兩陛下の萬歲を祝したるが、一面には市街各所の新聞社前人の山を築き、大捷利の號外を手にして狂喜するもの、通行の軍人の手を握り露國軍人の萬歲を叫ぶものと相雜踏し、中に

も可笑しきは、大捷利の號外を手にしたる馬車の御者が、御者臺に上りつゝ、號外を反復誦讀し、他の馬車に衝突するを知らず、一場の喧嘩を惹起し、鉄拳將に下らんとして端なく相手方の新聞紙號外を見、喧嘩は直ちに中止せられ、兩者は懽爾として更に號外を熟讀しつゝ、左右に分れたり云ふ。

斯る有様にて彼得堡の人民は狂喜雀躍、情報の至るを俟つ程に、午後に至りて英國通信の報告は至りぬ、曰く「戦争の結果は日本の勝利にして露國の敗なり」と、此報道は今迄味方の大捷利を信したる露國民には、少からぬ恐懼と疑惑を興へぬ、或る者は曰く之れ或は事曰く之れ例の日本最良の英國流報告なり信するに足らずと、或る者は曰く之れ或は事實ならん、再度の情報の遅さこそ訝かしけれど、衆論囂々、市中更に騷擾を極めたるか、アレキシーフの報告來らばこそ、晩に及ふも未だ來らず、俟ち勞れたる人民は一人去り、二人去り、晝間夢の如き報道に狂喜したる景氣は、今は何處へやら消散し、甚だ力振けて見へしが、明くれは二十六日左の如き戦地の報告は露都に達しぬ。



二月廿四日午前二時四十五分、日本の水雷艇隊は燃料を積載せる數隻の大汽船を港口に沈め、以て出入口を塞ぐの目的にて再び旅順を攻撃したり、

右汽船の中、一艘は老虎半島附近に於て、又一艘はゾルダンケル山附近に於て我砲火の爲に破壊されたり、ペルイ山及砲臺より日本水雷艇に對し、砲撃は天明迄繼續したり、曉天に至り四隻の日本汽船灣内に破壊せられ居るを發見せしが、此時八隻の日本水雷艇は、海上に待受居たる日本軍艦所在の方向に馳せ行くを見たり、

破壊船の乗組員はボートに救助せられたり、其内若干は多分溺死せしなる可く、其他は日本水雷艇に救上げられたり、港口の通行は依然として自在なり、日本汽船一艘尙灣内に燃焼しつゝあり、爆發物は尙灣内に浮漂せり、二個より成る日本の艦隊遠距離に見ゆ、

前に追撃の爲め派遣せられたる露國巡洋艦三隻は、其目的を達せず之を呼返したり、露國側には何等の損傷なし。

是に於て露國人は、日本戰艦と運送艦を撃沈したりとの報道は、却て味方の軍港を封鎖する閉塞船なることを知りぬ、先の勝利と思ひしことは、味方か袋の裡の鼠とせらるゝの計なることを悟りぬ、之れ俚俗に所謂海底の鱗螺が他の魚族に向て、漁師の網を免るゝ奇計を誇りつゝ、首を出せば身は却て魚屋の店頭賣臺の上に在ることを知らざりしと同しく、墓なき報道に誤れつゝ、一場勝利の夢を見たる露國々民の心の中へ、う氣の毒なれ。

(二) 大膽なる我が海軍の計畫

露都にては其國民が泡の如き報告に、墓なき夢を見つゝありし間に、日本にては十六日午後八時五分、上村第二戰隊司令の報告は到着せり。

我艦隊は總て豫定の通り行動し、二月二十三日夕、旅順方面に近づき、旅順港口閉塞の任務を有する特別運送船隊、並に其乗組員收容の任務を有する水雷艇隊を放つ、翌二十四日午前十時豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會す、港口閉塞の状況は、報



國丸は港口左側燈臺下に、武州丸は其外方に至り各自から破壊沈没、天津丸、武陽丸は老鐵山の東に至り自ら破壊沈没、仁川丸も亦同様自ら沈没す、以上五隻の乗員は總て收容し得て無事なり、我驅逐隊水雷艇隊も總て無事にして、港外にバーン、ノヅ井ツク及敵の驅逐艦四五隻あるの報告を得たるを以て、同夜我驅逐隊水雷艇隊を分つて旅順口大連灣及び鳩灣の偵察襲撃を命せらる。

艦隊は迂路を航し廿五日午時七時、豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會合せしむ、未だ其戦況を詳かにするを得ざりし、其れより本隊は旅順口に向ひしに、港外左方に當りバーン、アスコツド、ノヅ井ツクの三隻徘徊し居れるも遠く出でず、砲臺下を陸岸近く東西するを見、午前十一時四十五分より敵艦及陸上砲臺に向ひ遠距離砲撃を始む、敵艦及び陸上砲臺應戦せしむ、正午過五分ノヅ井ツク先づ港内に逃れ、アスコツド、バーン續いて港内に逃走せり、此分にては港口閉塞は其効果少なかりしが如く甚だ遺憾に堪へず、是に於て各艦巨砲を以て港内に向つて砲撃を行ひ、盛

んに火焰の揚るを見る、砲撃十五分の後之れを止め引上げたり、此砲撃にて多少敵に損害を與へ、且つ港内を威嚇し得たりと信す。

此間我巡洋艦隊は老鐵山附近にて西方より來れる敵の驅逐艦二隻を認め、其一を逸せしむ、他の一隻は之れを鳩灣に追窮し、終に之れを撃破せり。

我艦隊總て一の損害死傷なし、東郷聯合艦隊司令長官は猶ほ前進地にあり、以上は同長官より報告あるへさも本官より不取敢報告す。

之より先き五隻の日本汽船は〇〇〇の地點に於て、其乗組員及び諸船の器具の陸上上げを命せられ、其船跡は總へて軍艦の色と同一に塗變へられたり、今其汽船の名と構造、來歴を聞くに左の如し。

仁川丸 同船は千八百七十七年蘇國グラスゴーに於て製造し、單螺旋の推進器を有する鐵製のスクナーにして、三聯成筒形の汽罐を備へ、原名をモーレー號と稱す、

明治二十七八年役の際日本郵船株式會社が之を購入し、仁川丸と改稱し、爾來我近



海の航海に使用し居りしものにて、船齡は二十七年、總噸數は二、三三一噸、公稱馬力は一九五馬力なり。

天津丸 同船は千八百八十八年英國西ハートルプールにて製造し、單螺旋の推進器を備ふる鋼製のスクナーにして、三聯成筒形兩口の汽罐を有し、原名をウオーセツター號と稱す、該船も亦二十七八年役の際郵船會社に於て購入し、天津丸と改稱して我近海の航路に使用し居りしものにて、船齡は十七年、總噸數は二、九四二噸、公稱馬力は二二二馬力なり。

報國丸 同船は千八百七十年六月蘇國グラスゴーに於て製造し、單螺旋の推進器を有する鐵製のスクナーにして、聯成冷汽筒形の機關を備へ、原名をストレッツ、オブ、ベルアイル號と稱せし、其後神戸の川村佐吉氏が之を購入して報國丸と改稱し、我近海及遠洋の航路に使用し來りし者にて、船齡は三十四年、總噸數は二、七六六噸、公稱馬力は二六〇馬力なり。

武州丸 同船は千八百八十三年九月英國ダンデーに於て製造したるものにて、單螺旋の推進器を備ふる鋼製のスクナーなるが、汽罐は聯成冷氣の筒形にして原名をインヴァアター號と稱せり、明治二十九年日本商船株式會社創立の際之を購入して武州丸と改稱し、我近海の航路に使用し居りしものにて、船齡は二十一年、總噸數は一、二四九噸、公稱馬力は二二三馬力なり。

武陽丸 同船は千八百八十九年五月蘇國リースに於て製造したる鋼及鐵製のクスナ一にして、三聯成筒形の汽罐を有し、單螺旋の推進器を備へ、原名ローザリー號と稱す、日本商船株式會社にて武州丸と等しく購入して武陽丸と改稱したるが、爾來我近海の航路に使用し居りしものにて、船齡は十六年總噸數は一、六三〇噸、公稱馬力は一四七馬力なり。

此等の船は何れも硬炭を以て船艙を充たし、之に破壊装置を備へ、目的の地點に達したるときは、電氣の引金を曳き、船は我と我が体を港口に横へ、敵艦の通路を閉塞す



べく準備したり。

(三) 敵國艦隊根拠地封鎖の先例。

敵國艦隊の根拠地を封鎖する計畫は、實に大膽不敵の戰術也、港口は敵の十字砲火の衝に當り、死力を竭くして護る處なり、之に向て老朽汽船を沈没せしめ、敵艦隊の出入を閉塞せんとす、之れ個人の戰闘としては確に刑罰以上以上の仕事なり。

斯る大冒險の先例を案するに千八百九十八年米西戰爭に其一例あり、今此處に其大様を示すことは、我が海軍が世界海軍の上に於て如何なる地歩を占むるかを窺ふべきものあらん乎。

千八百九十八年の米西戰爭に於て、米國海軍大尉ホブソン氏は、西班牙海軍根拠地なるサンチャゴの港を封鎖せんことを計れり、當時セルヴェラ將軍は西班牙國の艦隊を率ひ、サムブソン將軍の率ゆる優勢なる米國艦隊の間を潜りつゝ、六隻の良艦をサンチャゴ港内に入れ、砲臺の掩護に依りて米國艦隊を難追せしめんと謀りた

り、米國は先づ西軍の艦隊を轟沈するか、然らずんば之れを捕獲するに非んば、到底陸兵を、キューバ島に上陸せしむるに能はざりしなり、然れども港内の砲臺堅固なり、軍艦も堅良なり、港口には水雷の敷設あり、米艦如何に堅固なるも、海兵いかに勇武なるも、港内の西艦を一掃せむと至難なり、シエレー司令官の下に二三の艦隊は、港口に向ひしかど、功なくして退きぬ、港外に遊弋する米艦隊は、恰も鼠穴を覗ふ猫の如し、さればサムブソン司令官は、種々算策を廻らしたる末、大冒險を試むるにあらざんば、成功覺束なしと看取し、直に港内封鎖の命を下せり。命に應じて奮起せるはホブソン大尉なりき、氏や考慮すると數日の後、司令長官に向つて我れの外に、六人の決死隊あらば、メソマツクなる一大汽船を港口に沈没し、以つて港内の西艦を封鎖すべしと、我れこゝ「商船の水夫」と侮れたる米國海兵の耻辱を雪がむとて全艦隊の兵士を擧げて決死隊に加はらむことを迫りしが、多きは却つて失敗の原因なりとて、司令官外六名にて同年六月一日、夜に乗じて港口に進



發せり、行く幾許もなく、六名の兵士は七名となりぬ、これメリマック號の舵手一名が、請願するも許されざるは明かなれば船内に隠れ居て、愈よ進發するやノコくと出で、決死隊に加はりしなり、ホブソン氏は七名を夫れノコに配布して、たとひ如何なる危急の場合に臨むとも、左右を顧ると勿れと嚴命せり、熱帯の月光をひたして美しき海上を、メリマックは港口の西岸として波を蹴り、少しく離れてニューヨーク號は、決死の一船を護れり、やがて月は隠れぬ、轟々たる砲聲は茫洋たる海上に響き渡りぬ、待つと數時、決死隊は歸り來らず、ニューヨーク號は、本艦隊に向つて、勇敢なる海將海兵は、あはれ敵彈の爲め死せりとの報を送りぬ。されど八名の士は死せざりしなり、目的の如く船を沈め、夜に移つて歸らむとするや潮流のため敵の海岸近く押し流され、水雷艇の爲に捕はれし也、寛仁なる西將セルヅエラ氏は、ホブソンの勇氣を激賞し、かゝる名譽ある捕虜は、長く此の地に留むべからずとて翌朝直に信號を以つて、八名は捕虜となりしが共に無事なり、又

直に捕虜を交換せむことを米艦隊に通じぬ、然れども事情の爲に妨げられ、ホブソン以下七名の名譽ある捕虜が、米國に歸りたるは、一ヶ月の後なりき、西軍は出來得るだけの手段を盡して彼等を優遇し、米人は狂喜して彼れ等を歓迎せりど。如斯にしてホブソン氏は、一隻の漁船と七人の死士隊を以て其偉名を世界に輝かしたり、而して我が日本の海軍は、五隻の漁船と七十七人の死士隊を以て、東洋第一の險と頼める旅順口を封鎖せんとす、其大膽にして雄略に富める米西戦争を以て同日に語るべからず、而して七十七士の死士隊、従容として死に歸くの決心を爲し、意氣天を衝いて旅順口に向ひたる壯舉は、乞ふ次項以下を見よ。

(四) 七十七士決死隊の登艦

試みに想へ、我決死の士が閉塞船に登乘し、本艦と別れ、一直線に敵の艦隊の根據地に向つて進む、之れ火薬を抱いて火に投ずるものなり、仇しが原の道霜の、一歩づゝに消へ行く例はありとも敵の十字砲火に向つて驍然に突貫する勇氣に至つては、世











紅葉と散れやますらをの花。

又朝日艦乗込員一等機関士三富由太郎が福島の知人に宛たる手簡の一節に左の如き文字あり。

重大なる任務全ふするの時は、二月廿三日午前三時、幸にして敵丸の爲に、大和民族東北男子の本領を現せし曉には、面する處は信夫山上招魂社にゐるのみ、呀、快なるかな、多繁茲に筆止む、悦んで死に行く云々、

の文字あり、又某に送りし書簡の末に左の一首あり。

なからへて、死の耻をのこすより

玉どくだけて名をとり止めん。

三笠乗込員二等兵曹林紋平が決死隊編成の事を知り、奮然起て死を決するもの二千餘名あることを聞き、到底尋常一様の決心にては其の選に當ると困難なりと見て取り、己が手の指を切斷し淋漓たる血潮に滿腔の赤誠を表し、其の選に當らんとを希ひたるに、

艦長其の決心の堅さを知り、衆中に擧んで、決死隊の一人となしたり、左の書面は林紋平の戦友なる久保田新助より紋平の兄淺太郎へ宛たるものにして、又以て紋平の決心の堅さを知るべし。

(前略) 御賢弟林紋平殿には海軍入籍以來懇篤交際致し、無二の親友に相成り、互に胸襟を披き意氣相投じ苦樂相共に致し居り候、乗艦後は殊更骨肉も曾ならざる交情に有之候、(中略)、各艦長の選抜により本艦より水兵部一名機関部四名其兵曹は即ち林紋平殿なり、乗組五百餘名の中唯一人選抜さるゝは、何か百卒に優れる所ありたるならん、即ち氏は願書を認むるに當り、己が生血の滴りを以てせしは氏一人の外他に其類を見ず、實に報國決死の志氣念頭に厚きは吾々をして感涙せしむ、尙二月十八日退艦の際不肖に告げらるゝ言あり、「君國の爲殞命するは覺悟に候得共、飽迄其成功を果し、東洋無二の大和魂をして世界に紹介せんとす、決して毫髮怯懦の舉動は致す間敷」と、誓ひ居られ候、又無事歸艦せられし後、氏が語らるゝ處は、唯







●●●●●●●●●●  
報國丸乗組將士

海軍少佐

同 大機關士

同 一等兵曹

同 二等兵曹

同 二等機關兵曹

同

同 二等機關兵

同

同

同

同

廣瀬 武夫

栗田 富太郎

大沼 今朝太郎

角久間 千幾藏

大山 鐵三郎

塚本 助市

三富 由太郎

竹澤 彌七

酒井 清

日高 金左衛門

藤木 金太郎

同 二等機關兵

同

同

同 二等機關兵

同

●●●●●●●●●●  
仁川丸乗組將士

海軍大尉

同 一等兵曹

同 二等機關兵曹

同 三等機關兵曹

同 一等機關兵

同

武野 教二

佐藤 七郎

城戸 隆

石井 銀次郎

盛田 隆義

齋藤 七五郎

山田 永次郎

増田 平馬

寺岡 虎市

土屋 勝次郎

青木 五郎



同

同

同

同

同

同

同

同

同

海軍大尉

同 中機關士

海原六郎

林政吉

安保助藏

梅原健三

宇野虎三

三村鏡馬

伊豆香松

三島健六

藍原善七

正木茂太

大石親徳

同 一等兵曹

同 三等機關兵曹

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一等機關兵

二等機關兵

武州丸乗組將士

米良正藏

板原龜次

田尻藤八

新上卯太郎

樋口吉次郎

高橋勝衛

田尻利平

吉田巳之次郎

中田敬一郎

條宮丈夫

濱六松



海軍中尉

島崎保三

同 少機関士

杉政人

同 一等兵曹

中川作太郎

同 二等機関兵曹

米田賢一

同 二等兵曹

赤松虎太郎

同

木下志米吉

同 一等機関兵

上野岩次郎

同

玉井虎之助

同

松元豊吉

同

加木至徳

同

長井右吉

同

升山金藏

萩 喜藏

栗田鎌太郎

橋本圭二郎

同 四等機関兵

右の如く各部署の定まりたる後、東郷司令長官は、之れや此の今世の訣別なれば暫く永別の宴を張らんとて、各乗組一同を三笠艦上に招き、自ら三鞭酒の盃を上げ軍の門出を祝したる後、各將士に告げて曰く、「諸君の決心は本官已に之を領したり、左れど生は難く死は易し、此行諸君萬死ありて一生なしと雖も、既に豫定の任務を果したる後は、各身を完ふして還ること肝要なり、故に各船は各端舟を備へ、又各駟逐艇をし、て之に従ひ我が生存者を収容せしむべし」と、用意周到なる計畫に一同は司令長官の厚意を謝したるが、中に一人報國丸の乗組員廣瀬少佐は進み出で曰く、「長官の周密なる注意は謝するに餘ありと雖も、此行我等萬生還を期せず、若し夫れ任務を果して餘命あらんか、余は敵の駟逐艇を分捕り、之に乗移りて還らんのみ」と、辭氣凛然一



坐拂つて見へければ、長官は之を宥め、一同は本艦を離れて各閉塞船に分乗し、愈出發と云ふに方り、東郷司令長官初め各分艦隊長、乗組員に至る迄、甲板に上りて一行を送り、其行を壯んにしたるが、送らるゝ者も本艦の影の見へずなる迄、甲板上に在りしが、中には本艦と分るゝに臨み、「國家の爲め暫くこの船を拜借して参ります」と、一々鄭重なる挨拶を爲すものありしが、之を聞きたる元船の船長以下覺へず暗涙に咽び、心秘かに天佑を祈らぬ者ぞなかりける。

(五) 決死隊奮闘の光景

斯くて七十七人の決死隊を分乗せたる閉塞船は、天津丸を先導とし、報國丸、武州丸、仁川丸之に次ぎ、其間に〇〇〇〇〇〇の水雷艇逐艇を點綴し、武州丸は殿艦として總計五隻、單縦陣を作りて廿四日午前二時漸く旅順港外に達したり、此時新月已に早く勃海灣頭に没し、黃海を吹き送る東風は左まで強からざるも、波のウチリは尙は高く、五隻の大汽船に當りて碎くる物音凄し、乗組員は各我が大事を爲すは此夕に在り

と陣を定めて港内の様子を窺へば、陸上の探海燈は黄金山、老鉄山、遠饅頭等の山頭より斜に海を射り、港口に横はれるレトヅ井ザン及ひ他の敵艦より来る探海燈は、一直線に海面を照らし、何處を當ともなく回轉する毎に屢我か閉塞船を照破せんとす、此に於て閉塞隊は若干時間港外に在りて敵の消燈を俟ちて進行せんことを決し、暫く波の間に一に船を放ちて、待てども一に探海燈は消滅せん様子もなし、時計を見れば早三時半を示せり。

此に於て閉塞隊は斷然意を決し、不幸にして目的地點に達せず、敵艦の爲めに沈没せられなば夫れ迄なりと、老鉄山の麓に於て全船火氣を滅し、港口に向て斜に針路を取り、敵の燈光を巧に避けつゝ進行せるに、黄金山より来る探海燈の烈しく回轉するよと見る間に、先頭に進みたる天津丸は其の照點となれり、次て各閉塞船も一時に陸上海上の探海燈に照され、砲彈は雨霰の如く降り來れり、茲に探海燈と云ふは強力なる光線を一所に集め、之を一直線に放光するものなれば、之に照破せられたるときは、恰も



大陽を直視するか如く、或は日に曝されたる鳥島の如く眩して四圍の暗体を認むること能はず、今や我が閉塞船は強力なる光線を浴びせられ、目的地點に達せんとすも、放光線外に於ては一物をも認むること能はず、最先に立ちたる天津丸は今之迄なりと砲彈を胃しつゝ、船首の向つたる方に進行し、四時二十五分、目的地點を去る約五百米突と思はる處に至るや、船は異常の震動を爲しつゝ、或る一物に觸れて坐礁せり、想ふに敵の沈没船若くは防材の上に擱岸せしものにて、艦長有馬中佐はエー仕なしたりと残念を叫ぶ處に、敵の六吋砲は天津丸の船橋と船首に命中したり、此に於て有馬中佐は直ちに船體沈没の命を下し、尙ほ續きて來る味方の各船に衝突を避くる爲め、面舵を叫ばしつゝ直に救命端艇を下ろして乗組員の乗移りを命し、乗組員僅に端艇に移るや、天津丸は三箇の恐ろしき鳴動を爲しつゝ三分間を出てすして全く沈没したり。

斯くとは知らず、第二に進みし報國丸は滿船に敵彈を浴びつゝ突進し來りしが、アツ

ヤ坐礁したる天津丸に衝突せんとする一刹那、船首に當り「面舵に取れ」の聲を聞き付け、其聲に従つて面舵に取る一轉瞬、報國丸は右に轉して端なく、恰も港口を封鎖せるか如く横はれるレトウキザンの側面に出たり、之れ天の助けと艦長廣瀬少佐は喜ひ勇みつゝ、彼處か此處かど沈没の地位を定むる内、不意を喰つたるレトウキザン、報國丸を追ひ拂はんと艦上の大砲を一時に切つて放ち、轟々轄々天地も爲めに裂けん計りなりしが、報國丸は之が爲めに舵機を損せられ、續きて放つ一彈は船首に命中火災を起したり、然かれと指揮官廣瀬少佐は名にし負ふ豪傑なれば一歩も退かず、「エツ死損ひのレトウキザン目か」と敵艦を睨みつゝ、全員に向て早くも沈没用意を命すれば、報國丸は二三の爆發の響と共にレトウキザンより僅か百米突計りの地點に於て、船首を約北々西にして沈没せり。

續きて武州丸、仁川丸、武陽丸も敵彈を胃しつゝ進み來りしが、武州丸は不幸にして港口に達せず、レトウキザンより來る砲彈に著しく船を傷められ、已むことを得ずし



て投錨破壊して沈没し、武陽丸は天津丸の直横百米突の處にて、敵彈の爲めに機械に故障を生じ、之亦自ら破壊沈没したるが、獨り仁川丸は無難にして港口近く進み、燈臺より南東約二鏈半の位置にて、沈船とも思はるゝものに抵觸し、其位置に於て爆發沈没したり。

五隻の閉塞船は何れも豫定の如く自ら破壊沈没せり、大膽なる此目的は十分なる効果を奏する能きなりしと雖も、報國丸と仁川丸とは遺憾なく目的地點に達して沈没したり、之よりは各乗組員が兼て準備し置きたる端艇に乗りて敵の砲火を逃るることゝなれり、見よ、幾多の端艇は波間に漂へるなり、敵の砲火は益急となれり、陸上の砲臺海上の敵艦よりは大砲小銃を放ち、各砲口より迸る火光は、一時は線香花火を見るが如くなり、味方の生存者を救助せんか爲めに彼方此方を乘廻せる驅逐艇は、砲火の中を潜りつゝ端艇に近かんとすれば、敵の放火は之に向て集り、加ふるに波高くして艇壓碎けんどす、之か爲め最先に進みたる報國丸の端艇は、故らにレントグヰザンの陰に進み、

此處に大砲の彈を避けんとしたるに、敵は小銃をさへ打ち掛け、敵彈の集點となり、一時報國丸組乗員は一人も生存するものなかるへしと想像せられたるが、此際我が決死隊の諸士か如何に沈着なる態度を取り、周密なる注意をなしたるかは、乞ふ次項を見よ。

(六) 端艇の漂流

▲天津丸乗組員の手簡 天津丸は此夜沈没の先驅となり、十分に其目的を達する能はざりしも、前者の覆轍を以て後車の戒を爲したる咄嗟の働きは、他の閉塞船をして無事任務を果さしめたる功勞を没すへからず、左は血書の勇士として有名なる天津丸乗組員林紋平の手簡なり、天津丸か坐礁して尙優々迫らざるの状態を見よ。

(前略)天津丸には決死隊十七名中、參謀中佐有馬良橘、上等兵曹上信音造、一等兵曹内田喜太郎及び小生と外十四名、其他の四隻も十三四名内外にて二十四日午前四時旅順港口の西より五隻の軍艦陣を整へ港口に向て突進中、探海燈の發見する所と



なりて、敵の彈丸雨の如くビュー／＼／＼と飛來るも、死を決したる上は少しも顧みる所なく、目的地點に達するを主としたるに、不幸にして老鐵山下に至りし時、敵の探海燈の爲に目視を失ひたるにや、暗礁に坐上し將に沈没せんとす、其時生は船橋に在りしが、有馬參謀に向ひ「船は暗礁に坐上しました後より來る各艦に危険を知らせせう」、「ソーだ危険燈を掲げよ」とありましたから、直に燈を掲げました、其時船の三米突餘前部に敵彈が命中して、百雷の一時に落つるかと思ふ様に爆發したが、幸に彈片も當らなかつた、其時は丁度敵彈は雨の如く飛び來たが、士卒に少しの傷もなかつた、然るに後の四隻は又暗礁に乗り上げ様としたから、生及び其他五名の者が一齊に聲を揃へて、面舵に取れ／＼／＼と呼んだので、後の四隻は旅順港口に至りて沈没せしめたが、餘り好結果を得なかつた、右の有様で彈丸雨飛の中で事を爲すは中々面白いものです、只今の處では又一度決死隊に加はりたと思つて居ります、露の海軍は旅順の砲臺を力として、敷設水雷とか防禦水雷な

をとして交戦しますから、餘り面白い戦争は出来ませぬ。(下略)

左は又同じ乗組員なる谷田志摩生が其父に宛たる書翰の一節なり。  
(前略)單縦の陣を造りて港口に向つて突進仕候、併し戦死と覺悟致候身の少しも恐ろしき事無之、却て愉快の者に有之候、飛彈益はげしく殆ど面を向くべき様無之程にて四時二十五分、漸く目的地を去る約五百米突の點迄進行、幸に未だ一彈をも不蒙、不幸にして先導たる天津丸は坐礁致申候、(多分沈没せし敵艦エニセイ號の上か又は水雷防材に當りしならん)、有馬中佐を始め小生共に至る十七名は、報國丸に其旨を知らせ候爲、針路を變じて同船以下の四隻は其儘進行、小生等は直に救命艇を下して乗り移り、轟沈の際使用の目的を以て用意し置し、〇時砲彈の導火線に點火且キングストーン砲(海中に通ずるバルブ)を破壊し、其上綿火藥の電線をも推し、都合三箇所を破壊し申候處、敵彈六時以上のもの二箇船橋船首に命中致、約三分間を以て全く船尾は沈没致申候、然し船首は高く坐礁致候故立ち上りをり申候、小生







覺わたり、齋藤大尉は大聲日本海軍萬歳を叫び、全員之に和して三唱せり、斯くて第一のボートは卸されしも、本船に繋げる綱無かりしたため、ボートは前の方向に押し流されしより、更に第二のボートを卸せとの命あり、梅原健三青木五郎二氏之が卸方にかゝるや、敵弾飛び來つて梅原氏を仆し、ボートをも破壊したり、依て苦心慘憺して先きのボートを引寄せ、舷側に下げたる綱に縋りて漸く乗り移るを得たり、其時五時前なり、程なく一同ボートを漕ぎ出すや、敵は大砲小銃を發射し、海水を跳ね上しも、全員死力を盡して漕ぎ出し、追々遠くなるに連れ敵は巨砲を射かけ、彈丸ボートの兩舷及び艦に落つるもの少なからず、此際余は一生懸命なりし故何が何やら少しの知覺なかりし。

▲報國丸の苦戰 報國丸は此日に於て最も成功したるチャンピオンなりし也、随つて三名の負傷者を出し、逸事逸聞多きが中に端艇の綱取りなる機關兵が、右股と頭部に負傷しながら、尙綱を手に取つて放たず、悠然として任務を果したる動作は、恐くは

此日の戰功第一ならん。

機關兵名を藤本金太郎と云ふ、

一見温和なる美少年なるが、舉措沈着、此日端艇の綱

取りには極めて適任の人物なりし也、端艇の綱取りとは、舷に吊るしある端艇を、

一艇の滑車に依り、徐々に水面に向て釣り卸るす動作にして、端艇の中には早や報國

丸の乗組員移乗し居れり、其綱取こる藤本機關兵なり、一同の生命は今や滑車に繋が

る一條の綱に依りて支へられたり、端艇は二丈に餘る高所より下り始めたるが、此時

早く彼時遅く飛び來る敵の破裂弾は、報國丸の船橋を粉碎し、破片は飛んで藤本機關

兵の右股と頭部に命たり、此時端艇に乗り込みたる將士も、アツヤ生命の綱の絡も

之にて断へたるかと思ふ間もなく、藤本機關兵は鮮血淋漓として進むをも顧みず、滿

身の力を罩め綱を取りて放さず、端艇は徐々として水面に下るされたるが、此間に於

ける藤本機關兵の沈勇にして痛手に屈せぬ元氣の程、皆人共に感せぬ者ころなかりけ

れ。



沈着にして勇氣に富めるは唯に藤本機關兵のみに止らず、同じ報國丸の乗組員にて錨を卸す役目を帯びたる某兵曹は、敵弾の爲めに頭部に負傷し、鮮血は流れて顔面赤に染みながらも、錨の綱を取つて海中に沈めたり、元來此錨を卸す役目は最重要なる任務にして、最後まで船に居残るが爲めに最多く敵弾を蒙り、危険中の危険なるが、同兵曹は極めて沈着なる態度を取り、「夫れ錨を」と上官の命令あるや、靜に錨を卸し始めたが、俟て暫し「錨は先刻よりの砲撃にて最も多く敵弾を蒙れり、若し敵弾の爲めに錨のケーブルにても断れ居らんには、錨は空しく海中に抛棄せらるべし」と心附きたる同兵曹は、頭部の痛をも意とせず、一々綱を手繰つて調べれば、綱は果して切断され居たり、依て靜にケーブルを繋ぎ合せ、命令の如く錨を沈下して端艇に飛び移れり、想ひ見る、舷頭に立てる一兵士、顔は流るゝ血汐に染りて宛然惡鬼羅刹の現はれたるが如く、漏れ来る敵の燈光に透かしつゝ、一々ケーブルの切れ目を點檢して繋ぎ合せたる動作、大膽とや云はん、沈勇とや云はん、正に之れ凄絶槍絶一輻の活畫題たるを失はず。

報國丸乗組員の剛毅沈着談は未だ之を以て盡きたりとせず、此夜艦長廣瀬少佐の沈勇は又後日に傳へて武士の鑑鑑となすへきに足るものあり、少佐は隅なく船中を見廻はり、總ての破壊装置が遺憾なく準備せられたるや否やを點檢し、イザ善しと云ふ處にて導火に點火し、一同を端艇に便乗せしめたる後、自分は靜に舷梯二段計りを下り來るとき、不圖船上のブリツヂに短劍を懸け置きたるを思ひ出し、「ヤ、武士の魂を忘れんとせり」と唸さつゝ、再び艦上に取つて返したるが、此時早や導火には點火せられたり、敵弾は雨の如く艦上に降り來れり、少佐は之等のことには意を借さず、短劍を取りて元の道に還り、五間計りの艦上より端艇中に飛び入りたる早業、一同は今に初めぬ少佐の剛膽なるに呆れたるが、少佐は端艇中に入るや、自ら其持てるハンカチーフを竿頭に立て、「見よや物供、敵は盛に煙花を揚げつゝあり」と、狂瀾怒濤の内に泰然として艇頭に起てる様、宛然金輪際より戰神の起てるが如く、皆人賞めたりへぬ



はなかりけり。

報國丸の端艇は、一時突進してレトウキザンの傍にありて砲弾を避けたるか、此處には敵の小銃丸來りて面も向くべからざるを以て、怒濤の中を沖合に出つれば、敵は又もや六吋砲を以て連撃す、左れと味方は平然たり、中にも栗田大機關士は自ら踏き居たる長靴を脱し、激浪に揺られて潮水の艇中に侵入し來るを汲み出し、居たるが、懸がて其手を留め、「ドウダ諸君、勇士は擧丸の伸縮を見て度胸を試すと云ふが、諸君の擧丸は如何」、此時乗組員は顧みて自己の擧丸に注意したるに、驚天動地の中にも一人として平常以下に萎縮するものはなかりしと云ふ。

▲端艇の漂流 此日各船は何れも三艘若くは四艘の端艇を用意したるが、目的地點に達する迄には、大半は敵彈の爲め打ち拂はれ、吹き飛ばされて、餘す處は一二艘なりしが、就中仁川丸武州丸の端艇は稍使用に堪へざるもの各一艘となり居り、乗組員は辛ふじて之に飛び乗り、激浪に揺られつゝ救助船の方に漕ぎ寄せたり。

此日我水雷驅逐艇は老鉄山下にありて、決死隊の一行を救助する計畫なりしが、暗夜なるが上に、折柄東風強く波高くして端艇よりは我が驅逐艇を見出すこと難く、心元なくも豫定地點に向つて漕ぎ出し、發火信號をなして味方の驅逐艇を見出さんとすれば、見出さるゝものは敵の砲臺にて、之が爲め端艇は一時に探海燈と砲彈とを浴せ掛けられ、信號は明燈々たる探海燈の爲めに掻き消されたり。

此に於て仁川と武州の端艇は、暗夜を辿りつゝ、僅に南方に向て漕ぎ出だし、波上遙に我が水雷艇の影らしきものを認めれば、此度は風呂敷を振りて信號せしも、暗なれば固り判らん筈もなく、水雷艇と思ひしは途に見えずなりしが、兎角する内天は明け離れ、渤海灣頭の風は一入身に浸みて堪へ難きを、既に死を決した身は、之等のことに意を止めず、力の限り端艇を漕きたるが、仁川丸の乗組員は此時の有様を語りて、今は水雷艇に救はる可き望みなさを知り、只南へ南へと漕出したるが、金州半島を離れし時には東風強く吹き付けたれば渤海灣内に吹き飛ばさるゝとはなさ乎と思ひたる



が、幸ひにして此危険をば免るゝを得たりしかも二隻のボートは別々に互に其消息を知るに由なく、二十四日の午後となりては今朝來食を絶ち居ることゝ疲勞甚しく、只力の及ぶ限り南を指して漕ぎたる未漸く本艦隊の所在を認むるに至れり。と、其他の端艇も大凡る同一の境遇を経て早きは其日の朝、遅きは午後及びて何れも救助せられたるが、仁川丸乗組員中二等機關兵椋原健三、沈没後端艇を御さんとて敵弾に觸れて戦死し、報國丸の乗組員三名が負傷したる外は、一同無事にして生還したるは、海戦史上稀有の事實にして、東郷司令長官が閉塞隊員并に之れが收容に従事したる水雷艇隊等が、天明に至る迄長時間敵の砲火を蒙りたるに拘はらず、斯の如く些少の死傷を以て生還したるは眞に奇異の現象にして、一に 大元帥陛下御威徳の擁護に因るものと云ふの外なしと云ひしは、誠に道理にて忠勇義烈なる我が將士が、其肺腑を出したる言にあらすして何ぞ。

(七) 我か艦隊の總攻撃

明くれば二月廿五日、我が艦隊は某地點にあり、夜來閉塞隊の行動如何あらん、首尾善く成功せしが、全員擧つて海底の藻屑となりしか、千々に心を碎きつゝ、一夜を明かしたるが、午前八時と云ふに某地點の西方約十哩の海上に集合し、今日正午を以て旅順口に總攻撃を加へんと命令するや、全艦隊擧つて歡喜湧躍し、今日ころは旅順の敵を鏖殺して呉れんと、午前十時と云ふに我が艦隊は早や遙かに港口を望むに至れり、此日我が艦隊は戰艦巡洋艦并せて〇〇隻、〇〇陣を作つて老鉄山下に迫りたるが、夜來の風浪漸くにして収まり、天氣も亦晴朗にして交戦には極めて好都合なりし、眺を决して港口を眺むれば、港口にはバーヤンとアスコルドの二隻あり、黒煙を揚げて徘徊せるを見る、夫より三四百米突を距て海岸にノーヴキックと思しきが碇泊せるを見る、我か艦隊の近くを見るや、或は進み、或は退き、遂巡遲疑する有様如何にも笑止に堪へざりしが、我か艦隊は益進んで港口より〇〇〇〇米突の所に近くや、先頭



艦隊の前に當り、轟然爆發、海水數十丈の高さに騰上するあり、之れ敵の機械水雷の破裂したるにて、敵は我艦隊の近づくを見て、周章狼狽、早まりて電氣を通したるにやあらん。

我か艦隊は少しも損傷を受けざるのみならず、其飛沫をさへ蒙らざりし位置にありしが、後に思へば我は早や敵の水雷區域に入りしなり、先に爆發せしは我の爲めには前路の危険を報するものにして、之や此天運我を祐くるにあらん、一同天祐の厚きを感じ謝しつゝ、「敵の水雷あり之を避けん」と信號して、先頭左折、元の針路に還れば、續きて進む諸艦も艦首を左方に轉したり。

此に於て我か艦隊は巡洋艦の一隊を分ちて、敷設水雷の有無を搜索せしめ、其報告を得て更に針路を轉し、〇〇陣を作りて鮮生角の南東より港口に近きしは、正に午前十一時なり、此時晴れ渡りたる太陽は中天に在り、我は南東にあり北西に向つて照尺を定むるには極めて好位置にあり、之に反して敵は真向に太陽を受け、加ふるに海水眩

濁砲撃動作の上には極めて不利なるものありしならん、左れど敵の三艦は早や打方を始めたり、而して其射撃は所謂盲ら打ちなり、砲弾は烈しく空氣を震動して飛來すども、我か艦隊には命中せず、昔な前途數百米突を距てたる處に於て爆發し、水面に墜ちて盛に水煙を揚げ居れり。

之を見たる我が艦隊の將士は、「敵の眼は已に暗み居るぞや」、「天は我が軍を祐け給へり」と叫びつゝ、向をも前進を繼續し、艦が適當の射撃距離に達したりと思ふ頃、忽ち令あり、「大口徑砲は照尺を高くせよ、而して敵の陸上砲臺を攻撃すべし」、「小口徑砲は敵の三艦と低砲臺とに向て牽制攻撃を爲すべし」。

此に於て我が艦隊は敵の陸上砲臺に向ひ、右は牧猪礁、黄金山砲臺より、左は老鉄山、遠饒頭諸山の砲臺及び砲臺後の造船所、旅順市街を目標掛榴霰彈を以て尤も快速なる急射撃を開始し、小口徑砲は港口にあるバーヤン、アスコルト、ノーウキツク及び電燈山下の低砲臺に向て旺に攻撃を加へたるが、敵も左る者我が先頭艦に向て雨霰の如



く砲撃を加へたり、其聲轟々駱々、天柱挫け地軸裂くるかと思はれしが、我が砲丸は敵の頭上に於て破裂し、破片飛んで四方に散亂すれば、港口の三艦は到底協はじと思しか、但しは折角今日迄永らへし船を撃沈されては一大事なりと考へしか、俄に艦首を廻らして港内深く逃げ込みたり。

左れと陸上砲臺は尙は頑強に抵抗せり、中にも黄金山と牧猪礁砲臺とは猛烈なる砲火を續け、餘音長く殷々として旅順の山岳に響き、砲口より迸る火光は一時はさながら線香花火を見るが如く、折りかけ引かけ亂射する有様は、中々侮り難く見へしが、其着弾は極めて不確實、皆我が艦前艦後に墜落して時に水煙を噴起するのみ、之に反して我が發彈は照尺明確、各砲臺に命中する毎に其爆發の有様手に取るか如く認むるを得たり、殊に我が旗艦より放ちし十二吋彈が、巨空を切つて黄金山上に爆發せしどきは、實に壯絶快絶流石の砲臺も一時は發砲を中止するの已を得ざるに至りぬ、其他我が各艦より放つ榴散彈は山を越へて港内に落つるものあり、市街に落ちて爆發するものあり、其度毎に我が艦隊よりは萬歳の聲起り、敵の砲臺よりは射撃の手の弛ぶを見たり。

此砲撃は二十五分間、一秒時の間斷なく繼續せられたり、シタ、カ敵の砲臺を窺はしたる末、我が艦隊は引揚準備に取り掛りたるが、午後一時を過ぐる四五分の頃にやむらん、敵の發射せし十一吋砲彈は我が吾妻と淺間の中間に飛ひ來れり、之れ我が殿艦の二隻が黄金山砲臺の方に艦尾を向けつゝ廻轉せる最中にして、其照尺や比較的確實なりけん、此一彈は淺間の後部甲板を飛び越し、物凄き響をなしながら二百米突餘前面に落ち、烈しく水煙を揚げたるが、此交戦中に於て我が艦隊近く達したるは、唯此一發のみなりしと云ふ。

既にして我が艦隊は快速力を以て全部廻轉したり、我が發砲は最早已められたり、然れども敵の砲撃は尙は止ざるなり、旅順の山は已に遠霧の中に隠れたるとき、氣まぐれなる敵の砲聲は、先刻よりの物音に逃げ陰れたる水鳥を驚かしつゝあり。



此間に我巡洋艦の一隊は老鉄山附近にて西方より來れる敵の驅逐艇二隻を認め、其一を逸せしめたるも、他の一は之を鳩灣に逐追し、遂に之を破壊したり。

(八) 閉塞の効果及び其批評

有体に言へば我が七十七士が生命を賭して行動したる閉塞運動は、十分なる効果を奏すること能はざりし也、少くも二十五日午後の總攻撃に於て、敵艦バーヤン、アスコルド等の三艦が、平氣にて港外に出で居りしことは、我が閉塞運動の効果を疑はしむるに足るものあり、然とも旅順の近海は我が大汽船五隻を沈められたり、而して敵の水雷敷設船、驅逐艇、運漕船の沈没したるもの十隻の上に出たり、此間を巧に繰返して我が精銳なる艦隊と戦はんこと彼に取りては甚だ難澁なる仕事ならん、旅順口は今や僅かの動作に依りて全く閉塞せらるへし、宜なり最近又もや第二の閉塞運動開始せられたりとの噂あり、其効果は尙本書の進むに従つて詳説する所あらん。左に記するものは、某外國武官が旅順閉塞動作に對して批評を加へたるものにして東

京朝日新聞に載せたる所なり。

旅順閉塞の擧が當初の豫期通りに好効果を奏せざりしは、誠に貴國に取りて残念の至りなれども、其事の困難にして非常の勇斷を要するものなること、今回の壯擧が全然成功せずとも幾分の効果を收めたることを思へば、未だ甚だしく失望するに及ばざるべし、思ふに今回の夜襲當時日本軍が依りて以て侵入の嚮導となすべかりしものは、白皇山の二個の燈臺と、左側なる旅順燈臺の三點なりしなるべし、然るに此夜右の燈臺が果して點火し居たりや否やは今以て明かならず、假に點火し居らざりしとすれば白皇山の山頂の正三稜形なるが、其正面に在るを目標となすの外あるべからざれども、暗夜斯の如き不分明なるものが何程の便宜を舵手に與ふことを得べしとも思はれず、若し又燈臺が點火し居たりとすれば、正面なる白皇山燈臺の二個の燈臺を一直線に視ながら船を進むれば間違なきやうなれども此時四方より探海燈を射出して舵手の目を眩せしめんには、其の進路を誤りて初め沈没せんとしたる場所まで到着し得ざる



は當然のこのみ、斯く成功の望甚少さを知り居たればこゝろ、一隻の大船を沈めて十分に塞ぎ得べき水路に對し、五隻の船をまで用意したるものなるべけれ、旅順口の入口は陸より陸まで三百碼ばかりあれど、其中船を通すべき部分は半分にも足らず、其の最も狭き所にては百碼にも足らざるべし、五隻の汽船中最も深く突入したる報國丸の位置を地圖によりて察するに、件の最も狭き水路まで二百碼乃至三百碼あるに過ぎざるが如し、されば今一息のことにて港口を閉塞し終るとも出來りしならんに、其の竟に此處に達すること能はざりしは残念といは、残念なり、さりながら此が貴國の爲に此の企ての與へたる効果は、第一報國丸の沈没が港口水路の左側なれば、之にても十分露艦の出入に不便を感せしむべきこと、第二に斯る危険の企てには少くとも乗組員の半数は生還を期すべからるものなるに、幸にして死者は一人に過ぎざりしと、及び第三に此等の冒險が海軍軍人の心膽を訓練陶冶するの効は、到底平凡なる小海戦の及ばざる所なること等なりとす、世には之を以て一概に暴虎馮河の勇なり

と罵しる者あれども、是港口閉塞が如何に多大の利益を日本軍に與ふるかを知らざる者のみ、今假に首尾よく水路の狭き所に、やゝ少し横さまに一汽船の沈むことありとせば、港口は全く塞がりて港内の露艦は殆ど如何ともすることも能はざるべし、此際露軍の爲すべき所は先づ沈没したる船内より、積み込みたる石塊を盡く他に運び去り、次に潜水夫を用ひて沈没船の破損したる箇所を盡く修理せしめ、次に唧筒を用ひて船内の水を盡く汲み出し、然る後船を水面に泛ばしめて他に運び去らざるべかず、元より強力なる爆發薬を用ひて之を粉碎せんとは出來ざるにあらねど、夫にしても其粉碎せられたる碎片は何か始末せざるべからず、孰にしても十日や二十日の間に能くすべきことならんや、露軍が此等のことに手間取り居る間に、浦鹽の艦隊打つべく、大手を振つて運送船を旅順附近に運ぶべく、軍艦の小破損は吳佐世保へ歸航せしめて、ゆるく修理せしむることを得べく、さては他日旅順軍港占領の後密封しおきたる露艦を無傷のままにて頂戴することをも得べし、されば少々危険は冒しても之を試む



べき價は十分あるなり、暴虎憑河の勇といふが如きものならんや、唯其の事の餘りに危険なる爲、海戦史上餘りに其の例なきのみ、米西戦争の當時サンチャゴに於てホプスン大尉の之を試みたるとは、既に人の知る所、其の外には余は同一の例を聞きしとなし、尤も米國南北戦争の時チャールストン近傍にて北軍が港灣を封鎖したるとあれども、これは軍需品の出港を妨げんが爲め、自國の港灣を塞ぎたる迄なれば、今回のこととは同視し難し、兎に角にも今回の一舉は世界の海軍に大なる教訓を與ふべき一大快舉にして、僅に一回の試験に思ふ程の効果を收め得ざりしとて失望すべきに非ず、今斯く語り居る中にも日本軍が再舉して首尾よくツイン丸とかベンケイ丸とかいふものを沈め居らんも知るべからざるに非ずや、云々、

海ゆかは みつく戸 山のかは  
くさ蒸すかはね 大君の  
へにころしなめ のどには死なし

### 第十三章 浦鹽斯徳の攻撃

(奈古浦丸の遭難)

第三回旅順攻撃と第四回旅順攻撃の間に於て、我が海軍の一部隊は、敵が第二の根據地と恃める浦鹽斯徳を攻撃せり、此攻撃は始より威嚇攻撃に屬し、敢て敵の根據地を全滅せんとすの作戦計畫にはあらずし、之れが爲め敵をして我が日本海方面に於ても守備の艦隊あることを認識せしめ、再び日本海方面に遊弋するを得ざらしめたる効果は確にありたり、而して此攻撃の必要を感せしめたる原因は、言ふ迄もなく我が商船奈古浦丸に對する露國の暴慢無禮を懲さんとするにあり、左れば我輩は浦鹽攻撃を記するの前に當りて、一應奈古浦丸遭難顛末を明にするの必要あり。

奈古浦丸遭難に就ては、當時同一の境遇にあり、幸ふして虎口を免れたる全勝丸事務長山本房次郎の實語を掲ぐべし。



「全勝丸は北海道福山町宮崎嘉兵衛の所有汽船にして、總噸數三百十九噸七一、船長高濱壽之助以下船員二十一名乗組み居り、二月十日酒田港に於て米、雜貨及び船客十七名（内男十二名女五名）を積載し、同日午後十一時小樽港に向け酒田港を出帆したる、此より先汽船奈古浦丸も亦酒田港に在り、小樽直航の目的を以て積荷中なりしが、全勝丸は奈古浦丸の出帆に先つこと約二十分にして出帆し、翌十一日午後十一時、陸奥國北津輕郡釧作崎沖合約十海里許の所にかゝれり。

折しも針路の左方に當りて山の如き巨艦一隻、又た一隻、都合四隻の遊弋し居るを認めたり、其色合は黒味勝の鼠色にして、三本マスト四本烟筒のもの二艘、二本マスト三本烟筒のもの一艘、二本マスト二本烟筒のもの一隻、每艦の距離半哩程の圓形陣を作りて駛走し居れり、最初は日本艦隊の遊弋し居るものなるべしと思ひしも、四本烟筒の軍艦は、我艦隊中に無きこと故、英國又は米國の軍艦ならんと噂を爲つ、近くは隨ひ、能くく覗れば國旗も掲げ居らず。

且其圓形陣中に一隻の驅逐艦、又は水雷艇らしきものを見受け、熱視するに及んで是ぞ全勝丸より後れて出帆したる奈古浦丸なることを知りぬ、奈古浦丸は登簿噸數一千八十四噸を有し、相應の汽船なるに、彼の四艦の取巻き居る有様を見れば、其小なると只是れ水雷艇の如く見たり、已にして全勝丸の甲板より望遠鏡を以て彼の四艦を望むに、其艦首には金色燦然たる大錨を飾れるにぞ、此に始めて此四隻は敵國の艦隊たることを知り、一向愕然たる間も無く、一發の砲聲海波に響きて、巨大の彈丸全勝丸に向つて飛び來り、轟然として全勝丸の左舷約四十間の處に落下したり。

アハヤ我が船体は粉碎せらるべく思ひしに、天祐なるかな、其儘海底に沈み、全勝丸には何の怪我も無かりき、既に斯くなる上は到底逃れ得べきに非ずと、船員船客一同覺悟を定め、彼の圓形陣中に入りて波のまにまに流れつゝ、奈古浦丸と其運命を共にするの餘義なきに至れり、彼れ露艦は砲發したる最初より「止マレ」の信號をも發せず、直ちに發砲したる亂暴は、文明國の艦隊に有るまじき所業にして、万國公法を無



視するも亦甚だし、此時東南風頗る強く、高波甲板を洗ひて、四艦の砲撃無きも幾んど沈没せんとするの運命に陥り、一同只た運を天に任せて敵艦の爲すに任ずるのみ。時に正午十二時頃と覺わたり、全勝丸の左舷近く四五百間の處に遊弋せる四本烟筒の敵艦より發射せる一發の彈丸は、奈古浦丸の船尾と覺しき邊に命中し、後部の稍傾斜せりと見る間に、忽ち船首を天に朝し、赤く塗られたる船底を露しつゝ、棒立ちになりて沈没し行く、其悲惨の光景には全勝丸甲板上の一同の者悚然として毛髮の墜つを覺わたり、其彈丸命中より沈没し了れる迄の時間は僅かに十分を出でず。豫て必死を覺悟せる全勝丸と雖も、万一の僥倖を冀ひつゝありしが、奈古浦丸の撃沈せらるゝを目撃しては、最早や万死に一生の途なきことを諦らめ、船客は勿論船員一同も救命浮帶を身に纏ひ、死骸となりても其姓名の判然するやう各々用意を整へ、且つ敵艦の爲めに爰に撃沈せらるゝ始末を認め、之を空瓶中に密封し、海中に投じ、船中に在り合せたる酒、麥酒の類を出して一同訣別の盃を酌み交せしが、此時乘客

中の婦人一名及び船員の老幼二名都合三名が少しく落涙せるのみ、其他は毫も死を畏るゝの念慮起り來らず。

斯かる内に午後一時過となり、敵艦は全勝丸を中心として又々圓形陣を作りつゝ、馳せ、三發の砲火を見舞ひたるも幸にして一發も中らず、折柄降雨次第に強く、風位西方に變じて強力を加へ、雨の爲めに敵艦の影を認め得ざるに至れり。此時高濱船長、山本事務長は相謀りて先づ船脚を輕ふせん爲め、敵艦に知れざるやう窃かに積荷中の米二百俵、雜貨數個を海中に投棄し、且つ天候を按ずるに此降雨は尙數時間引續くべき模様なれば、我より敵艦を見難き以上、彼も亦我を見ること無るべしと評議一決し、万一を賭して陸地近くに針路を取り、全速力を以て疾走せり、此時正に午後三時にして走ること二時間許り、又々風位西北に變じ逆浪山の如く、知らずくの間針路を失して津輕十三濱沖合に流され、辛ふじて午後八時半松前那福島港に入り、直ちに其頭末を函館水上署に打電したるなり、奈古浦丸の不幸に引替へ、全



勝丸の重圍を脱して全船三十八名の生命を拾ひ得たるは、真に天祐と謂ふ可し。』  
 如上の事實は全勝丸が目撃せし状況なれど、尙参考の爲め奈古浦丸船長の遭難始末書なるものを掲ぐ、全勝丸乗組員の談話と對照せば、其光景の如何に慘憺たりしかを知るに足らん。

本船儀二月十日、酒田港を出で、荷物を積み、船客男女各二名を搭載し、同日午後十時十分小樽に向け抜錨し、針路を北四一四迄進航、翌十一日午前六時三分入道崎燈臺眞横距離五海里に併航、同日午前十時燻作眞横距離十海里、尙同針路を取り進航中、同日午前十一時三十分頃、左舷約二點距離四海里、海上に朦朧として四隻の軍艦を認む、時に南東の強風高浪澎湃、何國の艦船たるを知る能はざれども既に最近の避地も十二海里離隔するを以て、逆も遁走の猶豫なきため總員を甲板上に呼び集め其の儘進航せり、近づくに及んで其の露艦たること判明し、茲に初めて宣戦の布告ありし事を想像せしも、進退維れ谷り又如何とも詮方なく、速力を減じて進

航せり、稍接近せし時、露艦は空砲を一發し、同時に「本船に併び來れ我は汝を許さず」、「早く船を見棄てよ」、續て「十五分間に船を見棄て去れ」の信號を爲せしを以て、直に端艇卸し方を命じ、「成る可く救助を與へられん事を要す」との信號を爲せしに、露艦は此時本船を通過せしも艦首を回轉し、且つ「我は汝を救助に赴きつゝあり」との回答をなし、四艦を以て本船を包圍し、容赦なく實彈を放發し始めた。此に於て躊躇なく最後の決心を以て、風下なる左舷の救命艇を卸し、半數の船員と船客を乗せ、本船を去らしめたり、尤も高浪なるを以て更に船体を一轉し、右舷を風下にし、其救命艇を卸さんとせり、此時迄に數發の彈丸既に船側を打貫き、且敵彈一番端艇の附近に落ち、村田常右衛門外一名負傷海中に墜落して即死せしも此場合は非なく殘員の悉皆を端艇に乘移らしめしが、事急なるが爲め各自の必需品は勿論、船内必要の書類すら持出す猶豫なく、本船の沈没するを認めつゝ、陸地に向て見棄て去らんとせしに、二大艦即ちロシア、グロモボイ左右より徐行し來り、



端艇に向て發砲し、彈丸頭上を飛散し、最早目的を達する事能はず、今は是安でな  
 りと、艦船に向つて漕寄せしに、彼より纜及び繩梯を垂下せしを以て、残らず轉乘  
 せり、然るに露艦にては各自の所持品を點檢し、金錢時計其の他一切物品を取上げ  
 たり、約一時にして奈古浦丸は船尾より浸入し始め、直立して轟沈するを確認した  
 り、此時瀛船全勝丸も敵の掌中に入りたるを認めたるも、其結果如何になりしやを  
 知らず、既にして船客四人は、一室に、船員三十七名は三室を興へられ、扉を嚴鎖  
 し、番兵を附し、便用以外には他出を禁じて、クロパンと茶を興へられたり、同日  
 午後三時頃より四隻の艦隊進行を始め、或は西北西、南西南と繼いで運轉し、日本  
 海を巡航せしが、十四日午後四時浦棟斯德に投錨せり、翌十五日朝發後各自に帽子  
 外套、靴等の防寒具を興へ、午前十時上陸せしめ未決監の如き一室に總員四十一名  
 を押込め、嚴しく閉鎖して、午後一時過ぐるも食事を興へず、室内の臭氣堪へ難く  
 向後如何なる處置を斷行するかと頗る憂慮せしが、意外にも午後二時過、一官吏總

員の外出を命じ、三時頃同日出帆の獨逸瀛船ストルベルヒ號に乗せしめ、長崎に歸  
 らしむる旨傳命せり、此に於て初めて蘇生の思ひを爲せり、五時解纜せしも港口に  
 て日没のため出港を許されず、港内へ戻り十九日午前十時拔錨したり。(以下略)  
 奈古浦丸船員は露艦に救はれし後ち、船員一同の生命は到底覺束なきを覺悟し、寧ろ  
 火藥庫に放火し露艦の轟沈と共に壯烈なる死を遂げんと、密々に相談を爲し之れが決  
 行を圖りしも、一室に監禁され便所の往復の外は一切外出せしめず、頗る嚴重に監守  
 されし爲め終に其目的を果すこと能はざりしとぞなん。  
 夫れ戰時に於ける敵國の商船は拿捕すべし、之を擊沈すべからず、其之れを擊沈する  
 場合は商船が敵國軍艦の命に従はず之に反抗するときに限る、奈古浦丸は決して反抗  
 せざるなり、否な彼れに向て却て救助船を派せんことを求めたり、而も暴慢なる露國  
 軍艦は救助船を送る間もなく之を砲撃して沈没せしめたり、而して全勝丸に向ては「止  
 れ」の信號をもなすことなくして、突如として發砲せり、之れ國際法を無視し、世界



の法律に違反したる野蠻的行動なり、我か艦隊の浦鹽斯德攻撃は之れが爲めに行はれ  
たり。

八雲出雲等八隻の堅艦は浦鹽斯德攻撃の目的をもつて〇〇地點を出發し、舳艫相啣み  
て朝鮮海岸に沿うて徑路を取りつゝ航行し、三月六日正午頃、アスコルド島沖に達せ  
り、夫れより漸次港内に向つて進行し、午後二時には海岸砲臺を去る約〇〇〇米突の  
處に到れり、此日寒氣凜烈氣温攝氏二十一度に低下し、潮水は舷側甲板に飛んで忽ち  
結氷し、支肢の運動意の如くならず手指墜らん計りなり、海岸より五六千米突の處ま  
で海面は凝結して遠く之れを望めば山の如く、近く之れを觀れば蓮葉の地中に浮ぶに  
勢鬪たり、視線の及ぶ所、陸もなく海もなく氷雪をもつて蔽はれ一點黑色のあるを認  
めず、ろが中に屹立として雲際に聳ゆるものをアスコルド島の燈臺なりとす。

斯くて我艦隊は全速力を以て結氷を破碎しつゝ、浦鹽斯德の東口よりバザルギン岬半  
島及びボスフォール海峡砲臺の射界を避けたる位置より北東陸岸砲臺に接近したるが

四面皆砲臺にして容易に港内へ闖入する能ざるを以て豫て偵察したる最も薄弱なる砲  
臺に向つて進み、其前方を二度廻轉して砲撃したり、然るに敵の砲臺には唯だ臺場の築  
きあむるのみにして、砲を据えざるものゝ如く、我艦隊に向つて應戦せざりし、且港内  
の各砲臺には兵員の影を認めしかば、敵は着弾の距離を危ふみてか、最終まで一發も  
砲火を開かず、只だ信號臺及び各砲臺に於て無線電信をもつて絶へず信號せるを認め  
たるのみなりし。

同二時四十分我艦隊は敵の應戦せざりしを見て、砲撃を止め後方に引揚ぐる間もなく  
ボカチール形の軍艦一隻港内より出で、窈かに我艦隊の動靜を偵察せるものゝ如し。  
續いて三隻の軍艦出來りしかば、我艦隊は水雷の襲撃を恐れ長く留まるの不得策なる  
を察し〇〇方面に退却したり、此夜は沖合に游弋して、更に翌七日午前六時艦隊を二  
隊に分ち第二隊は速力を緩めアメリカ灣附近の偵察をなし、又本隊は速力を早めて他  
の方面を偵察したる上、同九時頃再ひアスコルド島附近に於て合し、正午再ひ敵前〇



〇〇米突に近きしに、敵艦は前日の如くにして更に出来らず、各所の砲臺も亦沈黙して發火の模様なかりし、畢竟前日の威嚇砲撃其効を奏し、敵をして塞縮せしめたるに因るなれば、我艦隊は砲撃を加ふる必要なものと認め、其儘引揚げ露領の沿岸を航進しけるに、遙か後方に當つて一軍艦の我れを追従するもの、如く認めたり、其船形によつて推る敵艦に相違なければ、近寄り來らば目に物見せんと艦上の勇士は片唾を嚥んで待構て居たるに、敵艦は遠距離に在つて容易に近寄らず、漸々遅れて終に其影を見失ひしかば、夫れより露領及び滿韓の要地點を偵察して恙なく根據地に引揚げたり。

攻撃當時浦邊に在りし敵艦は左の四隻にして何れも露國艦隊中精良の閑へあるものなり。

- クロムポイ (裝甲巡洋艦) 一二、三五九噸
- ロシヤ (同) 上 一二、一九五噸

- リユーリック (同) 上 一〇、九三六噸
- ボカツイク (二等巡洋艦) 六、六七五噸

六日の攻撃の際淺間艦乗組二等機關兵曹濱崎慶三郎は未だ砲撃の開始されざる時なりしが、左舷後機關室灰葉パイプ放瀉口の蓋、前日來の寒氣にて凍結して開かねば、灰機關前に推積して火を焚くに困難を感ずるを以て、上官より之を開くべしと命せられたり、然るに寒氣甚だしく甲板より舷側に至るまで凍雪に蔽はれ、加ふるに波浪高くとして危険言ふべからず、多數の者は何れも遠巡躊躇の氣色ありしが、氏は一人奮然として此危険を冒し、「日本男兒が之しきことに懼れて戦さが出来るものか」と、言ひつゝ舷側に下りて凍氷を破碎せんとする一刹那、山の如き怒濤は甲板上に打寄せ來り、之と同時に身軀を結縛し置きし生命綱は半ばよりブツリ断れたれば、無慘や同兵曹は怒濤の爲めに没はれ、遂に死屍さへも發見するを得ざりしとは惜みても余りある事と云ふべし。



第十四章 第四回旅順の攻撃

(二) 我が軍の作戦計画

我が軍は、一回、二回、三回、旅順の敵を攻撃せり、而して第一回は奇襲を以て彼の堅艦を挫き、之に次々に主力艦隊の總攻撃を以てせり、第二回は快速の驅逐艇を以て敵の總艦隊に當り、猛虎の群羊を驅るが如く、鯨の鯨群に突入したるが如く、其効果に於ては特に見るべきものなかりしと雖も、此攻撃に依りて敵艦を寒からしめたることは確なり、第三回は即ち閉塞動作にして、穴の中に隠れたる野獸は坑口を塞がざるべからず、燕の巢を奪ひたる雀に對しては極めて適當の復讐なりしなり、然ども敵は砲臺掩護の下に、僅かに打ちなされたる殘艦を擁して餘命を保ち、我れ進めば敵は港内深く遁竄して出でず、我れ撃てば港口の砲臺は尙ほ頑強なる抵抗をなすなり、之れ所謂一條繩に卒へぬ代物なり、之を苦しむる策如何、第四回攻撃は之れが爲めに行はれたり。

第四回旅順攻撃は之を二個に大別して説明するを要す、第一は甲乙二隊の驅逐艇が或る秘密の任務を帯びて敵前動作を遂行したることにして、第二は主戦艦隊の間接射撃なり、間接射撃とは實体的目標を掲げず、専ら地圖に依りて方向、距離を定め、之に應じて照尺を掲げ、他の物躰を隔て、攻撃する射撃なり、之れ穴深く潜伏せる野獸に對しては最も適當なる戦術にして、側面より敵の腹背を打つ方法なり、而して此間に敵の驅逐艇と我が驅逐艇との間に接戦あり、殆ど彼我舷々相磨せんとする激戦は、世界の海戦史中絶無の事實にして、義經壇の浦の戦ひも遠く之には及ばず、眞に壯絶快絶の極、我輩は此の愉快なる海戦を記するに當り、殆ど骨鳴り肉動くの感あるを禁ずる能はず、而して讀者は此壯快なる海戦を目睹すると同時に、我が海軍の將士が一回は一回より勇氣激昂、其作戦計画の縦横旺盛々として盡さざることを泉の如き感謝せざるべからず、而して此に一の注意すべき點は、尙ほ我が作戦計画中に幾多の默秘



すべきものあることにして、我輩は日露海戦史を記するに當り、幾多の研究すべきもの、幾多の説明すべきものありと雖も、讀者と共に大名譽を擔へる日本國民として、苟も作戰計畫に關する事柄に就ては、宜しく謹慎の態度を取らざるべからず、之れ我輩が第四回旅順攻撃を記する前に當て特に讀者に謝する所以なり。

(二) 我か艦隊の進行

第四回攻撃は三月九日夜半より十日午後に亘りて開始せらる、之れより先き我か艦隊は戦闘艦、巡洋艦及び甲乙二隊の驅逐艇と共に某所の根據地を出發し旅順口に向ひたるが、此行我が艦隊は互に特殊の任務を有し、各其目的を達するにあれば、行きく月島の東南約二十海里の處に至れば、本隊は針路を西南に轉して威海衛の方面に向ひ、二隊の驅逐艇は直に港口に突進し、或はホームスライトを海中に投し、火を燃やして敵艦を浪費せしむるに努め且つ好機ならば敵の艦隊を襲撃せんことを期し、而して〇〇以下の巡洋艦は旅順口を去る約七十海里の處にありて遊弋す、時に九日午後五

時、雲の断れ間、薄日の漏るゝ處には時々電霞を飛ばして面白からぬ天候なり。既にして暗雲渤海灣頭を鎖ざし、夜に入りては風の音、濤の響、艇を叩いて物凄く、遙に敵の探海燈の明滅するを眺めながら、我が巡洋艦隊が旅順港前約四十哩の處に至る頃、渤海の波俄に起り、寒氣凜烈、夜目には夫と見えれど飛雪繽紛として絮の如く、敵さへ之に交はりて、艦上見る間に積雪を以て蔽はれ、乗組員の帽子外套は白皚々一時は鶴袴を着て勤務するが如く見へしが、約二十分にして歇み、各艦の山東角の燈臺を右舷に望みて回轉する時は夜已に十二時ならんとす。此時旅順の港前を眺むれば、敵の探海燈は盛に回轉し、其長さものは光芒天に沖して雲に入り、短きものは水に落ちて波上青蛇を躍らす、右よりするもの、左よりするもの、閃々煌々、凄光暗を劈き、其間に殷々たる砲聲の聞ゆるは、正に我が驅逐艇の戦闘を開始したるにやあらん。

(三) 甲驅逐隊の奮闘



借ても朝潮、霞、曉、薄雲、漣、曙、東雲の諸驅逐艇は、九日夜半旅順港外に達し、敵の動静を偵察する程に、敵は既に夫れと悟つてか、盛に探海燈を廻轉し、陸上砲臺よりは折りく砲臺を交へたるが、之ぞ所謂暗夜に鉄砲にて、何處を宛てど打つ大砲にあらざれば、我が驅逐艇は恰も遠距離の煙火を見物するが如き心地にて、港外を彼方此方に乗り廻し、専ら敵の牽制運動を爲す間に、薄雲以下の乙驅逐隊は、或る特別の任務を實行せんが爲めに旅順東口に向て進み、甲驅逐隊は老鉄山の南方に向て進航したり。

此夜は密雲空に満ち、旅順大連の峻山を削つて吹下ろす朔風は肌を劈き、或は霞を散し、或は雪を飛ばし、波浪險惡、風の音波の響き最と凄然たる折柄、老鉄山の方に當りて一隊の暗躰、其致は確に六七隻と思はしく、艦首に波を截る音凄まじく甲驅逐艇の方に向て来るは、果して敵か味方か、于時十日午前四時。

四時とは云へ海面一帯に暗黒、加ふるに波さへ高く低く充分なる目定めを爲し難く、

唯油断せずして進航すれば、彼方の艦隊も我が隊に向て、進航するもの、如く、次第に彼我の距離相迫るに連れ、眸を定めて凝視すれば、確に六隻より成る敵の驅逐艦なり、「スワヤ敵艦なるぞ」、「戦闘開始」の令傳はるや、彼我の艦艇は早や硝煙白濛々の裡に包まれたり。

此夜敵は日本艦隊が旅順港外に現はれたりとの報告に接するや、マンテリウキツチ大佐は、六隻の驅逐艦を率ひ、港外の偵察に出でたるが、今我が甲驅逐隊と衝突したるは、正しく此一連の驅逐隊にして、敵は六隻、我は三隻、對數の上にて彼已に優勢なれば、日頃は我が艦隊の影を望みて遁逃せし敵艦も、此日に限りては彼より猛進し來り、滿艦の大砲を放ちて我を邀撃す、之れ我に於て望みの所なり、海國男兒の本色を發揮するは此時なりと、勇氣凜烈、海を以て家とする我が日本の健兒が、海上を横行する様を見よと、霞、朝潮の二艦は全速力を以て眞一文字に敵の艦列を横きり、直に回轉して敵の側面に向つて砲彈を浴びせかけたり。



此敏速神の如き勦きに敵も一時は膽を抜かれたるが、折悪しく天候險惡の爲め信號通せず、唯曉の一艦のみ列を放れて遅れたり、此處ぞと付込む敵の砲弾は一時に之に向て集注し、不幸にして其一弾は曉の豫備機關に命中し、熱湯迸出、二三の負傷者を出したるにぞ、敵は尙ほも之に付入り、六隻の驅逐艇折り重りて曉を取捲きければ、曉も今は之迄なりと覺悟を定め、奮戦激闘、必死の勦凌ましく、其打出す一九敵の一艦に命中し、敵は見る／＼火災を起こし、今は沈没の運命も近からんとするに、彼も去る者、最後の覺悟や定めけん、曉を目かけ衝突せんと突進し來れり。

アワヤ曉の後部は敵の艦首の爲めに打ち貫ぬかれしならんと思ふ一刹那、舵機一轉、曉の船体か四十五度の角度を作りて回轉すれば、敵艦の目的は脆くも外づれ空を衝いて行過ぎたり、行過ぎたるを透さず、曉の後部六番砲は早や敵に向て急轉せられ、雨の如き急射撃は之に向て開始せられたるが、其距離僅に二間のみ、東郷司令長官が眩々相解せんとすと謂ひたるは、實に此瞬間のことにして、打出す曉の砲九一の空彈な

く敵の艦上は之れか爲めに殆ど掃蕩せられたり。

斯くて午前五時、東天漸く白を呈せんとするとき、敵の六艦、味方の三艦、互に入り亂れて奮闘、船の回轉する處には波瀾洶湧海若爲めに躍り、砲聲の響く處には白煙輪轉雲を捲き、我れ水雷を發するの一刹那、彼れ速射砲を以て之を撲ち、彼れ四吋砲を以て戦へば我れ速射砲を以て艦上を掃蕩し、電光石火、彼我の距離百間を出てず、既に驅逐艇と驅逐艇とを以て戦ふさへ海戦史上其例を見ざる所なるに、斯の如き短距離内に於て奮闘す、之れ前代未聞のことにして、而して我か各艦より放つ砲丸は殆ど空彈なく、中にも一彈敵艦の汽關部に當りて爆裂するや、艦上の敵兵は頭より熱湯を浴び、阿鼻叫喚の聲手に取るか如く聞ゆ、東郷司令長官か敵艦悲鳴を上げて遁走せりと謂ひしは、此時のことにして、海戦に於て敵の悲鳴を聞く之れ亦前代未聞の珍事と謂はざるへからず。

斯くて敵の一艦は火災を起し、他の一艦は汽關を打たれて遁走し、餘り四隻も暫くが



間は尙ほ踏み止まりて應戦せしが、遂に我が猛烈なる砲火に支ふること能はず、彼我の距離最も遠く離れたるとき、急に艦首を廻らして遁逃したり、此戦我も亦多少の損害を蒙り、死傷十五名、内戦死下士卒七名、負傷霞の大機士南澤安雄の外、士卒七名ありたり、而して戦死七名の中四名は曉の補助汽閥を破られし際にして、之か爲め曉は比較的損傷を受けたるも、其戦闘航海に就ては各艦共に少しの支障を見ざりしとは、固より我が海軍將士の沈勇にて技術に精練したる結果とは云へ、三隻を以て六隻に當り優に凱歌を奏したること又以て天佑なりと謂はざるべからず。

(四) 乙驅逐隊の激戦

乙驅逐隊は九日午後十一時、港口封鎖の任務に就き、或る方法を以て目的を達し、退却の際、曙の一艇は艦隊を離れて獨り港口近く突進し、敵の艦隊を搜索したるも見當らず、此時敵の砲臺よりは強烈なる三基の探海燈を照らして盛に攻撃を開始したるも弾は悉く海中に落ち、只電光の水烟に映射する様、壯觀凄絶なりしのみ、斯くて

我が艦隊が曙の歸り來るを俟ち、薄雲を先驅とし、東雲、漣之に次ぎ、曙は殿艦として隊列正しく外洋に向て進行したるは、天漸く明けんとするるときなりき。

折しも黄金山附近水平線上に二條の煤烟現はれ、快速力を以て我が驅逐隊の方向に向て進行し來るもの、如し、我が艦隊は正しく我が〇〇〇〇の分遣隊ならんと思ひしに接近するに従ひ仔細に諦視すれば、船は紛ふ方なき敵艦なり、スワヤ善き敵御坐んなれど我が艦隊の勇士猛卒は腕によりをかけ堅唾を飲んで俟つ程に、敵は我が艦隊の優勢なるを見て、俄に針路を轉じて逃んとす、左はさせじと我が艦隊其前路を遮るに敵は此度は旅順西口を指して一目散に走らんとす、我軍は昨夜より敵を搜索して得ず、今眼前に此好下物を見て何條之を逸すべき、最後に進みし曙は急に回轉して先驅となり、最先に進みし薄雲は殿艦となり、順次回轉して敵の側面に向て攻撃すれば、敵は周章狼狽、譬へば猫に逐はれたる鼠の如く、其出る所を知らざるもの、如くなりしが、此時敵は漣と相對して六百米突の距離にあり、而して其前艦は正しく敵



のステレグーシチーなることを確めければ、我が砲撃は先づ此二艦に向て集れり。

此に於て敵艦も今や之迄とや思ひけん、死物狂ひとなつて我が諸艦に向て應砲すれば黄金山の砲臺も味方の船を打たせじと、連りに巨砲を放ちて我が軍を攻撃す、之か爲め我が曙の如きは尤も砲撃の衝に當り、雨の如く敵弾を蒙りたるも、何條之に屈すへき、益奮闘して戦ふ程に、曙の放ちたる最後の一弾は過たず、敵の汽隔部を貫き幾多の叫聲を聞くと同時に、盛に蒸氣を噴出し、之を機として他の一艦は朦々たる白雲の裡に包まれたる儘遁逃したり。

一艦は逃げ去りたるも、他の一艦ステレグーシチーは尙ほ踏み止まりて善く戦へり、然ども其運命は最早定まれり、ステレグーシチーは我が砲弾の焦點となれり、見る々々全艦蜂の巢を見るか如く砲丸を受けたり、縦令殊死して奮闘するも今は如何ともすること能はず、其呼吸は漸く迫り、其煙突よりは苦し氣なる黒煙を吐きつゝ、次第に弛ふ處を、漣は之を見て取り、「敵船捕獲」の命は早くも艇上に響き渡れり。

之と同時に漣の一水兵は飛鳥の如く敵の甲板上に飛び上れり、彼の手には帝國軍艦旗を持って、彼は素早く敵の軍艦旗を倒はして之を蹂躪するよと見しきに、スレグーシチーの艦上には早や帝國軍艦旗翻々として朝風に翻れり、之を見たる我水兵は一度に敵艦に乗り移り、手當り次第に敵を切つて海中に陥れる程に、一人の水兵は昇降口を求めて甲板下に入らんとするとき、下よりムクくと頭を擡たげ來るものあり、善く々々視れば、之れ敵の艦長なり、水兵は「此馬鹿野郎」と大喝一聲、帶劍を抜くより早く眞額を切り付けたり、不意を打たれて敵將は倒れんとする處を、再び「露助の大馬鹿」と叫ひつゝ足蹴に懸けたれば、憐れ敵はザンプと計り海中に落ち、水溼を立て、底の藻屑となれり。

此時敵の艦上を見渡せば、胴より上は飛び下部分のみ残れるもの、或は手足のみありて軀軀のなきもの、或は腦蓋骨の打ち砕かれたるものあり、血は流れて一面川の如く、睹る者をして一見酸鼻の狀に堪へざらしめたるが、中に足部を負傷し、或は火傷して



尙ほ生存せるもの四人あり、偕て此等は捉へて捕虜となしたるが、其姓名を聞けば左の如し。

一等水雷工兵曹

ヒヨドル、デーミードルフ

火夫

イワン、ヒーワンスキー

同

フレキセー、マシーニン

同

ワシリー、ウイツコフ

斯くて捕獲船には網を附け、漣は之を曳き悠々として之を沖合に導きしが、此情態を砲臺上より見たる敵は如何なる感情を惹起せしか、砲臺よりは尙ほも盛に砲火を續けたるが、漣は之を意とせず、益沖合に向て曳き出せしが、此時迄風波未だ収らず、加ふるに捕獲船には數多の彈痕あり海水盛に浸入し、船は重く波は高く、遂に曳網は中央より切斷しければ、捕獲船は愈之を抛擲することに決し、端舟を送りて我が軍艦旗を撤し、四名の捕虜は之を本艦に移し、悠々として引揚げたり、ストラレグー

シチーは其後約一時間にして全く沈没したるが、後に聞けば先の汽鐘を破られて逃したる驅逐艇は其名をレシーテリヌイと稱し、旅順港内迄は無事に逃げ込みたるが、此處にて汽鐘破裂沈没したりと云ふ。

夫れ小艦を以て敵の砲臺下に接戦するさへ既に難しとする處なるに、自若として我が軍艦旗を敵艦に掲げ、更に其沈没せんとするに際し、之を撤するのみならず、敵兵を収容したる舉動は、真に日本海軍の本領を發揮し得て我が軍人が貴重なる軍艦旗に對する信念をも同ふに足るべしと、後に至りて大本營幕僚の一同が贊嘆したるは至當にして、甲乙二驅逐隊の奮闘は世界海戦史上の第一頁を飾るに足るべき事實なりとす。

(五) 間接射撃と看的報告

驅逐艇の戦闘終りたる後、我が軍は旅順の敵に向て更に大々的攻撃を試みたり、有跡に言へば驅逐艇と驅逐艇との戦闘は、快は即ち快なりと雖も、之れ敵に我が海軍の技倆と勇氣とを示すに止まり、終局の勝利に至つて更に他の大々的作戰計畫に俟ざるへ



からず、換言すれば敵か唯一の根據地と恃める旅順の死命を制し、旅順の陥落を期する底の作戰計畫を爲さるべからず、我か海軍の本隊か間接射撃を行ふは實に之が爲めならずんばならず。

我輩は驅逐艇の戦闘に依りて露國海軍の手並を知りぬ、最早露國海軍は恐るゝに足らぬを知れり、勿論敵は善く戦へり、殊にマカロウ提督の着任以來、敵の海軍は一新面目を呈し、ステレグーシチーの如きは、全員戦死、僅に四人の生存者を見るまで奮闘し、此以上は如何なる強國の海軍を以てするも其爲す處を知らざる迄に戦闘したりと雖も、而も我か驅逐艇は之に勝てり、一隻を捕獲し、一隻を沈没せしめたり、若し此日の戦に於て敵は死力を竭し、極力を挙げたりとすれば、露國海軍の手並は知れたり、我か海軍は容易に露國海軍を破ることを得へし、何となれば我か驅逐艇は勝てり、一隻を捕獲し、一隻を沈没せしめられたれば也。

然ども吾人は之を以て尙ほ未だ安心すべからざるなり、縱令二三の驅逐艇と難沈した

ればとて、全局の勝利の上に於ては何等の影響を及ぼすべきものにあらず、旅順の根據地を根底より陥落せしめんには、敵の全艦隊をして戦闘力を失はしめざるべからず、旅順の各砲臺をして沈黙せしめざるべからず、然らざれば敵の立脚地として頼む所の或る者を攻撃せざるべからず、我か間接射撃が如何にして行はれたるか、如何なる効果奏したるか、之れ第四回攻撃が單に驅逐艇の戦闘を以て終らず、更に本隊の總攻撃を奏したる所以にして、昨夜驅逐艇と分れたる本隊及び巡洋艦隊は如何なる任務に服しつゝあるか、乞ふ我輩をして更に説く所あらしめよ。

借ても某々以下の我か巡洋艦隊は、十日午前八時、〇〇艦を先頭とし、〇〇、〇〇の兩艦は、戦闘旗を勃海灣頭の朝風に翻へしつゝ、老鉄山の南方に向て進みたるが、八時三十分敵は愈々砲撃を開始し、之と同時に敵のノーウキック及びバーヤンの二艦は、我か艦隊の近くを見て同じく戦闘旗を掲げつゝ出て來れり、之を見たる我か艦隊は、珍らしや敵の二艦、借ても其後健在なりしが、殊にノーウキックには敵の提督マカロフ



坐乗し居れりと聞けば、波は荒れたりとも、夜明けの一快戦見事勝敗を決する覺悟なりや否やと窺へば、敵艦は遠く出て来る様子もなく、唯港口を彼方此方と彷徨するのみ、我も大体の意味は推し得たりとも、未だ豫定の任務に従事するには時間もあるべし、「イデ一戯ひして呉れん」と、我か常盤艦獨り列を離れて近く進めば、黄金山の砲臺は常盤に向て盛に砲撃を加へぬ。

左れと砲弾は多く常盤の前面に落ちて水煙を揚げ、中には橋頭を掠めて後方に落つるものありと雖も、常盤は之に對して故らに砲火を開かず、平然として進み、敵前近く押し寄せれば、敵は我が想像に遺はず二艦は直に艦首を廻らし、艦尾を我に示し慌たしく港内に逃げ込みたり、蓋し敵の計畵は我を海岸に誘致して其敷設水雷に罹らしめんと計るにあらざれば、要素の十字砲火に入れて我を苦しめんとするにあり、我か軍何條斯の如き淺臺なる計畵に乗るべき、常盤は敵の砲臺に向てグールドパイを與へ、少し右舷に廻轉して着弾距離外に出てたり。

斯くて午前十時、愈々所定の任務に着く時刻來りければ、我か巡洋艦隊は旅順口の正南〇〇海里の所に至り、何事を爲すともなく唯波の間に船を放ちて遊弋せり。此處よりは旅順口を正面に眺め、東は黄金山、電氣山の砲臺より搜索發電所に至り、西は老鉄山、蟹子營、威遠砲臺の一部を望み、而して兩岬相迫りたる水道を通ほして、港内深く老虎尾砲臺及び東港の入口より旅順市街を遠見する位置にあり、此日波は少しく高かりしと雖も、此頃の天候空氣は極めて乾燥し居れば右の諸景は手に取るが如く在りくと看的することを得たり。

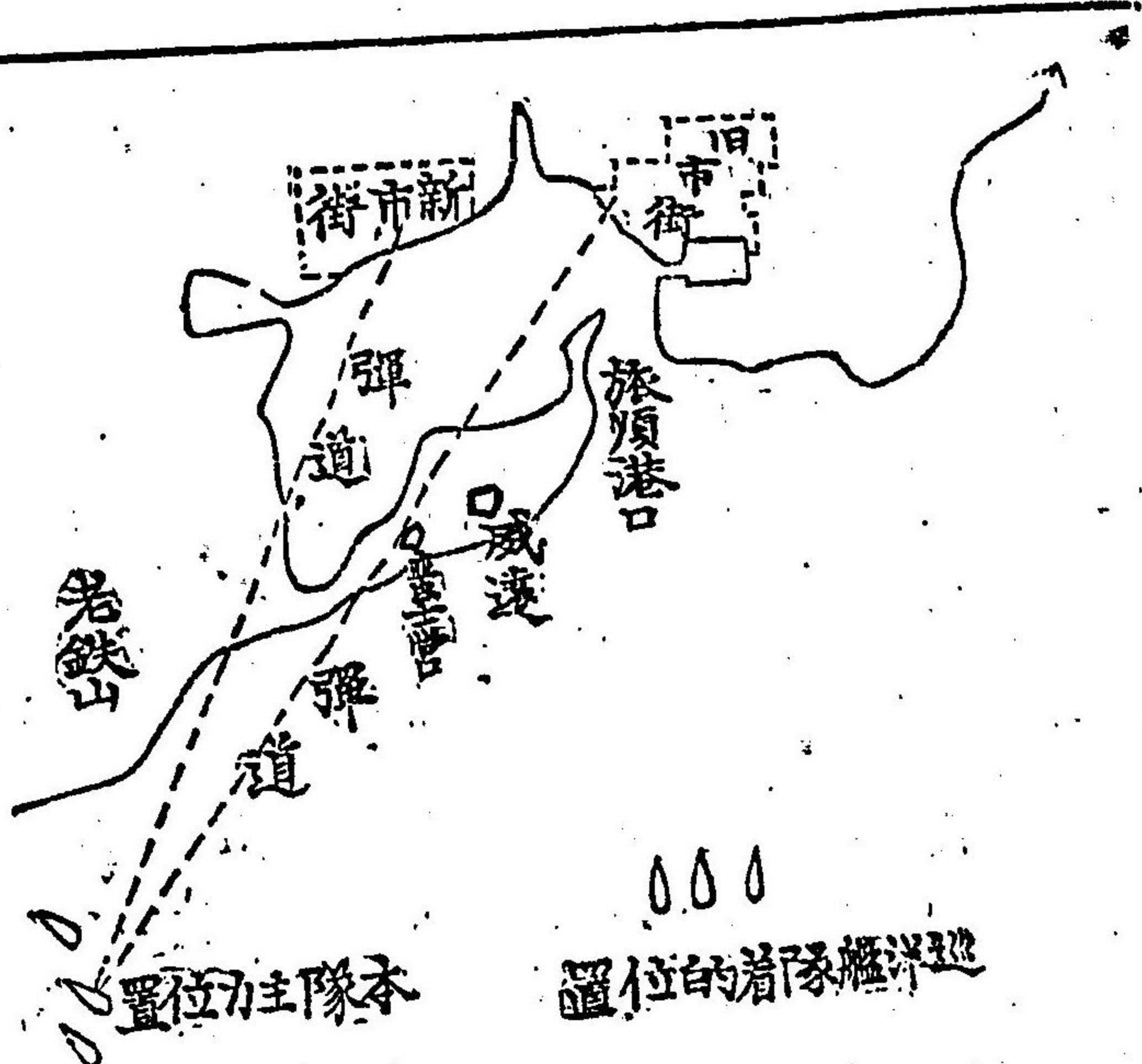
午前十時三十分、何處より來りしか、十二時の榴霰彈、旅順港内に於て爆發、其破片は飛んで旅順市街に散亂するもの、如し、續きて來る大尖彈、榴霰彈、或は船渠に衝りて破裂し、敵艦の上に至りて爆發し、之を手初めとして砲彈の飛來するもの幾千百發、老鉄山、蟹子營、威遠砲臺は忽ち其彈道の通路に當り、彈丸の爆發する毎に之等の砲臺は破片の雨を蒙り、遠きものは黄金山、電氣山に達し、市街に落ちたるものは白



煙の騰上するを見、次に濃々たる黒煙の起るを見、遂に炎々たる火災を起すの状、殆ど手に取るか如し、而して弾丸の適中する毎に、沖合に遊弋し居たる巡洋艦の信號臺には、信號兵の天の一方に向て頻りに信號するを見る、彼等は正しく看的報告を爲せる也。

然らば弾丸の來る所は何處ぞ、眈を決して我巡洋艦の在る處より正西に一直線、老鉄山の西南海上を見渡せば、幾多の戦闘艦、同じ様なる〇〇形を書きて幾回轉せるを見る、而して其回轉の毎に先づ艦首の巨砲、次に艦尾の巨砲、交番に白雲を放ちて巨砲の空氣を破りて轟々たるを見る、之れ我が本隊が本攻撃の目的たる間接射撃を爲せるなり、而して旅順の港内は今や阿鼻叫喚の焦熱地を現出せる最中なり。

抑も本隊の攻撃地點たる老鉄山の南麓は、海岸に沿ひて一帯の小山あり、殆ど高低なく相重りて其麓に二三軒支那人の家屋と思はるゝものあり、此處は黄金山砲臺の射角外にあり、而して老鉄山砲臺よりは山岳を隔て、我が艦隊を見ること能はず、且つ其



第十四章 第四回旅順の攻撃

距離余りに接近したれば、恰も野猪の頭部に蚊虻の止まりたるか如く敵は如何ともなすこと能はざるなり、之れ我が作戦計畫が最も其圖に當りたるものにして、敵は之に對して應砲することを得ず、唯空しく頭上を掠め行く彈道を眺めて首を縮むるのみ、外に詮んすべもなく手を拱して我砲撃に任せたること午前十時より、午後一時半に及びぬ、其間我が艦隊は殆んど無人の境に在りて演習するか如く、時々我が砲聲に愕きて飛來する海鳥の行末を眺めつゝ敵を砲撃したること、



誠まことに呑氣おんきなる戦争せんそうなりき。

(六) 間接射撃の結果

間接射撃かんせつしやげきは右みぎの如ごとにして行なはれたり、而しかして我われが十二吋砲彈はうだんの効力こうりきは如何いか、之これれ我等われらの或あるる意味いみに於おける看的報告くわんてきほうこくを以もつて等ひとしく聽きんど欲ほする問題もんたいなり、此この質問しつもんに付つき時とき事新報しんぱうの報道ほうどしたる諸威人しよゐじんの談話だんわは、往々明瞭めいりやうを欠かく點てんありと雖いへも、極きよくめて趣味しゆみある答辨たふべんなり、今左いまみぎに援用えんようして當時たうじの状況じやうきやうを説明せつめいすべし。

左ひだりの談話だんわは諸威國汽船しよゐこくきせんアルゴ、ブランド、ザイルスバットと稱しょうする三隻さんせうの汽船きせんの船長せんちやうより得えたる談だんなり、諸威國汽船しよゐこくきせんは三月十日我われが第四回攻戦だいよんかいこうせんのありたる日より、兩三日を経過けいごして旅順口りゆんこうを出港しゅつこうしたるが、出港しゅつこうに先まち船長等せんちやうらうは、旅順口りゆんこうの情狀じやうじやう若ごとしくは日本軍にっぽんぐんに對たいし利益りやくとなるか如ごとき報告ほうこくを爲なさることを宣言せんげんせしめられ、最も嚴重じんじゆんに秘密ひみつを守まもることを盟めいひたるを以もつて、之これに依よりて明確めいかくなる事實じじつを聞くことを得えざるは勿論もちろんなり、左ひだりは即ち談話中だんわちゆう、彼等かれらの良心りやうしんに對たいし決けつして諦あきらめざる程度ていどに於おて談話だんわせるものの中ちゆう、切

れの事實じじつを總合そうごうしたるものなれば、讀者しやくしやは豫あめ其心そのこころして讀よまざるべからず。

十日の砲撃ぱうげきの開始かいしせらるゝや、右三船みぎさんせんの乗組員じやうぐんは避難ひなんの爲ために上陸じやうりくしたり、何なにとなれば日本にっぽんの打出うちだしたる砲彈ぱうだん、全港内ぜんかうないを敵てきうて雨注あめつ亂下らんげしたればなり、而しかして港内かうないには右の三船さんせん破泊ははくし居ゐるものにして、アルゴ號アルゴごうはレトウイザン號レトウイザンごうを去いる一ケーブルの處ところにありたり、レトウイザン號レトウイザンごうは背せて座礁ざせうしたる位置いちを去いりて此程港内このほどかうないに引入れられたるものなり、アルゴ號アルゴごうの乗組員じやうぐんは、レトウイザン號レトウイザンごうが其中腹ちゆうちゆうを打うたれ、十九名の將校水兵しやうがうすいへい之これに死しするを見たり、日本砲彈にっぽんぱうだんの効力こうりきは恐おそる可べきものにして、非常ひじょうの高角度かうかくどより落下らくがし來きれり。

又またしてもレトウイザンは、我われが砲彈ぱうだんに依よりて損傷そんしやうせられたり、而しかして之これと同時に敵の將校しやうがう十九名一度に戦死せんじしたるを知るべし。

余われは港口かうこうの左なる岬角すまがくの下に隠れたるが、海面かいめんを望のぞむに、時々三隻の日本軍艦にっぽんぐんかんが、非常ひじょうの遠距離えんきりに在あり、其或そのあるるものゝ如ごときは十三哩の沖合おきあに在あるを見たり。



之れ看的報告を爲さんか爲めに、旅順口の遙か沖合に遊弋し居たる我が巡洋艦なるを  
知んや。

併し、老鐵山の下に在りし五隻の日本軍艦より發射せられたる砲弾は、他のものよ  
り一層近くに來り、且つ彈道良好なりし、而して其砲彈の殆ど全部は、余等の頂上  
を飛び越して、港内、船渠、若干の露國軍艦、新市街の建物に命中したり、而して  
余等の見たる所に所れば、軍艦に命中したる砲弾は二箇にして、其一是トツイザ  
ン號に命中し、他の一は船渠に近接し碇泊し居たる二本煙突の巡洋艦の、殆ど水線  
近くに命中し、舷側及び外装の大部分を跳ね上げたり、左れど不思議にも汽鐘若し  
くは火藥庫の破裂を見ず、又沈没もせざりき、併し火災を起し、若干時間炎焼した  
り、後に至り露人の語る所に依れば、右の一丸の爲めに百名の死傷者を出したりと  
云ふ、

砲弾は愈々急に、愈々劇烈に、船渠の近邊に落下し、且つ火藥庫に甚だ近き處を打  
ちたり、船渠には目下戰國艦修繕の爲め入渠し居れり云ふ、之れ宣警事項

左れど諾威人は船渠が破損せられたるや否やに就ては口を開かずき、之れ宣警事項  
に屬したる歟。

汽船モンゴリヤ號は、目下病院船となり居れるが、是れ亦砲弾に中り、六名の死者  
を出したりとのことなりし、

砲撃中港内には十隻若しくは十二隻の軍艦あり、バイーン、ノウキツク之二艦を除  
きては港外に出でず、亦發砲することなかりき、

諾威人は斯の如き稀有の不活潑を以て、運航することを得る戰國艦なかりしを恐れた  
るに基つくものを爲せり。

余はマカロフ提督が、バイーン號に其將旗を翻し、ノウキツク號を引率して出港する  
を見たり、右の二艦は發砲すること一時間にして又々港内に歸り來れり、右の軍艦  
に砲弾が命中したりしや否やは之を知らず、



之れ眞の事實なり、マカロフかバーヤンに坐乗し居たることは前に説明したり、而て此二艦か我が砲彈を受けしや否やに就ては之を知らずと答へし諾威人の談話は、知らざるを知らずして答ふるものなり、何となれば此時我常盤艦は一彈をも射發せざればなり、諾威人我を欺かず。

日本の砲撃に對し、砲臺は僅少なる應砲を爲したり、砲撃は午前九時三十分開始なり、午後一時三十分まで引續きたり、二時に至り汽船の乗組員は食事の爲め各々其の船に歸りたり、又余等は露國が彈藥に欠乏し居ることを信せず、陸上に於ては百名の死者あり、或る一彈の如きは地上に落下して十五名の死傷者を出せり、余等の一人は一時に三名の死するを見たり、然れども進んで尙は斯くの如き例を見んとはせざりし。

砲彈に依り最も損害を受けたるは、新市街に於ける一の重立たる街衢にして、其大なる家屋を有せる一區域内は、砲彈の爲め全部若しくは一部を破壊せられたり砲彈の爆發するや、一々細ての物を粉碎し、地面には直徑四五呎の穴を穿ち、砲彈に命中したる家の煉瓦、石、器物を飛ばすこと驟雨の如くなりき。

斯く迄に我砲彈の猛烈ならんとは、吾人と雖も之を知るを得ざりき、而も露國最負なる諾威人より之を聞くに至つては、慘の慘なりもの、而して事實は尙之よりも一層猛烈なるものありしならんとは、讀者と共に推測し得る所なり。

然ども余等は火藥庫が爆發したるを聞かず、且つ砲臺に對し幾許の損害ありしやも之と知らず、只港口なる高さ砲臺は、砲彈に中り甚しく損傷したるが如く見受けられ、石等の断片雨の如く飛來り、右三隻の汽船の旅順口を出帆したる時、戦艦トウイザン、ツエザレウイツチ、セバストポールの三隻は船渠に在り、他の軍艦は姿なかりし、然し此等の軍艦が何日何處に行きしやは之を語る能はず、兎に角去る土曜日には(十二日)三隻の戦艦の外には、港内にありし軍艦一隻もあらざりしなり。



旅順に在る敵艦の出港したることは、一時世間に傳へられ、或は浦羅斯徳の艦隊と合併せんか爲めに、出港せりとの説さへ風評されたるが、須臾にして其事實は打ち消されたり。

而して又他の一新事實として諾威人の語る所に依れば

去る九日、即ち砲撃の前日、露國海軍の官吏は、東清鐵道會社の社旗を翻せる二隻の老朽船に石塊を搭載し、之を燈臺及び港口の左方に沈没せられたる日本閉塞船と一直線に港外に沈没せしめたり、右二船の橋、煙突、船體の上部はV字形をなせるを見る、斯くして航路は僅々三四百呎の幅を有することとなり、浮標、旗を以て之を示せり。

と、果して然るか、此一節は注意して聞かざるへからず、而て諾威人の考ふる所に依れば

旅順口は今後尙は久しく之を維持することを得べく、食糧は尙は十分多量に之を

有し、露國官吏の手に保管せられたりあり、而して露國官吏は、三諾威船が旅順口に碇泊せる間、日々多量の食糧を送り呉れたり、

又砲撃の日、四五隻の露國軍艦は、早朝より殆ど日没まで、日本艦隊を偵察せんが爲り港外に出でしが、早朝二十餘隻の日本艦隊発見せられたりとの報告に接し、終日恐慌を惹起せしが、偵察艦歸來し沿岸に敵艦なしとの報告をなすに及びて漸く鎮靜したり、

之れ露國海軍としては正に有るべきの事實、其恐怖の有様見るか如し。港の向側の燈臺に對して、マルコニー信號所あれども其効用殆どなし、マカロフ提督の來任以來、海軍の訓練上著しき改良を來したると明なり、而して損傷したる軍艦に對する修繕は、従前に比し一層取急ぎ爲されたりあり、左れをツエザレウイツナ並にレトウイザンは、事實に於て望なしとして放擲せらる、レトウイザン、ツエザレウイツナの二艦が、實際戰闘用に堪へずとは萬口符節を合す



るが如し。

以上の談話は諾威船乗組員の實見談なり、元來諾威人は露國に同情を表するもの、而して其語る所斯の如し、以て作戰の計畫高妙にして最も趣味に富みたる第四回攻撃が如何に敵に對して大打撃を加へたるかを知るべし。

(七)

マカロフ中將と其戰術論

此日の戦ひ敵の動作に着て吾人の注意を要するものは、マカロフ中將が新に東洋艦隊司令長官に任せられたる以來、敵の元氣が一變したること之なり、情報に依ればマカロフ中將は三月八日、旅順に着し、幾多の露國將校の出迎を受けたる後、直にスタルク中將と交代し、巡洋艦アスコルドの橋頭に司令長官旗は掲げられたり、而して其十日は我が軍が第四回攻撃を試みたる日にして、此日中將は一の驅逐艇に乘組み居たるもの、如し、ステレグーシチーが我が砲彈の爲めに、撃沈せられんとするを見るや彼は直にノーウヤツクに乘移り、アスコルドと共に其救助に盡力したるが、遂に敵

せずして退却したりと云ふ、スタルク中將は第一回攻撃の際には、最も危険少き陸上砲台にありて指揮し、第二回第三回攻撃の際には彼は何處にありしか、其居所さへ判然せざりしに引き換へ、新任提督が自ら水上にあり、我軍に接近して戦闘したる勇氣に至りては、スタルクと同日を以て語るべからず、殊に此日驅逐艇の會戦は、殆ど彼れより攻勢を取りて突進し來りたるもの、如し、之れ此會戦に於て初めて見たる所の現象にして、其最後に至るまでの戦情は、又前日の露國海軍にあらず、之れ豈に由來精神家として傳へられ、戦術家として其名を轟かしたるマカロフ中將が、新に水軍の司令長官に任せられたる爲なるを知らんや。

中將は露曆千八百四十八年十二月二十七日ニコラエフに生れ、ヘルブン縣のツウオリヤニン族に屬し、平民と貴族との中間に位する身分にして、享年丁度我が東郷司令長官と同年なりと云ふ、彼が一生の内最も有名なる事實として傳へらるゝものは、露土戦争の當時、横杆水雷を以て汽船の釣架に吊るし、敵の艦隊の胸中を見掛けて突進し、



大に土耳其軍艦をして戦慄せしめたることにして、之れよりマカロフの馳名は歐州に轟き、其剛勇にして果斷なるは大に東洋風の處あり、我が軍に取り侮るへからざる敵なるか上に、彼は平素讀書家たり、自ら組織的腦髓を有し、其著述戰術論は單に露國に於てのみならず、歐米の戰術家の間にも喧傳せられ、我が國に於ても亦マカロフ戰術論の翻譯を見るに至れり、彼は太平洋艦隊司令長官の下に勤務し、曾て東洋にも居たることあれば、自ら東洋の事情には精通し、且つ其著書は多く氣を以て克ち、戰爭の秘訣は將士軍人の精神的素養を以て第一となし、物質的兵器は第三第三に屬することを喝破し、ナポレオンの成功を批評して

其成功の四分の三は精神的原素によりて決し、物質的状況如何によりて決するは四分の一に過ぎず、

と謂へるか如きは、殆ど孫吳の兵法と同一筆法にして我が東洋人の意を得たるものなり、然れども彼の所謂兵法は偶々我が日本海軍の特長と技倆を説明したるものにして、其否定せし反面より、自國軍人の短所を指摘したるものとなりたるこそ氣の毒なれ。

我軍は彼の所謂戰術論なるもの、數節を抜摘し、彼の作戰計畫が那邊に存するかを知らしむると同時に、日本の海軍が殆ど夫と同一に着々効果を奏しつゝあるかを伺ふべし。

制海權なる語の解釋に於ける或意義の矛盾に曰く、戰略の二大家マハン及びコロムの説によれば、戰時艦隊の目的は、制海權を獲るに在り、從來此説をなす者以爲らく、制海權を獲たる艦隊とは、撃破せられたる對手が敢て自己の港灣外に出港し能はざるの時に於て、縱横自在に公然と其海面を航行するの謂なりと、然りと雖も現今果して此の如くなるを得るや否や、此戰勝の艦隊と雖も、必ず夜間は敵の水雷艇の襲撃を避くべく大に警戒を加へざるを得ず、若し此戰勝艦隊たるもの、萬一夜間此注意を忘るゝ時は、艦隊は初回の夜襲に一艦を失ひ、第二回に其二艦を失ふこと



なさを保せず、海軍軍人は兎に角、之を局外者に聞かしめんには、必ず此怖るべき  
 戦争艦隊が、いかなれば此敗餘の小敵の爲に警戒せざるべからざるかを疑ふべし。  
 此論は恰も我日本の海軍に向て一の警告を與ふるものなることを知る、我輩は今日  
 黄海の制海權か何れに屬したるかを問ふを要せず、旅順口に一艦にても敵の廢艦艦の  
 らんか、我は之を蘇沈し捕獲したる上にあらざれば、中將の注告の如く自ら制海權を  
 得たりとは自稱せず、而して初回の襲撃に一艦を失ひ、第二に二艦を失ひ、如斯にし  
 て遂に全艦隊を失はんとする情態は、我にわらずして彼にありを如何せん。  
 精神的要素研究の必要に曰く伯德大帝曰勇膽と信義とは國家最良の防禦なりと奈波  
 翁曰戦争に於て成功の四分の三は精神的原素によりて決し物質的状況如何に依て決  
 するは四分の一に過ぎず。

吁、ビートル大帝の所謂勇膽と信義なるもの何處にあり、彼は内に虚無黨あり、無政府  
 黨あり、露國の宮中には前驛百出、自由、平和、信義の主張者は皆反對黨の毒手に  
 斃れ、昨日迄健全にして雄辯を振ひし政治家は一夜の中に死報を發表するに至ること  
 は珍らしからず、殊に恐るべき脅迫状は、左しも嚴重なる近衛兵の守護を潜りて屢々  
 現皇帝の机上を置かるゝと云ふ、知らずや忠勇義烈は我が日本の如き萬世一系の天子  
 を威す、死を觀ること歸するか如き國體に於て初めて見ることを。

露國史乘の實例を示して曰く、軍艦の志氣を熾ならしむるの機能はナルソンの獨占  
 にあらず、伯德大帝に於て一層傑出せしを見る、其當時最も老練なる瑞典人と戦ひ  
 能く勝てり、又クリミヤ戦争の時シープルの海戦、及セバストポールの防禦の如  
 き、其元氣賞揚の語なきに苦しむ、露國スウオロフ大佐は陸軍の有名なる戦術家な  
 り、其秘訣に曰く神速、突貫、奇襲、是なりと、海軍に於ても亦然りスウオロフは  
 嘗て其戦勝は總て僥倖なりとの風聞あるや、將軍笑つて曰く今日も僥倖なれば明日  
 も僥倖なり、然れども時として技術に因るなくんばならずと。  
 神速、奇襲、突貫、之れ何國兵士の獨特なるか、願くはマカロン自身の説明を聽き度



なるものなり。

武器は變更すべく、随つて其取扱ひの方法も亦改正すべし、然れども武器を取扱ふの手腕及び此手腕を行動せしむる人の腦力は終始變らざる者なり。

神速の決断及び不撓の膽力を開發するは、平素實戦に類似する演習をなし、終に實戦を以て演習と同一視するに至らしむる事を要す。

船體の掃除は一年間も抛棄して顧みず、自ら龍大を待み、恫喝を遣にする外には、絶へて實戦演習を爲すことなく、以て新進氣鋭の我が海軍に當らんとす、之れ自ら自己の運命を豫言するものにして、東郷司令長官の報告は常に曰く、「斯る間に於ても我が將校下士卒は殆ど平素の演習と異なることなく平然として勤務に従事せり」云々。

トラフアルガルの海戦に於て、一はテルソン、一はナポレオンなり、而かも其開戦に與へたる訓令を見るに、其艦の損失に關する意見の一致せるは奇ならずや、即ち艦の重すべきよりも、たとへ艦を失ふも名譽の伴はんことを期せり。

此一節は多少中將が其部下の運命を説明したるが如きの感を感じ、少くもステレンジャーシナイの最後は之れなり。

海軍軍人には特に名譽の死を遂ぐると云ふ意志一層必要なり、海上に於ける戦國は些の準備を爲すの暇なく突如として起るものなれば、豫て名譽の死を遂ぐるの意志を涵養したる艦隊は、對手に對し精神上の卓越を有す。

我が廣瀬中佐を見よ、杉野兵曹長を見よ、此二人は死するのとき死せるにわらず、平素海軍の軍人として名譽の戦死を遂ぐるこの意思は涵養せられつゝありし也。

予はある時、某練習艦を檢閲し、其秩序的事業時間の分配等を見、圖らずも思惟せり、斯の如き境涯は秩序的に勇氣及び決断力を撲滅し、不知不識の間憶病心を涵養し、因襲を除却するの奮發心を遲疑せしむる基ならずや、現に廿二歳に達したる壯

年者と、一生徒として學校内に閉居せしむれば、彼は出校後も依然として憶病なる生徒たるべし。



戦闘に關する訓令以外に、予は曰はんとす、此外に至りては余は諸君に勸告す、諸君が自己の胸中の常識に聞かんことを。

マカロフ中將は又水雷戦争が露國人の氣風に適へりとして論じて曰く、

水雷戦争は、夫の出没自在なる遊撃隊戦争に髣髴たる者なり、而して此の如き氣風は露國人に適へり、紀律の點に至りては或は西歐諸國人に譲るべしと雖も、一朝戦端開くるに於て、各部隊の氣概は能く組織上の缺點を補ふを得るは露國人の特長なり、此の如き國民には水雷戦争に於て無上の特點あるべし、夜間水雷攻撃の際に於ける精神的原素は極めて必要なり、剛氣の人を以て水雷艇に乗組せしめんか、其夜間襲撃は必ず十分の成功を收むること疑を容れず、夷然として死に臨む、大膽力の士は不思議の偉功を奏すべく、露國の俚諺にある「衆目の前に於てする死は晴の事なり」、「天は猛者を護る」とは千古の金言なり。

是に至つて「自家の心事は自家之を知る」の格言は甚た價值なきものゝなれり、果して

露國人は水雷乗組に適當せるか、第一回我が水雷攻撃は如何、第二、第三水雷驅逐艇の突進は如何、之を見ても尙ほ露國人は水雷乗組に適當せりと言ふへきか、而して日本人は單に晴れの場所に於てのみならず、一朝武士の面目立たざるに於ては、人知れず死することあるを記服せよ。

行動の區域は、決して排水量の如何によらず、艦を沈降せしむるもの、排除に存す余は甲飯を排除し、補助機關を設備し、電氣燈機關を廢し去らば、三千噸の艦をして、途中石炭の積込を要せずして、五節の速力にて、クロナスタッドより烏港に直航せしむるを得べしと信ず。

露國の極東派遣艦隊がシブチルより本國に向つて歸航せるを見れば、此の理論の應用も露國人には覺束なきことなり。

一名の長官を必要とする一頭主義、及び決勝點に主力を集合する主義は、陸海軍共に一致すと雖も、互に援主義は大に考慮せざるべからず、夫のツブナルスーヴ



がトラファルガルの海戦に先ち、部下の各艦は互に應援するを以て目的とすべしと  
嚴命せしに拘はらず、彼は全敗せり、然るにネルソンは艦隊の一部は天命に委せざ  
るべからずとなし、大に克てり、故に互援の語は海軍にありては一齊に敵に當るの  
謂なりと解するを恰當とす。

是れ烏港艦隊が有力なる装甲巡洋艦を擁しながら、旅順艦隊の廢滅に何等の効力をも  
與ふる能はざる所以か。

今日迄の海軍の進歩は、各種海軍軍事學の改良たるに過ぎず、されど戰國の技術に  
ありては不完全なる前例に於て之を求むるより、寧ろ常識に依信するの勝れるに如  
かず、要するに總ての戰術論は一に勇敢ならざるもの必ず敗るべしと云ふ古來の格  
言を證明するに過ぎざる也。

「勇敢ならざるもの必ず敗るべし」此一言は後日の左券として我が海軍の取り置くべ  
き言質なり、露國軍人の勇敢なるや否やは、必ず近き將來に於て實驗することを得べ  
し。

現時海軍戰術に於て大主義となすもの四あり、即ち左の如し、

- 第一 大勢力を以てする敵艦隊の一部の攻撃
- 第二 敵の弱點の攻撃
- 第三 味方の強勢の方を以て敵に面する事
- 第四 相互の應援

以上の主義は正確なるものにして、恰もAは露國アルハベットの第一字たるに相違  
なしと云ふ如くなれど、若し此語學の蘊奥は一に文字の順序を知るにありと主張せ  
ば大なる誤りなり、百の戰術何かあらん、只常識と勇敢あるのみ。

第一の原則は我れ仁川の海戦に於て其實例を見たり、第三の原則は今や吾人は旅順の  
攻撃に於て實驗しつゝあり、第二の原則は日ならずして我軍に依りて行はるべし、而  
して敵は旅順と仁川と浦港とに三大根據地を有しなから、第四の原則は如何に實行せ



られたるか。

之を要するにマカロフ中將の戰術論は皆確的なり、然れども其戰術は全部我が日本海軍の作戰行動を豫言すると同時に、自國海軍の短所を説明するもの也、中將の言真に我を欺かざるなり。

閑旅順捷報作

學海 依田 百川

濃霧黯淡夜天黑。	水雷艇疾奮鵬翼。	艦艇爆然乍壞崩。	驚濤倒立三千尺。
黑雲半破紅暎高。	十六鐵艦何雄豪。	萬砲齊發海欲裂。	虜寨粉塵虜兵逃。
嗟呼虎狼恃強縱貪慾。	皇天豈容流厥毒。	藉手我邦懲爾罪。	且剝爾皮啖爾肉。

第十五章 第五回旅順の攻撃

旅順口第五回攻撃は三月二十一日の夜半より二十二日午後に及びて開始せられたり、

先づ敵方アレキシーフ總督より露帝に宛てて發したりと云ふ電報を見るに、  
本月廿一日子夜、二隻の水雷艇、旅順港外に接近したるも、砲臺の探海燈の爲發見せられ、且つ砲臺並にポール、オトワジヌイ兩砲臺よりの砲火の爲め退去したる朝四時三隻の日本水雷艇再び攻撃を試みたるも是亦擊退せられたり、午前七時に及び露國艦隊は、旅順港内より出港を始む、アスコルドは巡洋艦の先頭たり、戰艦之に隨ふ、日本戰艦は老鐵山に近づき砲火を開きたり、レトヴィガンは老鐵山頂を越えて日本戰艦を砲撃し、日本戰艦は市街に對する砲火を以て之に應じたり、午前十時日本戰艦の一隻は砲弾の命中する處となりて退却せり、午前十一時、砲撃漸く緩むに至り、日本艦隊は再び相合し徐々と南方へ退航し、午



後零時三十分には全く踪跡を認めず、陸上に於ける露國側の死傷は、死者兵卒五名、負傷同九名、打撲傷を受けたるもの同一名なり。

と、之に對する我が東郷司令長官より發したる公報に依れば左の如し。  
聯合艦隊は豫定の如く行動し、兩驅逐隊は廿一日夜より廿二日未明迄、旅順港外に在りて與へたる任務を遂行せり、此間多少敵の砲火を蒙りしも別に損傷なし、又本隊及巡洋艦隊は廿二日午前八時旅順口沖に達し、其一部を鳩灣の方向に遣はし、富士八島をして港内に對し間接射撃を行はしめたり、此砲撃中、敵艦は漸次港外に出で來り、午後二時過ぎ間接射撃を止むるの頃、其敵艦五隻、巡洋艦四隻、驅逐艦十隻となれり、敵は終始砲臺下に運動し、我を誘致せんとするものと認めたり、又敵艦よりも間接射撃をなしたるもの、如く、特に富士の附近に着弾多かりしも一も損傷なし、

我各部隊は午後三時迄に港外に去り引上げたり。  
此報告中、我が艦隊が旅順港外に在りて與へたる任務を遂行せりとあるは、勿論軍事上の秘密に屬して語るを得ず、而して二十二日午前八時其一部を分ち鳩灣の方向に遣はし、間接射撃を行はしめたりとあるは頗る見るべき作戰計畫にして、鳩灣は渤海灣の内方、旅順口の背面に當る小灣にして、此處には敵の砲臺なく之より旅順口に達するには一帯の山脈あるのみにして極めて近距離なり、我が艦隊の機敏なる、富士八島を派遣して間接射撃を行はしむ、彈道は一帯の山脈を越へて後方の海上より前方の海面に達し、旅順の市街、船渠、砲臺は正に其砲撃の衝に當れり、アレキシーフの公報に「日本艦隊は市街に達する砲火を以て之に應じたり」とあるは之なり。  
要するに第五回攻撃は或る一種の意味を有し、驟然に正面攻撃を爲すが如きは其目的にはあらずし、次の第二回閉塞動作は多少其秘密の一部を表はしたるものなり。



第十六章 第六回旅順の攻撃

(第二回閉塞運動)

我輩は前後數回、我が海軍の勇壯にして生氣に富める旅順の攻撃を叙し去り、叙し來り、將に本書の海戦記を終らんとする際に於て、更に壯絶快絶の報道に接したり、其は我が海軍の艦隊が第五回攻撃に續きて未だ三日ならずして第二回閉塞を實行したること之なり、閉塞運動は第一回に於て未だ十分なる効果を奏せず、當時之に従事したる勇士猛卒は其怨み骨髓に徹し、方に日を期して第二回閉塞を試みんと欲す、東郷司令長官は其意を諒とすると雖も、斯の如き大膽なる計畫は屢々行ふべからざることを以てするも、一たび死を決したるものは、更に生きんことを欲せず、之が爲めに再び閉塞運動を爲さんことを懸望して止まざるもの其數二千五百餘人に達す、司令長官も今は勇士猛卒の懸望もだし難く、僅に其意に従つて愈此恐るべき大計畫に同意したる

が、戦術の法として先きに危険の仕事に従事したるものは之を休養せしめ、新に志願するものを選抜して其任に當らしめたるが、將校に至つては容易に此規則に従ふことを得ず、中にも廣瀬少佐の如きは断然決する處あり、縦令六尺に足らぬ身を以てするも、魂魄は永く旅順の港口に止まつて敵艦の出入を閉塞せんとするの意氣充滿して止むること能はず、此に於て將校は多く前回の勇士を用ひ、二月二十七日愈第二回の閉塞は開始せられたり、當時の状況及び結果に就ては東郷司令長官の報告詳細を極めた

聯合艦隊は去二十六日再び旅順口に向ひ、同二十七日午前三時三十分敵港閉塞を決行せり、四隻の閉塞隊は、驅逐隊及水雷艇隊掩護の下に旅順口港外に達し、敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し、約二海里に達する頃敵の發見するところとなり兩岸の要塞及哨艇より猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず、四隻相次で港口水道に闖入し、第一の千代丸は黄金山の西側に於て、海岸より約半鐘の處に投筒爆沈し



第二の福井丸は千代丸の左側を過ぎて少く前方に進み、投錨せんとするとき敵驅逐艦より、魚形水雷一發命中し、次で其位地に爆發沈没し、第三彌彦丸も福井丸の左側に出で投錨爆發せり、第四の米山丸は稍々後れて港口に達し、敵の一驅逐艦の艦尾と衝突しながら、既に沈没せる千代丸と福井丸との間を通過し、水道の中央に投錨せしとき、敵の魚形水雷一發を受け、爆裂し惰力の爲め左岸に近く、船首を左にして横に沈没せり、敵の猛烈なる砲火の下に於て、斯の如く閉塞船が勇敢沈着其任務を遂行したるは、事業として間然する所なく、誠に賞讃するに餘りあり、唯遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に尙空隙を存し、完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす。

此壯烈なる閉塞の再舉は、前回之に従事したる勇士の切願を容れ、將校及び機關士は主として前回の者をして之に任せしめ、下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり、閉塞隊員中、戦死中佐廣瀬武夫、兵曹長杉野孫七、外下士卒二名、重傷中尉島田初藏、輕傷大尉正木義太、大機關士栗田富太郎外下士卒六名にして、其他は悉く無事、我が水雷隊驅逐隊に收容されたり。

戦死者中、福井丸の廣瀬中佐及杉野兵曹長の最期は頗る壯烈にして、同船の投錨せんとするや、杉野兵曹長は爆發藥に點火する爲め船艙に下りし時、敵の魚形水雷命中したるを以て、遂に戦死せるもの、如く、廣瀬中佐は乗員を端舟に乘移らしめ、中したるを以て、遂に戦死せるもの、如く、船體漸次に沈没、杉野兵曹長の見當らざる爲め、自ら三たび船内を搜索したるも、船體漸次に沈没、海水上甲板に達せるを以て、止むを得ず端舟に下り、本船を離れ、敵彈の下を退却せる際、一巨彈中佐の頭部を撃ち、中佐の體は一片の肉塊を艇内に殘して海中に墜落したるものなり、中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず、其最期に於ても萬世不滅の好鑑を殘せるものと謂つべし。(少佐は此日を以て中佐に昇進す) 閉塞隊員の掩護收容に就ては、直接其任に當りし水雷艇隊最も其力を盡し、天明過ぐる迄敵の砲火に曝露して其任務を遂行せり、就中蒼鷹、燕の二艇は閉塞船隊を護

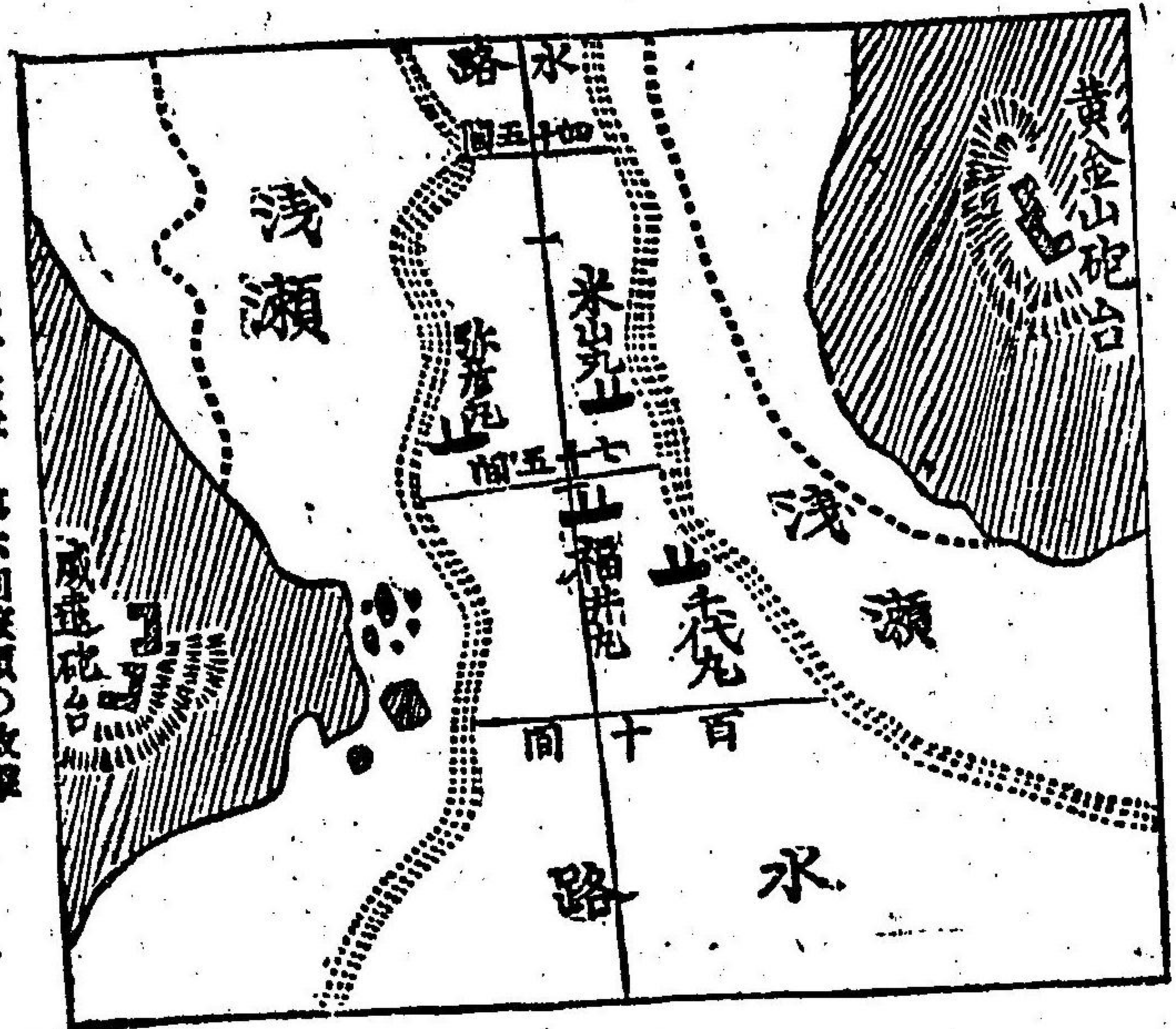


衛して、港口より約一海里に達し、敵の驅逐艦一隻と會戦し、多大の損害を加へ、敵は汽鐘を破裂されたる者の如く、盛に蒸氣を吹かしつゝ、退却せり、閉塞隊の端舟を港外に退却する時目撃する所によれば、敵艦と認むべきもの黄金山下に於て、全く進退自由を失ひたるもの、如くなりしと云ふ。

我水雷艇隊驅逐隊は天明過ぐる迄熾なる敵の砲火を蒙りしに拘らず、寸毫も損傷なし、閉塞隊員の收容は、千代丸及彌彦丸の乗員は燕に、米山丸乗員は端舟三隻に分乗して、雁に收容され、福井丸の乗員は霞に收容されたり。

閉塞隊を掩護したる驅逐隊及水雷艇隊は左の如し。

- 驅逐隊
- 白雲、霞、朝夕、曉、雷、曙、麗、電、薄雲、連、東雲、
- 水雷艇隊
- 雁、蒼鷹、鶴、燕、鷗、真鶴、



第十六章 第六回敵順の攻撃

吁、此報告書を読みたるもの、誰れか血湧き肉躍らざるものあらん、唯米山丸と彌彦丸との間に少許の空隙を存し、完全に港口を封鎖することを得ざりしは遺憾なり

と雖も、若し上圖に依り、我が沈没船の位置を見るものは、善くも我が勇士が此の位置にまで突進し、其目的を達したるかを驚かざるものあらん、而して此行に於て我が廣瀬中佐が杉野兵曹長を尋ねんとして、三度本艦に立歸へり、遂に其尋ねべからざるを知り、怨を吞んで救助船に遷らんとする際、端なく飛來する巨弾に觸れ、勇ましさ戰死を遂けたる一條に



至つては誰か其勇壯狂舉を稱し、感極つて泣かざるものあらん、而して報告に「中佐は平時に於ても常に軍人の艦艦たるのみならず、其最後に於ても萬世不滅の好鑑を遺せしものと謂ふべし」とあるは、灼として日月を照らすものなり。

此海戦に付ては我輩は最早多くを語らざるべし、唯左の談片を集めて須らく本章の終結となすべし。

▲閉塞用汽船 米山丸は總噸數二千六百九十三、登簿噸數千九百五十九、馬力二百十七を有する鐵製汽船にして原名をアコマツクと稱し浦賀板谷合名會社の所有に係る、千代丸は總噸數千七百四十六、登簿噸數千八十二、馬力百五十五を有する鐵製汽船にして原名をエンクトラと稱し千八百七十九年英國グラスゴー府の製造に係り今廣海仁三郎氏の所有たり、福井丸は總噸數二千九百四十三、登簿噸數千八百二十五、馬力二百四十三を有する鐵製汽船にして原名をアパーゲルデイートと稱し、千八百八十二年英國サンダーランドに於て製造せられ目下右近權右衛門氏の所有に屬す、彌彦丸は緒

明菊三郎氏の所有船なり。

▲第二回閉塞隊乗組員 第二回閉塞隊は左の人員を以て編成せられたるものなり

- |     |        |       |
|-----|--------|-------|
| 指揮官 | 海軍中佐   | 有馬良橘  |
| 機關長 | 大機關士   | 山賀代三  |
| 三 笠 | 二等兵曹   | 林 紋平  |
| 藝 手 | 一等兵曹   | 下田與之助 |
| 淺 間 | 一等兵曹   | 三上官次郎 |
| 三 笠 | 一等機關兵曹 | 佐藤末吉  |
| 初 瀬 | 一等機關兵  | 藤山信吾  |
| 初 瀬 | 二等機關兵  | 久永市之助 |
| 三 笠 | 一等機關兵  | 阿部愷治  |



至つては誰か其勇壯猛舉を稱し、感極つて泣かざるものあらん、而して報告に「中佐は平時に於ても常に軍人の艦艦たるのみならず、其最後に於ても萬世不滅の好艦を遺せしものと謂つへし」とあるは、灼として日月を照らすものあり。

此海戦に付ては我輩は最早多くを語りざるべし、唯左の談片を集めて須らく本章の終結となすべし。

▲閉塞用汽船 米山丸は總噸數二千六百九十三、登海噸數千九百五十九、馬力二百十七を有する鐵製汽船にして原名をアコマツクと稱し浦賀板谷合名會社の所有に係る、千代丸は總噸數千七百四十六、登海噸數千八十二、馬力百五十五を有する鐵製汽船にして原名をエレクトラと稱し千八百七十九年英國グラスゴー府の製造に係り今廣海仁三郎氏の所有たり、福井丸は總噸數二千九百四十三、登海噸數千八百二十五、馬力二百四十三を有する鐵製汽船にして原名をアバーゲルデイイトと稱し、千八百八十二年英國サンダーランドに於て製造せられ目下右近權右衛門氏の所有に屬す、彌彦丸は緒

明菊三郎氏の所有船なり。

▲第二回閉塞隊乗組員 第二回閉塞隊は左の人員を以て編成せられたるものなり

第一閉塞隊(千代丸)

指揮官	海軍中佐	有馬良橘
機關長	大機關士	山賀代三
三笠	二等兵曹	林 紋平
警手	一等兵曹	下田與之助
淺間	一等兵曹	三上官次郎
三笠	一等機關兵曹	佐藤末吉
初瀬	一等機關兵	藤山信吾
初瀬	二等機關兵	久永市之助
三笠	一等機關兵	阿部惣治



指揮官附  
 機關長  
 指揮官  
 千歲  
 對馬  
 新高  
 三笠  
 千歲  
 艦手  
 千歲  
 艦手

第二閉塞隊(福井丸)

一等機關兵	奧村又次郎
一等機關兵	河瀬新三郎
一等機關兵	有馬專一
二等機關兵	織戸直次郎
二等機關兵	山岡宗一郎
二等機關兵	白井與作
二等機關兵	上谷榮次郎
二等機關兵	石井銀藏
海軍中佐	廣瀬武夫
大機關士	栗田富太郎
兵曹長	杉野孫七

數島  
 朝日  
 吾妻  
 敷島  
 朝日  
 朝日  
 敷島  
 吾妻  
 八雲  
 八雲  
 吾妻  
 吾妻  
 高千穂

一等兵曹	井牟禮 忠之進
一等信號兵曹	菅波政次
一等水兵	平野市郎
一等兵曹	松下軍吉
三等機關兵曹	平野松三郎
一等機關兵	酒井主計
一等機關兵	中城正雄
一等機關兵	石井友吉
一等機關兵	小林吉太郎
二等機關兵	塚本辰郎
二等機關兵	沓澤宮藏
二等機關兵	小池宇三郎



朝日  
敷島  
龍田

二等機関兵 山本繁治  
二等機関兵 楠本鐵藏  
二等機関兵 岸田小次郎

第三閉塞隊(彌彦丸)

指揮官  
指揮官附  
機關長  
八島  
初瀬  
出雲  
初瀬  
八島

海軍大尉 富藤七五郎  
海軍中尉 森 初次  
海軍中機關士 大石親徳  
一等機関兵曹 村上字吉  
一等水兵 徳田宗一郎  
二等水兵 杉本三蔵  
二等機関兵曹 國神熊太郎  
二等機関兵曹 伊藤三次

初瀬  
出雲  
淺間  
八島  
八島  
出雲  
淺間  
吉野

第四閉塞隊(米山丸)

指揮官  
指揮官附  
機關長

一等機関兵曹 小出由太郎  
一等機関兵 岸田初藏  
一等機関兵 小西萬吉  
一等機関兵 瀬崎茂藏  
二等機関兵 富田六次郎  
二等機関兵 古賀茂雄  
二等機関兵 平松與太郎  
二等機関兵 近元多吉  
海軍大尉 正木義太  
海軍少尉 島田初藏  
海軍少機關士 杉 正人



高砂	二等兵曹	鹽谷巳之助
常磐	二等信號兵曹	二名 恭一
富士	二等兵曹	赤杉虎太郎
富士	二等兵曹	鈴川太郎右衛門
富士	二等機關兵曹	土屋五郎吉
常磐	一等機關兵	河野幸次郎
常磐	一等機關兵	溝口平太郎
笠置	一等機關兵	音品逸藏
高砂	一等機關兵	後藤茂美
富士	二等機關兵	福島熊喜
笠置	二等機關兵	中村義次郎
	二等機關兵	林 豊一

浪速

▲第二回閉塞隊死傷者

前掲公報所掲以外の死傷者は左の如し。

二等機關兵

芳賀力藏

戦死者

一等信號兵曹

菅波政次

同

一等機關兵

小池幸次郎

輕傷者

一等機關兵

中條正雄

同

一等機關兵

小林吉七郎

同

三等兵曹

鹽谷巳之助

同

二等信號兵曹

二名 恭一

同

一等機關兵

河野幸次郎

同

二等機關兵

芳賀力藏

●閉塞隊の戦狀  
●閉塞隊の戦狀

前上負傷者を収容して還れる病院船乗組員が、當時閉塞隊の奮闘せる状況を説くこと左の如し。



之より先廿四日聯合艦隊は旅順に接近して間接射撃を行ひしも敵艦更に出で来らざりし爲め退却したる由なるが兎に角敵は万一を慮り港口の兩岸に數隻の哨艇を配置し防備を嚴にし居たることゝて去廿五日午前三時より開始したる第二回閉塞活動の際千代丸は先頭に立ちて猛進したるが忽ち敵の哨艇の爲に發見せられ直に猛烈なる砲撃を受けたり然るに敵の驅逐艦は千代丸を中間に挟みて双方より亂射撃を爲せしこととて、自然同士打を爲したるものゝ如く暫くありて砲臺より盛に照せる探海燈は二三回上下され同時に哨艇の射撃は忽ち中止したるを以て之れ必らず何等かの信號なるべしとて千代丸は更らに猛進を試み美事に目的地點に達して爆發沈没したり而して各閉塞船は其目的を達して閉塞隊員は各自ボートに乘移り收容水雷艇に向つて漕付くる時最初は元氣盛なりしも數里を漕行く中には漸次疲勞せしを以て一同高聲に軍歌を歌ひ且海軍万歳を叫びつゝ退却せるを以て敵は其聲を的に急射撃を爲し危険極りなかりき。殊に〇〇隊の指揮せる米山丸の端艇の如き港外に逸逃する際其進路に當り敵の一驅逐

艦を認めしを以て艇員一時躊躇せしも敵の探海燈によりて該艦の自由を失へるを認め得たるに依り直ちに猛進して敵艦の傍を通過して歸來したる由なるが其時艦内寂として人なきものゝ如かりき、之れぞ收容水雷艇者鷹燕の一隊が敵の驅逐艦隊と激闘を試みし時蒼鷹の爲めに擊破され戦闘力を失ひしものならんか因に四隻の閉塞船には各船一門づゝの機關砲を据ゑ付けありしを以て今回突撃の際の如き各船の機關兵其の砲に就て戦員となり頗る劇闘を爲せり、又マカロン提督の來着後は敵艦隊の行動確かに一變せるが如く時々港外に出で遊弋しつゝある事は事實なるが如しと云ふ。

●廣瀬中佐の最後 閉塞活動の當時福井丸に在りて最も壯烈なる戦死を遂し廣瀬中佐の遺骸は海底に沈失し僅に二錢銅貨大の肉片を残せるのみ之をアルコール漬にし實兄廣瀬大島艦長に引渡せり蓋し敵の一巨弾ヒューと空を掠りて中佐の頭部を打ち中佐の頭腦は微塵に破壊され其腦味噌飛沫の如く四邊に飛散し端艇に同乗せる隊員一同の被服に浸せり是れ實に忠勇義烈の譽として永く家に傳ふべき紀念にせん爲め實兄之を乞



ひ受くるととなれり而して中佐の遺物は〇〇〇〇之を携帶し、砲車に載て佐世保停車場に送り夫より東京に輸送し四月十三日海軍公葬となし青山墓に於て盛なる葬儀を営みたり、因に杉野兵曹長の遺髪は閉塞隊員に選抜されし際斬殘し朝日艦に保存しありしものにして彼が當初より戦死を期し居りしを見るべく此遺髪及び菅波、小池兩名の遺骸は砲車にて例の如く海軍團に收容されたり。

廣瀬中佐は敵彈命中し僅かに一片の肉を殘して壯烈なる名譽の戦死を遂げたるにも拘はらず同一の端艇内に在る他の船員に些少の負傷だも無りしは奇異の感起すものあらんも察するに同中佐は閉塞の任務を終りて端艇に移乗し總員を指揮し沖合の收容水雷艇に向て潛ぎ歸りのありし際敵の哨艇より發射したる速射砲の彈丸後頭部に命中したるものにて元來小速射砲彈には爆裂藥を裝填しあらざるものなれば他の乗組員に損傷を及さざりしものなりと某將校は語れり。

▲廣瀬中佐の決心と徳望 第二回閉塞船福井丸船長伊藤氏は前後六年間該船に乗組居

たるが今回の壯舉に就ては自分は此船の操縦には儘に他人以上の技能を有するを信じ老後の思出に是非決死隊中に加はりて船と共に斃れん事を願出たるも遂に許されざりし旨語れり、氏は尙廣瀬中佐の平生に付左の如く云へり。

戦死の前一日廣瀬氏は余に向つて曰く前日も十分燈臺下まで往きて曾て我學びし露語を陸地のロスキーと交換せんと期したるに探海燈を浴せ掛られ之を果さざりしは甚だ遺憾なれば今日は是非陸上のロスキーと語を交ゆるまでに成効せんことを期す敵彈を恐るゝやうでは戦争の出来る者ではない神州男子には敵の彈は中らぬとの覺悟なくしてはならぬ云々、又或日某水兵中佐の乗居れる福井丸にボートをこぎ寄せ中佐と死を共にせんことを願出たるに中佐は順番もあり組織上の都合もあり今となりては如何ともする能はず是非に今回は思ひ止まれと諭したるに水兵は本船を辭し去らず竊に隠れて船内に在りしを出發の當日更に此水兵を近く招きて醇々説き聞かしたれば水兵は泣々船を辭せり又彼の杉野兵曹長は威海衛の材防を水雷にて切りに往きし人にて中佐の信



任を得居たり杉野氏も亦中佐を慕ひたれば副官には將校を用ふべきを中佐は特に杉野氏を擧げたるなり杉野氏常に廣瀬氏の下なら敢て死を惜しまじと語り居たりと、

▲廣瀬中佐の書翰

戦地よりの通信は寧ろ新聞紙上に譲ること可然と被存候(中略)況んや身は親しく艦務に服し當直なり哨兵配置なり又自己主管の事務なり日課なりを執務し監督し居る身にて緩々筆硯と親しまんなどは到底出来得可からざることに御坐候、然れども自己の經來りし事などは些事にては親しき問柄にては尤も興味を覺ゆるのみならず、たとひ已に新聞に現はれし事も戦地より直に受取りたる事實は層一層の面白味を感ずること、信じ申候間爾後艦務に差支なき限りはつまらなき事でも御通信申上ぐべきかと存じ候、

斯く冗漫に述べ來りたる序言に對して云はんと欲する所を問へば實は何より述べて宜しきか殆んど當惑仕候次第に有之候、

身は軍艦に在り平素の心掛としては何時事起り身死するも餘累を人に殘すまじと深く覺悟仕候事にしあり、況んや天下の形勢は漸く逼り來りたることなれば萬事公私上の整理も昨年来片附け置き候、且私家上の事など武夫はたとひ何事も申置かざるも皆々様の宜しきやうに御取計ひ被下事と確信罷存候ものなれば、唯武夫が私交上に於る然諾を果さるやを考へ廻らし候も別段にこれと申す程の事も無之、例ひ萬一の事有之候ても天に愧ぢず地に愧ぢず人に後指をさるゝ等のなきこと、存候、更に思ひ殘す事無之寧ろ時局の遷延に例の疝癢を起し居りし次第に有之候ひき、少壯海軍に入り特に露語を學び研鑽茲に年あるも一に彼の露に甘心せんとするものに有之候へば其然ゆるが如き性情に於て今回の戦を冀望致し居候は誰れにも劣るまじくと存じ居候、愈出征と定まり候時の愉快さは眞に是れ踴躍三百、今迄の待遠しきは云はずもがな、二月六日正午吾艦隊風擁して佐世保を出づ、意、露の東洋艦隊を殄滅するに在り、士氣天に沖り眼中又彼れなし、右より左より吾行を送るもの我も



亦之を右に左に酬いて擧ぐる萬歳の聲も勇まし、

勇ましさを何に譬へん海の上に

首途を送る萬歳の聲

日清の役吾艦隊佐世保を發するや意氣彼を壓するあるも、なほ多少彼我艦隊の勢力を比較して心中稍安んせざるものありしを覺ゆ、今や全く然らず我海軍の健兒誰として一人の必勝を期せざる者なく顔色怡々として恰も遊樂に赴かんとするものに似たり、快なる哉快なる哉、

朝日の士官室、壁間に景文筆鷲の刷物あり、鷲は是れ露國の徽章とす、掲ぐる者は吾等の之を破つて快心せんと欲するものか、七日夕、室にゐる者數輩議決し、別府大尉先づ箭二本を取り日本渠が眼を抉らんと其眼を抉る、武夫叫んで曰く露の海軍を破ること斯の如くなさんと其畫を取りて之を寸裂す、座に在る者皆拍手喝采室を動かせり、

八日午後五時半吾艦隊、今夜旅順大連に敵艦轟沈に赴くの驅逐艦隊を送り其行を壯にす、頗る壯快を極む、一人あり叫んで曰く「ヨイ處は殘して置け」と余等戦隊にゐる者の胸中を言ひ現はして尤も妙なるもの、戦ひに先たつ一日、武夫は總員を集めて左の講話をなせり、

上下三千年、第一の英天子明治天皇陛下の治下にあり世界第一の海戦に働くことを得る武運と而も艦は日本一の朝日艦なり、其艦質に於ても其乗員に於ても吾海軍の精華にして而も最近の武運は内膳砲に優勝旗を得、其後の艦砲射撃には常に他に擡んで吾海軍軍人の最大記念日たる黄海戦捷の當日端艇優勝旗を得、聖明なる陛下の天長節に再び之を重ね昨今は海軍大運動會に吾選手は驅歩に於て先登第一の優勝旗を得たり、斯る武運目出度艦が明朝に於る武運も亦知る可く吾平生訓練の實を示すや疑なし、況んや昨日の首途第一に吾艦隊にて捕獲せしは露西亞と稱する商船たり、吾海軍の前途は實に多望なりと云ひつべし、斯る英主の



下、名譽ある海軍軍人となり世界海戦史に名を残すにしかも如斯名譽ありて斯如  
武運芽出度艦に乘組むの吾吾は豈に奮勵せずして可ならんや、明日ころ平素の蘊  
蓄を發揚し沈靜其職を盡し熱心吾武威を揚けんことを期せよ、

平素嚴肅なる紀律の下にありて將校の講演などには痛く感動するるときあるも漫りに  
拍手喝采せざる海軍軍人も露西亞と戦ふに露西亞を獲たりと云ひ及ぼしたる時と講  
演の終に於て「大に遣るべし」と叫んだる時には覺えず喝采せり、

此處まで書き候も當直なり、郵便船の期も通り候事故擱筆仕候再拜、

二月十三日午後一時

武 夫

母 上 様

叔 父 上 様

姉 上 様

御 許 へ

▲七星皇を護らん(廣瀬中佐の平生) 廣瀬中佐の令兄たる海軍中佐勝比古氏の夫人春

江子が廣瀬中佐の平生に就て語る所左の如し

武夫の身の上に就てはお話致したい事も澤山あります但本人は更に名聞を好まず自  
分の名が新聞に出るのでも厭ふ方ですから妾がお話いたすも其心でありません  
只差支のない限りをお話いたしませう夫の兄弟は肥後の舊竹田藩で養父は維新の  
際大層勤王の志篤く國事に奔走した方ですから二人も其感化を受けまして軍籍に  
身を置く事になつたのでござります武夫は平常酒も煙草も嗜まず、殊に婦人は蛇蝎  
視し生涯獨身で暮すといふ持論でうれと申すは軍人に妻があつては戦場で思ひ切つ  
た働きが出来ぬといふ一見識備へて居たのです性質は元來大膽で快活な方でした  
が事に當ると周密で細心な所がありました兄とは至つて陸まじく武夫が偶上陸し  
て宅へ歸りますと夜の二時頃迄愉快さうに談話するが例でござりました平常職務に  
熱心で朝は中々早起をせした柔術は嘉納先生の高弟で小供の時から稽古して居りま



した學藝は漢學に長じ文章も達者で至つて筆まめでした義弟がこれまで經歷して來た冒險談でも申すべきは先年横須賀邊で火事の起つた時武夫は直に水兵を連れて消防夫よりも最先に働き随分手柄をしたさうです殊に朝日艦の乗組員が度々艦砲射撃や其他の競争に多くの優勝者を出したのは武夫杯の指揮が宜かつたからだと聞いて居りました露西亞語は數年同國に居りましたから中々巧みで其國情にも精通して居ました英語佛語も充分話せます旅順海戦のあつた後丁度紀元節の日に嵐山の描である繪端書に妾と小供に宛て、來た書面があります其の文言は「戦へり、勝てり健在なり」の三句十字だけです意外の意氣はこれでわかります日清戦争の頃には扶桑艦に乗組んで居りましたが出發する時から「生扶桑死扶桑、一死報國、七星護皇」といふ辭世を書いて死ぬる覺悟をして居ました、今度もチャンと辭世を書いてまゐりました、今度の戦争に就き兵士に驅はせるため自分が作つた軍歌がござります、それをお目にかけてやう、

るも吾々の乗組る。  
 苗さすてふ朝日艦。  
 八紘照らす大御稜威。  
 見よや勇々敷其姿。  
 誰とて勇氣を競ふべき。  
 皇に盟へる節操は。  
 幾はも透す眞心は。  
 などか劣のあるべきぞ。  
 國に因める朝日艦。  
 艦は名に負ふ苗さす。  
 世界一なる朝日艦。

るの軍艦の名を問へば。  
 駭々昇る國運と。  
 現はし出すも心地よし。  
 衆然四海に雄視して。  
 健兒八百有餘人。  
 其甲鐵に較ぶべし。  
 十二尹の彈丸に比し。  
 常に仰ぐ軍艦旗。  
 護る吾々護らるゝ。  
 日本一なる朝日艦。

▲杉野兵曹の書翰(一寸した仕事)

杉野兵曹名を孫七と云ふ、三重縣の人、閉塞船出



立の際未亡人に興へたる書あり、

(前略)子供を學校に遣つて呉れ、子供の善くなるも悪くなるもお前の責任ですよ、更  
ためて云ふには及ばねども、若しも私が死骸で歸つたら國許へ葬つて呉れ、又亡き跡  
は東京の父上に相談して國許に引込め、子供を世に出すまで田舎で教育せよ、其一人  
は廣瀬少佐に高等小學卒業後預けて海軍軍人に仕立て、貰ふのだよ、亡き跡は海軍  
職員録を見れば彼の人(廣瀬氏を指す)の勤めの先が知れる、此度はヒヨットしたら  
危い仕事をするから一寸申し遣し置くよ、決して心配するには及ばぬ何事も運だ：  
△死なば今、杉野兵曹は豪膽にして常に廣瀬中佐の愛顧を受け、頗る其人物に私淑す  
る所あり、寫真一枚撮らばこゝろ、男兒か戰場で死するは當然のみ、未練らしく死後に  
影像など残さすへさごとかとはとて今回戦死に就ても其悌を留むるに由なしと、出立  
に臨み福井丸乗組元船長が杉野氏に遺墨を求めければ、曹長は筆を執つて  
死なば今、地獄の門の出来ぬ間に

と、此句今や世上に喧傳せり。

吊廣瀬中佐

學海 依田百川

電燈如晝照海水。  
健兒勇決不畏死。  
以身蔽士不愛生。  
從軍是日奮厥武。

砲聲轟破震天地。  
誰當其任廣將軍。  
巨彈一擊血肉粉。  
怒髮倒豎鬚髯張。

欲沈廢船塞港口。  
鐵臂銅額氣凌雲。  
萬里山河嘗艱苦。  
魂魄不滅神萬古。

戦へり勝てりと云ひし言の葉は

つるぎの刃よりするとかりけり。

失名氏

失名氏

沈み行く舟にかへりて友を呼ぶ  
聲をのこして身は碎けしむ。



第十七章 第七第八回旅順の攻撃

(敵の旗艦の沈没、マカロフ將軍の戦死)

(一) 大捷利!! 大捷利!!

廣瀨中佐の戦没後、都下の新聞紙は故中佐の逸事逸聞を以て全紙を埋め、其名聲は遠近に喧傳せられて維れ日も足らざるが如く四月十三日は僅に残りたる故中佐の肉片を以て嚴肅なる葬儀を營み、青山の原頭落花繽紛たる所、三發の銃聲と共に長へに其英魂は眠りたるが、其日の夕刻より都下に流説あり、『我海軍は第七回旅順の攻撃を行ひ此海戦に於て敵の旗艦ベトロポウロスク(一萬九百六十噸)は撃沈せられ、敵の司令長官マカロフは戦死せり』と、而して此攻撃は十三日の午前なりしと云ふや、誰れ謂ふとなく之れ故廣瀨中佐の弔ひ合戦なり、死せる中佐生けるマカロフを殺せりと稱するに至りたるが、餘りに我か海軍の功名赫赫たるに何人も半信半疑の裡に一日を送り

たるが、翌十四日に至りて倫敦、紐育、聖彼得堡の電報は恰も櫛の齒を挽くが如く

我か外務省に到達せり。

最初にマカロフ戦死の報を傳へたるものは倫敦電報なり、曰く

水師提督マカロフは軍艦ベトロポウロスク號の沈没に際し、其隨屬せる總へての參謀官と共に溺死を遂けたり。

次に達したるは露國半官報に記載したる電報の轉送なり。

露國戰艦ベトロポウロスクは旅順沖に於て沈没せり、同艦乗組員中生存者は僅に

士官四名のみ、キリル太公も右生存者の一人にして太公は負傷せり。

此二個の電報は共にベトロポウロスクの沈没を謂ふ、後者は正面よりマカロフの戦死

を謂はざるも、士官四名の生存者を語り、キリル大公の助かりしことを報して一言マ

カロフの事に及ばざるは、之れ確に其死を認定せるものなり、而して二者共未だベト

ロポウロスク沈没の原因を語らず、然るに其次に外務省に達したる電報は曰く、



露京發にて昨十三日歐州の或る筋に達したる電信に曰く、露艦ペトロボウロスク號は旅順沖にて沈設水雷の爲めに沈没せり、負傷せしはキリル大公其他三名を除き悉く死せり、カマロフ提督も亦死せり。

之に依りてペトロボウロスクの沈没は全く沈設水雷に罹りしことを知れり、更に倫敦電報は曰く、

露國一等戰艦ペトロバウロスク號は、旅順港外より港内に歸らんとする時、沈設保式水雷の爲に顛覆し、艦長及び五人の士官と、負傷せる三十二人の水兵の外は、提督マカロフを初めとして全員悉く溺死を遂げたり。

此電報に依れば、溺死を免れたるものは、五名の士官の外、三十二名の水兵あり、此事實は旅順の司令官アドミラル、グレゴリエウキツチより露國皇帝に宛て奏したる公電に依りて確むることを得べし。

戰艦ペトロボウロスクは沈設水雷に觸れて沈没せり、マカロフ提督は戦歿し、キ

リル大公は救助せられたるも負傷し居れり、今日迄の所救命せられたるは士官六名水兵三十二人なり。

其他巴理發、米國發の電報は等しくマカロフの戦歿を報道し來り、我が國民は双手を舉げて此大勝利を祝したるが、去にても艦艦ペトロボウロスクの沈設水雷に罹りたりと云ふは、味方の水雷に觸れしか、或は敵自身が敷設したる水雷に觸れしかは尙問題として残りしが、瓜生司令官發にて海軍省に到達したる電報は、善く這間の消息を明にしたり。

只今歸着したる第三驅逐隊の報告に依れば、昨十三日我艦隊は旅順口に迫り、敵の戰艦一隻(ペトロボウロスク型)を沈め、驅逐艇一隻を撃沈したり、我艦隊無事なり即ちペトロボウロスクの沈没は自己の水雷にあらず、全く我艦隊攻撃の結果にして、其沈設水雷は我軍の豫て敷設せしものなることを暗々裡に認むることを得べし、而して戦艦は單に敵の戰艦を沈めたるに止まらず、尙ほ他に一隻の驅逐艇を撃沈した











めたり、殊に之迄極めて冷静の態度を粧ひたる伯林の海軍士官さへ、最早や冷眼看過すること能はず、口を極めて日本海軍の軍略作戦の方法を稱賛し、其議論を新聞紙に寄送して批評を試みるに至りたりと云ふ、況んや英國米國の海軍將校に於てをや、今我輩は僅に世に發表し得る程度に随つて、我が作戦準備より記載すべし。

▲特別任務 我が艦隊の行動を初めたるは十一日よりにして、十二日夜半、豫て此目的の爲めに準備せられたる蛟龍丸は第四驅逐隊、第五驅逐隊、第十四水雷艇隊に護衛せられて旅順港口に達し、所定の特別任務に着手せんとする時、敵の探海燈は例に依りて輝き始めたり、此日は前日より春雨濛々として降り、風さへ加はりて特別任務を施行するには極めて好機會なりしが、敵は我が軍に深き目的あり、彼の運命を定むる一種の戦路が茲に施されつゝあることを知らざるもの、如く、唯平生の偵察ならんと信じ、探海燈を以て照破したるが、閃光は海霧の爲めに遮られて青光一入物凄く、殊に此夜は平日四燈の外に更に二燈を増し、都合六個の探海燈を以て我を照破し、

大砲を以て我を撃退せんと圖りたるも、之しきの事に避易すべき、我が軍の一艇は「惡き敵の舉動かな、イデ彼の眼玉を潰して呉れん」と、暫く敵の探海燈を見て在りしが、敵は砲撃の効果なきに力抜けやしけん、探海燈は暫く静止したるが、之を見たる一艇は直に西口に當りて距離の最も近き電燈に向つて數回射撃を試みるや、其照尺は非常に精巧なりしものにて敵の一眼は確に暗黒となれり。

斯る間に蛟龍丸の計畫せられたる特別任務は最も短き時間の中に、最も機敏に最も迅速に遂行し了り、敵の砲臺に向てオサラバの一齊砲彈を見舞つて春雨濛々の中に隠れたるが、呼、此瞬間の行動こそ敵の提督マカロフ及び彼の主腦と持みたる參謀將校以下の死命を制する小田式機械水雷の沈設なりしことは後に知られたり。

▲驅逐艇の沈没 明くれば四月十三日、夜來の春雨猶歇まず、旅順の海は一面海霧を以て閉され、連日の取戦に敵の胸中は、海上の濃霧よりも尙ほ深き雲に包まれつゝ、黎明の光りを頼りに鮮生角の東方より港口に向て駛走する四本煙突の一艦あり、之れ



昨夜より海上に在りて哨艇の任務を帯ひたる敵の驅逐艇なり、此時更に別の任務を帯ひて鮮生角の南東を遊弋し居たる我が第二驅逐艦は、之れを見るより半ば迂回し、敵の前路に出て砲口を揃へて之に向へば、敵は死力を盡して發砲す、我が軍之に應じて攻撃し、此に數回の砲弾は交換されたるが、其間僅に十分間、我が弾は一々命中、殊に最後の一弾は敵の機関部とボイラーの間に美命中し、恐るべき鳴動を爲しなから瞬く隙に、敵の驅逐艇は沈没したるが、少時は白煙濛々として天に沖し、海面には恐ろしき渦旋湧きかへりぬ。

此時我が軍の後方を顧れば、西方老鐵山の方に當りて敵の驅逐艦一隻港口を指して急駛するを見る、第二驅逐隊は又もや善き獲物御坐んなれ、之れも併せて今日の戦の門出にせんと艦首を廻らして之に向へば、敵は全速力を以て逸走し、其距離は遠し、砲弾は達せず、惜ひべし敵艦は港口深く遁匿せり。

此戦ひ第二驅逐隊の損傷は極めて輕微にして、唯電の卒二兵輕傷せるのみ、擊沈せられたる敵の驅逐艇の溺死者は、之を救助せんとしたるに、偶敵艦バーヤン（巡七千七百二十四噸）我を望んで突進し來りければ、我は遺憾ながら敵兵の波に撲らばるゝに任したり、于時午前九時。

▲本隊の大激戦 此時我が第三戰隊は遙に我が第二驅逐隊を掩護しつつ、旅順港口を偵察しつつありしが、敵艦バーヤン我に向て突進し來り、遠距離より砲撃を開始したり、日頃は我が艦影を見るや否、直に艦首を廻らして逃走せし敵艦、今は我が第三戰隊を望んで突進し來る、縦令遠距離なりと雖も一艦を以て我の數隻に當る、之れ既に作戦上の許す所にあらず、而も敵艦は敢へて突進し來る、之れ彼に深き意味の存在する所にして、之を知りたる第三戰隊は、態ど進むか如く進まざるが如く徐々と之に應戦すれば、敵は果して港内に背進したり。

バーヤンの背進するや、幾もなく敵は艦隊の總てを舉げて突進し來れり、最先に進むものはノーウキツク（巡三千〇八十噸）なり、續きてアスコルド（巡五千九百〇五



噸)、デイアナ(巡六千七百三十一噸)、ペトロホウロスク(戦一萬九百六十噸)、ボヘーダ(戦一萬二千六百七十四噸)、ホルターフ(戦一萬九百六十噸)等バーヤンを合せて攻勢を取り反撃し來りたるにぞ、我が第三戦隊は且つ駛り、且つ應戦し、敵を南東方向約十五海里の沖に誘致せり。

蓋し敵は、第三戦隊の勢力比較的弱少なるを見て取り、先づバーヤンの一隻を以て犠牲に供し、一を四若くは五に對する勢力を以て我のバーヤンを追撃するを待ち、之を港口の十字火に導くか、然らざれば港内全艦隊の勢力を擧げて第三戦隊を包撃し、一擧に之を撃沈せんとするにあれば、我のバーヤンを逐ふて港口に向て進みたるは我れ正しく敵の計略に乗りたる也、而して全艦隊の我を逐ふて十五海里の沖合に出たるは彼れ又我が計奮に陥りたる也、マカロフ中將の旅順艦隊を指揮することとなりて以來敵は屢港外に出て、示威運動を爲し、動もすれば我に向て攻勢を取るか如く見せ掛るころ、彼の我が術中に陥る所以にして、我は彼の虚勢を利用し、比較的勢力の弱少な

る第三戦隊を示して一度は彼の術中に陥りたるの態度を示し、再びは我れ彼を誘出して十五海里の沖合に出しが、此際の駈引は虚々實々殆ど端倪すへからず、之れぞマカロフの爲めには身の破滅にして、我に於ては赫赫たる功名を収むるの基なりし也。敵艦の沖合に出るや、精銳無比の我が第一戦隊は、旅順の沖三十海里の地點に於て遊弋せり、此時海氣の濛々として海面を掩ひしころ、我が軍の爲めは誠に天幸なりと。敵將は世界に於ても名にし負ふ戦略家なり、苟も半經以内に於て優勢なる我が艦隊の見ゆるや、決して長驅して十五海里の沖合に出るものにあらず、而も我が第一戦隊のことは氣附かず、飽まで第三戦隊の勢力を見送りて沖合に出てしころ、マカロフの運の極にして、此時第三戦隊が無線電信を以て報するや、第一戦隊はスワコン敵は出て來れり、敵は我が計略に乗りたりと、全速力を以て擊迫すれば、敵艦は急に艦首を廻らし、ペトロホウロスクを最先に立て旅順港内を指して急航す、開戦以來敵は常に港口砲臺掩護の下に戦ひ、未だ曾て彼我の艦隊、大洋の上に於て堂々會戦することな



さを遺憾とせる我海軍の將士は、夫れ逃かすな、敵を掩撃せと迫り、港口近く壓迫せるとき、先頭に占位して將官旗を掲けたる一戦闘艦は、港口より南東微東、海岸より約十離（一海里）ルチン岩の附近に於て、轟然一發、天柱挫け地維崩る、計りの鳴動と共に沈没せり、于時午前十時三十二分。

見よ、爆聲の發したる處には、重き白煙濛々として海を掩ひ、長堤の如き大波紋は四周に向て其領域を擴げつゝあり、暫くして濃煙の風に拂はるゝや、艦體は已に海底に没し、僅に橋頭の水面に現はるゝを見るのみ、之ぞ敵艦ペトロボウロスクの最後にして、此時敵の戰歿せるもの、

司令長官マカロフ中將、  
 參謀長以下上長官三人、陸軍參謀大佐一人、尉官六人、尉官相當官四人、  
 乗組員に於て副長一人、尉官七人、尉官相當官三人、厨一人、下士以下五百九十六人、

計七百二十三人なり也。

此水雷ころ、昨夜我が蛟龍丸が特別任務を受けて、數隻の驅逐艇と水雷艇と共に、小田式機械水雷を沈設せしにて、敵は美事我が術中に陥り、我が第一戦隊の追撃を受け此處にて我が水雷に罹り、而して在るべきことか、在るべからざることか、敵の旗艦マカロフ中將の坐乗艦が、之に觸れて粉碎せられたりとは、單に天佑と云ふの外、我輩は其言を知らざる也。

▲敵艦の狼狽 此慘憺たる光景を看るや、敵の艦隊は俄に狼狽し、艦列は崩れ、右往左往に大混亂を始めたるが、中に一艦、人ならば腰の抜けたるならんと思はるが、進退の自由を失ひ、周章狼狽を極めたるが、敵艦混雜の爲め其艦型を識別すること能はざりしは遺憾なるが、其後の情報に依れば、此艦がホーダなりしことは諸報の一致する所なりし、我軍は遙に之を眺めて萬歳を唱へたるが、敵の戦艦は約一時間、暗打ちに艦側附近の水面を砲撃しつゝ、漸次港内に入り、正午過ぐる頃に至り初めて港外敵



艦を認めざるに至れり。

此戦ひ第三戦隊は初期の砲戦より一の損傷なく、第一戦隊は遂に敵の砲弾距離に接近せざりし爲め、勿論一點の損傷あるべき理なく、而して敵は多大の損傷を受けて退却したり。

(四) 十四日十五日の攻撃(日進春日の初陣)

斯くて我か艦隊は、同日午後一時旅順港外を去り、豫定地點に集合して洋中に假泊し更に準備を整へて十四日午後四時より再び旅順口に向ひて發動せり。第二驅逐隊、第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九水雷艇隊は、翌十五日午前三時前後相次て旅順港外に達し、又もや豫定計畫の如く再び其任務を遂行したり。

▲浮流水雷の砲撃 十五日午前七時に至り、第三戦隊は改めて旅順港外に現はれ、敵情を偵察したるも、敵は前日の敗戦に最早戦はん勇氣もなく、港外には敵の艦影を認めず、港内寂然として一物をも聞かず、續きて第三戦隊は午前九時旅順沖に現はれ

遊弋の際、端なく三個の機械水雷の浮流せるを見る、想ふに敵が大連灣方面に沈設したる水雷の、前日來の大風波に依り漂流し來りたるものにして、我が軍の之を發見したるは天幸なり、八島艦は最先にありて一々之を砲撃したるに、三個共悉く爆發し、茲にも時ならぬ雪花の騰上するを見たり。

▲第八回攻撃 敵は既に潜伏せり、最早や港外に出で來らざるなり、此に於てか我軍の得意なる間接射撃は開始せられたり、此役を勤むるものは艦に東京市民が幾多の心配と歡呼とを以て迎へたる日進春日の二艦なり、此二艦は此日を以て初めて敵艦に見へ、其恐るべき勢力を有する砲弾は、此日の初陣として敵の頭上に見舞ひたり、遂に英利西海峡に於て露國皇帝が流涎措かざりし二艦は、今や極東に在り其海軍に向つて巨彈を投じつゝあり、之を聞きたる露政府の感果して如何、而して此間接射撃は午前十時より十二時に亘りて二時間繼續せられたり、之れが爲めに近頃我が間接射撃を防禦する爲めに設けられたる老鉄山西の新砲臺は、忽ち沈黙するの已を得ざるに至れり



此二艦の砲撃は、敵の威遠、老虎尾の砲臺にも莫大の損害を與へたるが如く、而して敵の砲臺及び港内の敵艦も屢應砲せしが、地の利已に及ばざるが上に、猛烈なる我が砲撃を受けては如何ともなすこと能はず、唯手を拱して砲彈を受くるのみなりしが我が艦隊の或るものは港外に在りて悠々ろの間接射撃の効果を傍看し、殊に某艦の將校は室内より後甲板に椅子を運び、之に腰打ち掛けつゝ、恰も相撲の見物を爲すか如き有様にて始終見物し、同射撃の彈丸敵の砲臺等に命中するときは、一齊に立上り拍手喝采を爲したりと云ふ。

斯くて我が軍が、攻撃を歇め凱歌を奏して根據地に引上げたるは午後一時三十分なり

▲天祐 此海戦の報告に於て東郷聯合隊長は附言して曰く、

此連続せる作戦に於て、聯合艦隊が一兵をも失はずして多少の戦果を擧げ得たるものは一に大元帥陛下の御威徳に依る者にして、陛下將卒は始終勇往敢爲其の任務を

遂行するに忠實なるも、其奏功戦果に至りては人力の及ばざる所多し、特に多数の艦艇が晝夜を問はず敵の機械水雷の浮流せる洋中を縦横に航行し、然かも今日に至るまで危害を受けたることなきが如きは、唯天佑と確信するの外あらざるなり、

呀、之れ眞に天祐なり、我輩は之を天祐と云ふの外、何等の言を知らざる也。

▲小田式機械水雷 此海戦記を終るに當り、我輩は此に小田式機械水雷のことを説明すべし、蓋し素人は沈設水雷と言へば單に味方が港灣を防禦するときに限り使用し、敵港を攻撃し、彼我の堅艦海上を駛突撃する際に於ては、殆ど其功力なきものと信じ、扱ては敵艦へトロボウロスクを沈没せしめたるに就ても、中には敵が自分の沈設したる水雷に罹りたるが如く思考するものありと雖も、之れ我に小田式水雷なるものあり、斯の如き際にも善く敵艦を轟沈せしむるの計畫あることを知らざるもの、言なり、此水雷は我が海軍中佐小田喜代藏氏が多年辛苦研鑽の上に發明せられたるものにして、今回の奇功は全く小田氏の双肩に係りて名譽を荷ふべしと言ふも過言にあらず



氏は元來沈黙寡言、常に何事をか沈思するもの、如く、人氏に對して何事をか謀ることあるも、氏は然り又は否など答ふる外、又他の言語を發せず、又家にあるときにて一室に閉居し、深き思ひに沈みつゝ、家人に向ても殆ど言葉を換はしたることなしと云ふ、左れば氏の友人等は氏を以て何事も無頓着にして無愛想の人となせり、二十七八年の戦役には氏は水雷艇長として威海衛を攻撃し、敵の來遠を轟沈せしめたるが斯の如き際にも氏の無頓着と無愛想は維持せられ、敵の砲臺より來る彈丸は雨霰の如くなりしも、平素人に無頓着なる氏は敵彈に對しても亦無頓着にして、殆ど敵彈の來ることを知らざるもの、如しと云ふ、左れば水雷攻撃は實に氏の天性にして、氏が新發明の機械水雷は、殆ど氏の生命にして、種子田造兵大監の外海軍少佐武部岸郎上等兵曹福永左太郎諸氏の盡力に依り漸く成效したるが、其構造は固より秘密にして語を得ずと雖も、従來の機械水雷は此を沈設するに非常に手数と時間を要するも、此水雷は如何なる場合に於ても極めて簡短に迅速に沈設することを得、一度海中に投すれば

恐るへき危険物となり、再び手を着くへからざるに至る、且つ従來の水雷は敵艦に對し一時間に約五十噸の海水を侵入せしむる破孔を穿つに過ぎざるも、此水雷は如何なる鋼鐵も、如何なる隔壁をも破りて、敵艦は之に觸るゝや否や直に致命傷を受くものなり、左れば今回旅順口に於て使用することとなり、十二日の夜敵の探海燈と砲火の下を潜りつゝ、極めて少時間の間に、最も機敏に、最も迅速に沈設し了り、十三日の朝天轟然一發堅牢無比の戰艦を只一發の下に撃沈せしめたる爆裂力は、流石のマカロウも夢にも聞知せざりし處のものなるべし。

マカロフ將軍の死を悼みて

大口 綱二

ことならば負けなむまでも一戦

すへかりしをどくやしかりけむ。



虎頭燕頰來登壇。  
回天事業萬牛難。  
成敗由天不由人。  
南風不競勢已非。  
胡笳吹愁聲酸裂。  
千古萬古潮鳴咽。

欲揮隻手障倒瀾。  
可憐敗餘督戎事。  
願將一死答重寄。  
雷霆翻海峩艦碎。  
陰風黑夜篝火滅。

吉田 勿 來  
有何奇策盛聲勢。  
滿腹韬略何處試。  
振作士氣張軍機。  
將星曉落旅順沂。  
海角埋却英雄魂。

坂 正 臣

日本の本の國の御稜威をわたつ海の

底にしるらむ君かあわれを。

第十八章 海戰餘論

第一 敵の殘存艦

▲敵の殘存軍艦 開戰當時に於ける敵の有力艦は、總て十八隻、十六萬六千八十噸より成り、内戰艦七隻、巡洋艦六隻、合計十三隻、十一萬七千四百十五噸は旅順に、巡洋艦一隻、六千五百噸は仁川に、巡洋艦四隻四萬二千六百六十五噸は浦潮に分屯し居たり、今日に至るまでの戰闘は殆ど全く仁川と旅順とに限られ、我は未だ大に威力を浦潮艦隊に加ふるに至らず、其結果として同艦隊は尙獨り開戰當時の勢力を保有するを得れども、旅順仁川兩艦隊の憐れなる態度は既に人の知る所の如し、二月九日仁川の海戰は敵艦ソリヤーノを撃沈し、此地點に於ける敵の勢力は全く滅却せられたり、而して旅順方面に於ても前後八回の作戦事毎に其圖に當り、二月八日に於ける夜の水雷襲撃は、戰艦レトヴィサン、ツエザルウイツナ、巡洋艦バルラダをして全く







○同 ノーヅイク

三、〇八〇 二五 〇一

旅順艦隊合計七隻、五萬八千三十六噸

巡洋艦 ロシヤ

一二、一九五 一九 九六

同 グロモボイ

一二、三五九 二〇 九六

同 リューリック

一〇、九三六 一九 九二

同 ポカチール

六、六七五 二三 〇一

浦鹽艦隊合計四隻、四萬二千六百六十五噸

▲印は衝突破損せるもの ○印は應急修理のもの

此兩艦隊は千哩以上を隔つる兩軍港内は在りて、到底互に相援くるの力あらざるが故に、其總計噸數を見るは殆んど無意味に近しと雖も、試みに之を合算して、東洋海軍に於ける敵の勢力を示せば、即ち戰艦三隻、巡洋艦八隻、合計十一隻十萬二百噸を以て、而して今や敵艦隊は旅順は浦鹽兩隊の者に軒輊なく、寧ろ却つて主力を浦鹽支

隊に歸せざる可からざるに至れり。

▲敵の驅逐艦 露國海軍は、豫て我勇敢なる水雷突撃を虞れしものと見ゆ、此一兩年來頻に驅逐艦の増加に苦心し、或は増派艦隊と共に廻航せしめ、或は材料を旅順に送りて之を組立しむる等、方法のあらん限を盡せり、其結果として開戦當時東洋艦隊に屬する驅逐艦は、實に二十五隻の多さに達し、此點に於ては遠く我海軍を凌ぐに至れり、然れども此有力なる武器も、露人の手に在りては何等の効用をも爲す能はず、彼は自ら進んで我艦隊を襲撃する能はざるのみならず、一戰一艦を失ひ、再戰兩艦を破られ、是まで得られたる多くの公私報を綜合すれば、敗殘の艦數既に十、剩す所十五隻に過ぎざるを見る、今其の日時及び事由を記すれば、其「第一回」は實に二月八日の深夜第一回水雷突撃の際に在り、當時敵は不意を襲はれて同章爲す所を知らず、三隻の驅逐艦同志打して共に沈没したるは、歐洲に於て周ねく傳へられたる所にして、其後各方面の情報に照し其事實なると疑ふべからず、但







鶏群の一鶴たりしなり。

世人或は彼を評して單に一個の理想家なり、議論甚だ巧妙ならんも、實際艦隊を指揮せしむるに於ては果して如何と、左れと彼は決して世の所謂空論家にあらず、今や各國の海軍論家が競ふて大戦國艦若くは大甲裝巡洋艦を製造し、之を以て海軍の主動力たらしめんとなし居る際、彼は之に反對して、小巡洋艦の多數を以て、戦艦若しくは裝甲巡洋艦に當り、最後の必勝を期したれば、彼は好みて奇警の言を弄するものなりとして一部の誹を受けたり、然れども彼は一の確固たる信念と、之れを實行貫徹すべき勇氣とを有せり、彼は確かに學術に秀でたると同時に海軍的技術も亦其長處にして、特に勤勉熱誠の性格に富みたり、彼れはクロンスタッド鎮守府司令長官として在勤中、現に一週間二回づつ少壯士官を會して親しく教鞭を執り、以て戦術戦略を研究せしめたるの一事を見ても、如何に彼が活氣あり、氣力あり、決して單純なる空論家ならざるを證するに足るべし、況んや露土戦争の際の如き、彼は水雷艇隊司令官

として、常に危険中の危険を冒して、屢々奇功を奏したるに徴しても、自己の理想と實行せる眞に敬服すべき名將軍たるを失はず。

▲彼の理想 然るに我帝國との開戦に際し、彼が理想を空ふして敢なき最後を遂ぐるに至りたるは、其胸中果して如何の感かあるべきか、彼は嘗てナポレオン一世を擊破したる古今の名將ゲテラルスワロン將軍を崇拜して、其戦法を會得し、尙現今露國陸軍戦術家の自眉たるドラゴミロン將軍に私淑して、以て自家戦術の基礎となしたり彼の理想とする處は水雷艇襲撃的戦法を艦隊に應用せんとするにあり、即ち多數の小艦を以て大艦に當るにありたり、彼は確乎たる理想家にして、特に非常なる強意思の人たり、自己の議論に對しては同僚上官の差別なく、頗る強硬を持し、嘗て一步も狂げざりき、従て少壯士官等の部下より殆ど神の如くに尊崇されしも、上官等或は同僚よりは恰も反對の意を以て迎へられたり、之れ彼れが常に比較的逆境に沈淪せる一原因なり。



●彼の性格 抑も露國海陸軍々人の通弊たるや、悉く政治的野心を有し、機に應じて之に容隙を試み、以て自家の位置を作るに汲々たるあり、然るにマカロフ將軍は、此際にも毅然として政權爭奪の渦中に投せず、純然明乎たる一個の武人として其職に盡力し、以て軍士の本分を知らしめんと努めたり、是れ彼れが逆境に立ちし二原因なり。

例之、今回戦争の大立物たるアレキシーフ將軍に比し、後進者なるにも拘らず、却て中佐に先任され、以て彼の越卓なるを示したるも、年月を経て中將に昇進せるの時は既にア將軍の大將に在るを見る、而して彼は遂に中將として其身を終りたり、是れ佐官時代の單純なる昇進と、將官となりて愈々政治的野望を逞ふするの弊ある露國の情勢ならずんばならず。

アレキシーフは所謂政權を利用し、政治的才能を發揮して現地位を膺得たるが、實際軍人として尊ぶべきマカロフの政治的野望を有せざるは、彼をして現位に止め以て一般の敬遠する處となりたるなり。

●一代の大演説 『吾に四隻の巡洋艦を與へよ其二隻が撃沈せらるゝ間に吾は他の二隻の巡洋艦を以て世界の最大戦闘艦を建造せしめん』とは彼の終生の理想なり、我が明治廿八年以來、露國は銳意海軍の擴張に熱心し、即ち廿八年に一萬二千六百七十四噸の戦闘艦二隻（ベレスウエット、ラスラビヤ）を造り、翌年一萬二千三百噸の装甲巡洋艦（グロンボイ）及び六千六百噸の巡洋艦三隻を製造し、卅一年には八隻の大戦闘艦十二隻の大巡洋艦及び三十隻の驅逐艦を造ることに着手し、更に昨年より海軍大擴張の計畫あるや、マカロフ將軍は自己の把持する戰術論より、非装甲艦論を主張し、露國有数の海軍將校をコロンスタットに集めて一代の大演説を爲したり。

●將官會議 事は昨年三月十九日（露曆三月六日）にして、當時コロンスタットの將官會議に參與したるものは、海軍元帥アレキセーフ大公、海軍大臣フィルトフ大將、海軍參謀本部長アウエラン中將、及びデ、リーウロン、フ、バーゾフ、スクルドルフ、